

靈界物語 第六三卷 山河草木 寅の巻

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第六十三卷』愛善世界社

2008(平成20)年04月06日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2010年01月22日修正

〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵

目次

序歌 じよか
總説 そうせつ

第一篇 スダルマさんげつ
妙法山月

第一章 たま
玉の露 つゆ
〔一六〇八〕

第二章 スダルマさん
妙法山 さん
〔一六〇九〕

第三章 伊猛彦（一六一〇）

第四章 山上訓（一六一一）

第五章 宿縁（一六一二）

第六章 テルの里（一六一三）

第二篇 日天子山

第七章 湖上の影（一六一四）

第八章 怪物（一六一五）

第九章 超死線（一六一六）

第三篇 幽迷怪道

第一〇章 鷺と鴉（一六一七）

第一章	怪道 <small>くわいたう</small> 〔一六一八〕
第二章	五託宣 <small>ごたくせん</small> 〔一六一九〕
第三章	蚊熏 <small>かくすべ</small> 〔一六二〇〕
第四章	嬉し涙 <small>うれなみだ</small> 〔一六二一〕

第四篇 四鳥してうの別わかれ

第一章	波 <small>なみ</small> の上 <small>うへ</small> 〔一六二二〕
第二章	諒解 <small>りやうかい</small> 〔一六二三〕
第三章	峠 <small>たつげ</small> の涙 <small>なみだ</small> 〔一六二四〕
第四章	夜の旅 <small>よるたび</small> 〔一六二五〕

第五篇 神檢靈査しんけんれいさ

第一九章	仕込杖 <small>（一六二六）</small>
第二〇章	道の苦 <small>（一六二七）</small>
第二一章	神判 <small>（一六二八）</small>
第二二章	蚯蚓 <small>（一六二九）</small> の聲 <small>（一六二九）</small>

序歌じよか

此世このよを救すくふマイトレーヤ ボーヂーサトーヴ現あらはれて
 ウヅンバラチャンドラの體たいを藉か籍り シブカ（苦聖諦）サムダヤ（集聖諦）
 ニローダ（滅聖諦）マールガ（道聖諦） 苦集滅道四聖諦
 完美うまらに審細つばらに道説だうせつし 無明むみやうの世界せかいを照波せうはして
 マハー・ラシミブラバーサ マハーヱ（弘大）に開ひらかむと
 スーラヤ、チャンドラ世よに降くだし スメール（須彌）山ざんに腰こしをかけ

ジヤムブドヱゝーバ（全世界）を守らむと

アクシヨ―バヤ（阿閼如來）の天使を 前後左右に侍らせつ

現はれたまひし尊さよ 神が表面に現はれて

チャンドラ スーラヤ ㊦ マラブラバーサ スリー（日月淨明德佛）

サルワゝサト― ヴブリヤダルシヤナ（一切衆生喜見菩薩）

完全無缺の神國と いと平けく安らけく

治めたまふぞ有難き 仰げば高し神の國

大日の下のエルサレム 豊葦原の眞秀良場と

定め給ひて嚴御魂 國常立の大御神

豊國主の大御神 三五の月日と現れまして

再び清き神の代を この地の上に建設し

天の下なる神人が 暗き御魂を照しつ

黄金世界を樹て給ふ その神業を一身に

擔任したる瑞御魂 神素盞鳴の大神の

御命畏み齋苑館 清く仕ふる宣傳使

マハーカーシヤバ龜彦や ヤシヨードラーの音彦や

クンヅルボーチーサットワ梅彦が マンジユシリボーチーサットワ岩彦と

黄金姫のスヴァラナ 神の司や清照姫の

スウルナブラバーシヤ 初稚姫と相共に

梵天王のブラフマンサハームバテ 祀りて醜の御教を

四方に流布する魔の頭 カビラマハールシの大黒主を

言向け和し天界の大莊嚴や光明を

斯の土の上に築かむと 苦集滅道の荒浪を

しのぎて進む物語 龍の宮居に現はれて

神の使のウヅンバラ チヤンドラ爰に謹みて

世人のために述べ傳ふ ア、惟神々々

御靈幸はへ坐しませよ。

大正十二年五月二十九日 舊四月十四日

總説

靈界物語口述開始より、殆んど着手日數二百五十日を要して、漸く六十三巻を口述し終りました。天聲社の新築もこの物語出版のためでありました。去る二十五日始めて天聲社の二階の間に於て二席を口述し、今日漸く完結する事となりました。

瑞月は近頃大變に身體を痛め、前後二ヶ月間口述を怠りました。それ故豫定の巻數には達しなかつたので、實に遺憾とする所であります。未だ病氣はかばかしからず、又明日頃より轉地療養をなし、全快を待つて神の御許しあらば後を續ける考へであります。併し今日迄の口述せし所を熟讀なし下さらば、凡て神界の御經綸も大神の御心も判然する筈でありますから、是にて口述が止まつても、神教を傳ふる點に於ては、餘り不便を感じずる事は有るまいと思ひます。ア、惟神靈幸倍坐世。

この上^{うへ}は神^{かみ}の御旨^{みむね}に任^{まか}すのみ
しこの妨^{さまた}げ繁^{しげ}き世^よなれば。

大正十二年五月廿九日 舊四月十四日 於天聲社

第一篇 妙法山月スダルマさんげつ

第一章 玉の露たまのつゆ（一六〇八）

天地萬有悉くてんちばんいうごとく 靈力體の三元をれいりよくたいのさんげんを

與へて創造なし給ひあたへてさうざうなしたま 各其所を得せしめしおのおのそのしよえ

國の御祖の大御神くにのみおやのおほみかみ 國常立の大神はくにとこたちのおほかみ

大國治立大神のおほくにはるたちおほかみ 貴の御言を畏みてうづのみことかしこ

大海原の中心地おほうなばらちうしんち 黄金山下にあれましてわうごんさんか

天地百の生物をあめつちももいきもの いと安らけく平けくやすたひら

守らせ給ひ嚴かにまもたまおこそ 珍の掟を定めましうづのおきてさだ

神と人との踏みて行くかみひとふ 道を立てさせ給ひしがみちたたま

日は行き月たち星移り
世はくれ竹のおひおひに

天足の彦や胞場姫の
醜の身靈ゆなり出でし

八岐大蛇や醜神の
いやなき業に畏くも

珍の聖地を後にして
神の仕組と云ひ乍ら

大海中に浮びたる
自轉倒島にかくれまし

國武彦と名を變へて
此世を忍び曙の

日の出の御代を待ち給ひ
女神とあれし瑞御靈

豊國姫の大神は
夫神の命のなやみをば

居ながら見るに忍びずと
豊葦原の中津國

メソポタミヤの山奥に
永く御身を忍びまし

五六七の御代を待ち給ふ
大國常立大神は

嚴の御靈と現はれて
四方久方の天盛留向津媛

御稜威も殊に大日婁女貴
女神となりて諾册の

二神の間に生れまし
豊國姫の大神は

神素盞鳴の大神と
現はれ給ひ天地を

おのもおのにも持ち分けて
守らせ給ふ折もあれ

魔神の猛り強くして
岩の根木根立百草の

片葉も言向ひ騒ぎ立て
豊葦原の瑞穂國

再び常世の暗となり
神素盞鳴の大神は

この惨状を如何にして
鎮めむものと村肝の

御心千々に碎かせつ
朝な夕なに憂ひまし

山河草木枯れ果てて
修羅の巷となりにけり

父とあれます伊邪那岐の
皇大神は天空ゆ

下らせ給ひて素盞鳴の
珍の御子に打向ひ

憂ひ歎かすその理由を
尋ね給へば瑞御靈

完全に詳細に世の状を
語らせ給ひ我は今

母のまします月の國
罷らむものと思ひ立ち

この世の名残に泣くなり
答へ給へば父の神

いたく怒らせ給ひつつ
胸に涙を湛へまし

大海原を知食す
權威なければ汝が尊

根底の國に至れよと
いと嚴かに宣り給ふ

千萬無量の悲しみを
胸に湛へて父神は

日の若宮にかへりまし
神素盞鳴の大神は

姉大神とあれませる
嚴の御靈の大日婁女

天照神の御前に
此の世の名残を告げむとて

上らせ給へば山河は
一度に動み地は揺り

八十の枉津の叫ぶ聲
天にまします大神の

御許に高く響きけり
天照します大神は

此有様をみそなはし
弟神の來ませるは

必ず汚き心もて
吾神國を奪はむと
備へせよやと八百萬

攻め寄せたるに間違ひなし
弓矢を飾り堅庭に

神を集へて劍太刀

弓腹振り立て雄猛びし 待ち問ひ給へば素盞鳴の

瑞の御靈の大神は 言葉静に答へらく

我は汚き心なし 父大神の御言以て

母の御國に行かむとす いとも親しき我姉に

只一言の暇乞ひ 告げむが爲に上りしと

云はせも果てず姉神は いと嚴かに宣らすやう

汝の心の清きこと 今この場にて證せむ

云ひつつ弟素盞鳴の 神の佩かせる御劍を

御手に執らせつ安河を 中に隔てて誓約ます

この神業に素盞鳴の 神の尊は瑞御靈

清明無垢の御精神 いと明かになりにけり

神素盞鳴の大神は 姉のまかせる美須麻琉の

玉を御手に受取りて 天の眞名井に振り濺ぎ

奴那止母母由良に取由良し 狭嚼みに咬て吹き棄つる

伊吹の狭霧に五御魂 現はれませしぞ畏けれ

姉大神の御心は 初めて疑ひ晴れぬれど

天津神等國津神 容易に心治まらず

高天原は忽ちに いと騒がしくなりければ

姉大神は驚きて 天の岩戸の奥深く

御姿かくし給ひけり 六合忽ち暗黒と

なりて悪神横行し 大蛇曲靈のおとなひは

狭蠅の如く充ち沸きぬ ここに神々寄り集ひ

岩戸の前に音楽を 奏でまつりて太祝詞

宣らせ給へば大神は 再び此世にあれまして

六合ここに明け渡り 榮光の御代となり初めぬ

斯くもかしこき騒ぎをば 始めし神の罪科を

神素盞鳴の大神に 千座の置戸を負はせつつ

高天原より神退ひ 退ひ給ひし歎てさよ

あめつち いちじ は 明けく
 天地一時は明けく
 いと 穩かに 治まりし
 いと穩かに治まりし
 ごと おもて 見えつれど
 如く表面は見えつれど
 とよあしはら 國々は
 豊葦原の國々は
 まがみ たけ たけ
 魔神の健び猛くして
 ふたた 再び修羅の八巷と
 やちまた
 なり 變りたる 慘状を
 さんじやう
 見るに忍びず 瑞御靈
 みづみたま
 く に たけ ひこ
 國武彦と相共に
 あななひけう
 三五教を開きまし
 ひら
 みやま おく
 深山の奥の時鳥
 はっせんやこゑ
 八千八聲の血を絞り
 しほ
 この土の上に安らけき
 みろく
 五六七の御代を建設し
 けんせつ
 やまたをろち しこがみ
 八岐大蛇や醜神を
 いくことたま
 生言靈に言向けて
 ことむ
 あね みかみ たてまつ
 姉の御神に奉り
 よ わざはひ
 世の災を除かむと
 のぞ
 こーカス山やウブスナの
 やま を
 山の尾の上に神館
 かむやかた
 み たま
 見立て給ひて御教を
 ひら
 開き給ひし尊さよ
 たふと
 やまたをろち わけみたま
 八岐大蛇の分靈
 かかりて此世を亂し行く
 このよ みだ
 此世の枉を拂はむと
 こころ
 心も清き宣傳使
 きよ
 先づ第一に言向けて
 だいいち
 ことむ

數多派遣し給ひしが

瑞の御靈の御娘

五十子の姫の夫とます

玉國別の音彦に

心の空も眞純彦

教を傳ふる三千彦や

伊太彦司を添へ玉ひ

ハルナの都に遣はして

神の恵を人草の

身魂に照らし給はむと

任せ給ひしぞ尊けれ。

玉國別の宣傳使

三人の司と諸共に

河鹿峠を打渡り

懷谷の山猿に

苦しみ乍ら神力に

守られ祠の神の森

とどまり病を養ひつ

珍の宮居を建て終り

祝詞の聲も勇ましく

御前を立ちて山河を

渡り漸くテルモンの
 親と妹との危難をば
 デビスの姫を三千彦の
 湖水を渡り種々の
 アヅモス山のバーチルが
 山に隠れしタクシヤカの
 サーガラ龍王救ひつつ
 龍王の手より受取りて
 草鞋に足をすり乍ら
 御供と共にエルサレム
 日も黄昏れて道の邊の
 思ひも寄らぬ法螺の貝
 比丘の司に廻り會ひ
 スダルマ山の山麓を
 館に入りてデビス姫
 救ひて神の御名を擧げ
 妻と定めてテルモンの
 珍の神業なし遂げて
 館に立ち寄りアヅモスの
 龍王始め妻神の
 夜光の玉や如意寶珠
 眞澄の空の夏の道
 伊太彦デビス四柱の
 聖地を指して進み行く
 祠の前に立寄れば
 鬼春別の治道居士
 ここに一行六人は
 右に眺めて辿りつつ

聲も涼しき宣傳歌
四邊の山河轟かし
空氣を清めて進み行く。

(大正一二・五・一八 舊四・三 於龍宮館 北村隆光録)

第二章 妙法山(一六〇九)

夏樹生茂り緑したたるスダルマ山の山道の入口に甲乙二人の男が腰打ちかけて、
杉の手を休めて雑談に耽つてゐた。

甲「オイ兄貴、吾々もせめて人並の生活が爲たいものだなア。朝から晩まで山深く分け入つて、杉ばかりやつて居つても汗を搾る許りで何時も金槌の川流れ同様、
天窗の上りやうが無いぢや無いか。今日の人間は文化生活を以て最上の處世法としてゐるが、吾々も自然とやらを征服する文化生活に入つて安樂な生涯を送りた

いものだなア[㊦]

乙[㊦] 吾々^{われわれ}は文化^{ぶんくわ}生活^{せいくわつ}といふものを轉用^{てんよう}して人格^{じんかく}問題^{もんだい}に當^あてたいと思^{おも}ふのだ。バラ

モン教徒^{けうと}は煩惱^{ぼんなん}即菩提^{そくぼだい}だなどと氣樂^{きらく}さうな事^{こと}を言^いつてゐるが、夫^{それ}は悟道^{ごだう}の境地^{きやうち}に

立^{たち}至^{いた}つた上根^{じやうこん}の人間^{にんげん}の言^いふことで普通^{ふつう}の人間^{にんげん}はソナナ輕々^{かるがる}しい譯^{わけ}には行^ゆかぬ。逆^{とて}

も人格^{じんかく}を磨^{みが}いて向上^{かうじやう}する事^{こと}は不^ふ可^か能^{のう}事^じだよ。絶^たえず内觀^{ないくわん}自^じ省^{せい}して、肉^{にく}的^{てき}本^{ほん}能^{のう}を征^{せい}

服^{ふく}しておかねばならない。靈體^{れいたい}共^{とも}に自然^{しぜん}であることは無^む論^{ろん}だがこの兩^{りやう}者^{しや}を並^{へい}行^{かう}さ

す事^{こと}は困^{こん}難^{なん}だ。瑞^{みづ}の御^み靈^{たま}の聖^{せい}言^{げん}には、「體^{たい}欲^{よく}に富^とめる者^{もの}は神^{かみ}の御^み國^{くに}に入^いること難^{かた}

し。富^{ふう}貴^きの人の神^{かみ}の國^{くに}に入^いるよりは蛤^{はまくり}を以^{もつ}て大^{だい}海^{かい}を替^かへ干^ほす方^{ほう}却^{かへつ}て易^{やす}かるべし。

人は二人^{ふたり}の主人^{しゅじん}に仕^{つか}ふること能^{あた}はず、故^{ゆゑ}に人も神^{かみ}と體^{たい}欲^{よく}とに兼^{かね}仕^{つか}ふることを得^えず

と教^{をし}へられてある。實^{じつ}に深^{しん}遠^{えん}なる教^{けう}訓^{くん}ではあるまいかなア[㊦]

甲[㊦] 神^{かみ}さまもト判^{わか}らぬぢや無^ないかエーン。よく考^{かんが}へて見^みよ。吾^{われ}々^{われ}の樣^{やう}な貧^{びん}乏^{ぱふ}人^{にん}

は聖^{せい}典^{てん}を研^{けん}究^{きゆう}いな研^{けん}究^{きゆう}と言^いつては勿^{もつ}體^{たい}ないかも知^しらぬ、拜^{はい}誦^{しやう}して心^{しん}魂^{こん}を磨^{みが}く餘^よ裕^{ゆう}

がないが、富^{ふう}者^{しや}となれば日^{にち}々^{にち}遊^{あそ}んで暮^{くら}す暇^{ひま}が在^あるのだから、自^じ由^{いっ}自^じ在^{ざい}に聖^{せい}典^{てん}を拜^{はい}

誦^{よう}したり、又^{また}その密^{みつ}意^いを極^{きは}め得^うるの便^{べん}宜^ぎがあるから、神^{かみ}の國^{くに}に入^いるものは、富^{ふう}者^{しや}

であることは當然の歸結ではないか』

乙「ソウ言へばさうだが人間と言ふものは吾々の考へ通りにゆくものではない。得意時代の人間は到底そんな殊勝な考への浮ぶものではないよ。「家貧しうして親を思ふ」とか謂つて、吾々の様なものこそ、精神上の慰安を求め、向上もし神に継らむとするものだが、容易に得意時代には貧乏人の吾々だとして、そんな好い考へは起るものではないよ。勿論瑞の御魂様だとして、絶對的に富そのものを無視された譯では無からうが、斯んな教訓を與へなくては成らない所以は、人間の弱点といふものは凡て物質の奴隸となり易いからだ。同じ富を求むるにしても、我欲心を満足さすために求むるものと、神の大道を行はむがために行ふものとは、其内容に於てもその精神に於ても、天地霄壤の相違があるだらう。苟くも人間としての生活に、物質が不用なる道理は絶對にない。何處までも經濟觀念を放擲することは所詮不可能だ。然るに凡ての神敎の宣傳使が、口を揃へて禁欲主義や寡欲主義を高潮して居る所を見ると、其處に何等かの深意を發見せなくてはなるまいと思ふのだ』

甲 「君の説にも一理あるやうだ。然し吾々は何とか努力して人並みの生活だけは爲なくてはならないが、」倉廩充ちて禮節を知り、衣食足りて道を歩む」とか言ふから、肉的生活のみでは肉體を具へた人間としては實に腑甲斐ない話だ。吾に「先づパンを與へよ、然して後に大道を歩まむ」だからなア」

甲 「君の説にも一理あるやうだ。然し吾々は何とか努力して人並みの生活だけはせなくてはならないが、」倉廩充ちて禮節を知り、衣食足りて道を歩む」とか言ふから、肉的生活のみでは、肉體を具へた人間としては實に腑甲斐ない話だ。吾に「先づパンを與へよ、然して後に大道を歩まむ」だからなア」

乙 「人はパンのみにて生くるものではないと共に靈のみにて生くるものにあらず」と吾々も言ひたくなつて來るのだ。併しそこは人間としての自覺が必要だ」

甲 「自覺も必要だが、現代の人間の自覺なるものは果して人並以上に立脚して居るだらうか。靈的自覺に立つて居るだらうか。それが僕には杞憂されて成らないのだ。今日の人間の唱ふる自覺といふ奴は月並式の自覺様だからなア」

乙 「君の云ふ通り有名無實の自覺、月並の自覺だとすれば、忽ち自覺と自覺とが

互たがひに相衝突あひしつうつを來きたして、平和へいわを攪亂かくらんすることになるだらう。現代げんだいのやうに各方面かくほうめんに始終しじう鬪争とうさうの絶たえ間まがないのは自覺じかくの不徹底ふてつていといふことに歸因きいんしてゐるのだらう。

併しかし凡すべての物ものには順序じゆんじゆがあり階段かいたんがあるからして、自覺じかくの當初たうしよは何れにしても幾いく

何かばくの動搖どうえうと鬪争とうさうとは免まぬれないと云いふ點てんもあるだらう」

甲かふ「さうだから僕は現代げんだいの自覺じかく様さまには物足ものたらなくて拜跪はいき渴仰かつがうする事ことが出来できないのだ。人格じんかくの平等べうどうだとか個性こせいの尊重そんちよつだとか八釜やかまし敷しく騒さわぎ廻まはる割合わりあひに、事實じじつとしての態度たいどが實際じつさいに醜みにくうて鼻持はなもちがならないのだ。然しかし中なかには一人ひとりや二人位ふたりぐらゐは立派りつぱな態度たいどの人間にんげんもあるだらうが、概括がいくわつして見みると、贊成さんせいの出来できない人間にんげんばかりだからなア」

乙おつ「ウンそれもソウだねー。現代げんだい人の唱となふる人格じんかくの平等べうどうと言いふものは、實じつに怪あやしいものだ。僕ぼくもその事ことは克よくく認みとめてゐる一人いちにんだ。人格じんかくの平等べうどうと言いへば高位かうゐの人間にんげんを低ひくい所ところへ引下ひきおろして、「お前まへと俺おれとが同格どうかくだ、同じ神かみの分靈ぶんれいだ分身ぶんしんだ」と言いつたり、甚はなはだしいのは、上流者じやうじゆうしやや官吏くわんりの前まへに尻しりを捲まくつて、威張ゐばることだと考かんがへたりする奴やつが多いのだ。その癖くせに自分じぶんより下位したの人間にんげんから夫それと同じ様やうな事ことをしられると、「人ひとを馬鹿ばかにするな侮辱ぶじよくを加くはへた」と言いつて立腹りつぷくする奴やつばかりだ。自由じゆうと

言へば厭な夫を振捨てて好きな男と出奔したり法律も道徳も義理も人情も踏躪ることだと思つて居る奴ばかりだ。而も夫れほど自由を要求したり又主張したりするのなら、他人に對した場合でも自由を與へるかと言ふと、事實は全然その反對のことを行るもの許りだ。

アナーキズムを叫ぶ位なら、自分の家に泥坊が這入つても歡待して行きさうなものだのに、眞先に警察署に訴へに行く奴許りだ。「經濟組織は、コンミュニズムに爲なくては可けない」と言つて、八釜しく主張して居るから、「それなら先づ君の財産から放り出せ」と言ふと、「それは眞平御免」と言ふやうな面付きで素知らぬ顔をして、他人に出させて共産にしようと言ふ奴許りだ。ある二人の青年ソシアリズム崇拜者が鶏肉のすき焼を食ひにいつて其割前を支拂ふ時に相手の一人が「金が足りないから、君の金を出して支拂つて濟ませて呉れ」と言つたら、「ソナ事は出来ない」と斷つたので相手の一人が、「夫れは君の平素の主張に悖るでないか」と突込むと、「いや夫れと是とは別問題だ」と言つて逃げて仕舞つたといふ話だ。兔角人間といふ奴は人に對しては種々の要求を起すが、その要

求を自分にされたら何うだらう。果して應ずるだけの覺悟を以て居るだらうか。自分の立場が無産階級にあるからと言つて共産主義を叫ぶのでは本當のもので無い。筆や舌の尖では何んな事でも立派に言はれるが、事實その事件が自分の身に降りかかつた時に實行することが出来るだらうか。十中の十まで有言不實行で、日頃の主張を撤廢せなくてはならぬやうになるのは、可なり澤山な事實だからな

ア

甲「本當に虚偽虚飾の人獸ばかりの世の中だ。眞の人間らしいものは、かう考へて見ると一人も世界に無いと言つても好い位だ。文壇の名士カットデルは、世間に知られた自由思想家だったが、自分がアーメニヤとかへ旅行したその不在中に、女房のコール夫人にウユルスと言ふ若い美しい愛人が出来て、頻りに手紙を往復して居たのをカットデルが見附けて、その眞相を尋ねた所、コール婦人は平氣な顔で、「あなたに對する愛が無くなつたから、日頃の自由思想を實踐躬行して愛人の下へ行く心算です」と、ハツキリと答へて済まし込んで居たので、カットデル氏も色々と話合つた上、二人の戀愛を許してやつたが、さて愈コール婦人が家

内に居らなくなると、子供のためや其他の事が思はれて到頭日頃主義とする自由思想を捨て、人道的立場から愛妻コール婦人に反省を求めて、再び戻つて貰ふ事を頼んだといふぢやないか。人間位、勝手な奴はあつたものぢや無い、ア

ハ、ハ、ハ、

乙「オイ君、向ふの方から宣傳歌の聲が聞えて来たぢやないか。一寸聞き玉へ、神が表に現はれて善と悪とを立分ける」とか何とか言つてゐるやうだ」

甲「ウン如何にも宣傳歌の聲だ。併もあれは三五教の歌だ。吾々ウラル教徒も三五教の宣傳歌を聞くと、何んだか心持が好い。一つここに待ちうけて、何んとか人生問題に就て解決を與へて貰はふぢやないか」

乙「何程三五教の宣傳使だつて駄目だらう。無い袖は振る譯に行かぬからなア。

夫れよりも神力によつて、スーラヤ山の大蛇の岩窟にある寶玉を、手に入れる様

にせうではないか。何程大蛇が澤山居ると言つても、神力には叶ふまいからなア」

甲「別に三五教に頼まなくても吾々が平素信仰するウラル彦の大神様にお願すれば好いだらう」

乙「朝あさ夕ゆふウラル教けうの大神おほかみを念ねんじて見たみが、此頃このころのウラル彦ひこ様さまは貧乏びんぱふされたと思おもえ
て、根ねツから福ふくを與あたへて呉くれない、財産ざいさんを澤山たくさんにウラル（得うらる）教けうだと思おもつて
信仰しんかうしたのに、信仰しんかう以來いらいウラねば成ならぬウラメシ教けうになつて了しまつて社しゃ會くわいの地ち平へい線せん
下かに墜落つゐらくし斯かう杣人そまびととまで成なり下さつたのだから、僕ぼくは最早もはやウラル教けうは止やめたのだ。
併しかしスーラヤ山さんの珍寶ちんぼうを手てに入れいさして呉くれたら信仰しんかうを續つづけても好いいのだ。自じ分ぶん
が富者ふうしやの位地ゐちに立たつてからソロソロ　　コンミニズムの主張しゆちやうでもやつて、人にん間げん竝なみ
の生活せいくわつをやつて見みたいのだ」

甲「そんな危険きけんなことは止やめて、マア暫時しばらく今日こんにちの境遇きやうぐうに安やすんじ時節じせつを待まつたら何ど
うだ。何程なにほど珍寶ちんぼうが手てに入いつても生命いのちが無なくつちや仕方しかたが無なからうよ」

斯かく談はなす所ところへ玉國別たまくにわけ一行いっかうが宣傳歌せんでんかの聲こゑに足竝あしなみ揃そろへて近ちかよつて來きた。

玉國別たまくにわけ、眞純彦ますみひこ、三千彦みちひこ、デビス姫ひめ、伊太彦いたひこ、治道居士ちだうこじの一行いっかう六人ろくにんは漸やうやくにし
て、スダルマ山さんの登のぼり口ぐちまでさしかかつて來きた。例れいの伊太彦いたひこは先頭せんとうに立たつて聲こゑも
高たからかに宣傳歌せんでんかを謠うたつて居ゐる。山やまの登のぼり口ぐちの木陰こかげに二人ふたりの男をとこが腰打こしうちかけて何事なにこと
か囁ささやいて居ゐる。伊太彦いたひこは目敏めびとく之これを見みて、後振あとふり返かへり、

伊太「先生、夜前は祠の前でコソ泥に出遇ひましたが、あれ御覽なさい。彼處にも亦ざつと二匹、コソ泥が出現致しましたよ。昨日の奴と違つて、どこともなしに氣の利いた顔をして居ますわ」

玉國「ウン、如何にも立派な方が二人休んで居られるやうだ。あの方は決して泥坊ではあるまいよ」

伊太「夫でもバラモン教の云ひ草ぢやないが、人を見たら泥坊だと思へ」との誠めがあるぢやありませんか」

玉國「昨夜の泥坊に肝を潰し、精神錯亂して、目に觸るるもの一切が泥坊と見えるのだらう。滅多な事を云ふものぢやない。人を見れば皆神様だと思ふて居れば好いのだ。假令萬々一泥坊にした所で、吾々の身靈を研ひて下さるお師匠様だと善意に解するのだ」

伊太「夫れだと云つて、よく見て御覽なさい。ピカピカと光つた凶器を持つて居るぢやありませんか。彼奴は持凶器強盜かも知れませぬよ。一つ勇氣を出して泥坊と見當が付けば蹴散らして進むのですな。精神の麻痺した人獣には到底姑息な

治療法では駄目ですよ。モルヒネ注射か或は大外科手術を施すに限ります」

玉國「伊太彦、あれをよく見よ。お前の凶器と見たのは鉞ぢやないか、あれは屹

度杣人だ。天下の良民様だ」

伊太「鉞、否マサカさうでもありません。杣人に化けて夜前の泥的の親分が待

つて居るに違ひありませんわ」

玉國「どうも此男は俄に精神に異状を來たしたと見える。これや困つた事ぢやな。

伊太彦、まあ安心したがよいわ」

伊太「何と仰有つても私には確信があります」

玉國「亂暴な事をすると、宣傳使の帳を切り、根底の國へ落して仕舞ふが、それ

でもお前は構はぬ氣か」

「エ、仕方がありますね。男子が一旦齒から外へ出した以上は後へは引きませぬ。

何と云つても、あの猛惡なタクシヤ力龍王を言向け和した伊太彦司ですからなア。

孟子の言に「下となつて亂るれば刑せられ、上となつて亂るれば免かる」と云ふ

身勝手な世の中ですから、萬々一天則違反によつて根底の國へ落されても構ひま

せぬ。私はお師匠様の爲に天則違反になつた所で得心です。現在自分の師匠に危害を加へむとする悪人に對し看過する事が出来ませうか。「君憂ふれば臣勞し、上危ければ下死す」と云ふぢやありませんか。先生の危難を救ふて自分の身が滅亡しても夫は少しも恨みませぬ」

玉國「お前は私を疑つて居るのか、玉國別だつて泥坊か泥坊でないか位は一目見たら分つて居るのだ。聖人の言葉にも「臣は主に逆らはず」と云ふぢやないか」

伊太「臣となりては必ず臣たれ、併し君となりては必ず君たれ」と云ひますから、貴方も弟子の私が赤心を、師匠として承認して下さりさうなものですな」

玉國「臣能く主の命を承はるをもつて信となす……、ちつとは私の云ふ事も聞いたらどうだ」

伊太「何だか私は貴師が仰有る事が頼りないやうな氣がしてなりません。どうぞ暫く此方の云ふ通りにさして下さいませぬか」

三千「オイ伊太彦、些とはお師匠様の御命令も聞かねばなるまい。折角の功名手柄が水の泡になつたら惜しいぢやないか」

伊太「へん、御親切は有難う。デビス姫を奥様に貰ひ、おまけに先生に御親任をうけて眞純彦と二人が、夜光の玉や如意寶珠を懐に捧持し、得意の頂天に達した君達とはちつと違ふのだ。俺はこれから人を虐げる悪人や、驕慢な奴は、片ツ端から、もう言靈も使ひ飽いたから、此鐵腕を揮うて打ち懲らしてやる積りだ、構つて呉れな」

と云ひながら、五人を後に残り二人の怪しい男の前に走り寄り、大喝一聲、伊太「これや泥坊、吾輩を誰様と心得て居るか。勿體なくも三五教の宣傳使、神力無雙の玉國別の御家來の伊太彦さまだ。こんな所に出しやばつて、夜前の蒸し返しをせうと思つても駄目だ。この腕を見い。此の腕には特別上等の骨があるぞよ」

と威猛高になつて睨めつけた。二人はこの權幕に肝を潰し、中の一人が、甲「私等は、此近邊に住して居る杣人でカークス、ベースと云ふ者でムいます。朝から晩迄木樵が商賣でムいますが、あまり體が疲れたので、この廣い木蔭で息をやすめて世間話に耽つて居た所です。泥坊でも何でもありません。貴方は三五

教けうの宣傳使せんでんしの家來けらいだとか弟子でしだとか仰有おつしやいましたが、どうか私わたしの人格じんかくを調しらべて下ください。無暗むやみに人間にんげんを捉つかまへて泥坊呼どろぼうよばはりをなさるのは、ちつと貴方あなたのお職掌しよくしやうにも似合にあはぬぢやありませんか

伊太いた「ウン、エ、成程なるほど、これは誠に相濟あひすまなかつた。歩あるきもつて夢ゆめを見て居ゐたものだから、つい考かんがへ違ちがひを致いたしました。兔とも角魂かくたましひが脱ぬけたと見みえますわい。餘あまり玉たまが欲しいと思おもつて居ゐたものだから、「タマ」タマこんな失敗しつぱいをやらかしたのですよ

カークス「貴方あなたも矢張り玉たまが欲しいのですか。實じつの所ところは私わたしもその玉たまが欲しいので相談さうだんして居ゐたのです。そこへ三五教あななひけうの宣傳歌せんでんかが聞きえて來きたものですから御神力ごしんりきを貸かして頂いただいて、これからスーラヤ山の珍寶ちんぼうを手てに入れ、せめて人竝ひとなみの生活せいくわつを支し度たいものだと思おもつて居ゐた所ところです。どうか一つ其玉そのたまが手てに入るやうに貴方あなたのお師匠ししやうさまに御神力ごしんりきを與あたへて下くださるやうに頼たのんで下くださらぬか

伊太いた「ヤア其奴そいつは面白おもしろい。俺おれの先生せんせいは、ソレ今彼方いまあそこに見みえるが、玉國別たまくにわけと云いふのだから、玉たまを取とる事ことにかけ、少すこしもクニせずワケなく取とらして下くださるだらう。現げん

に俺の持つて居た玉を取り、否取違ひ遊ばした……のでも何でも無い。屹度聞いて下さるだらうよ。マア安心せい

ベース「ヤ有難う、これで安心しました。のうカークス、もう斯うなる以上はカークスには及ばぬ、スーラヤ山の珍寶の所在を申上げて、せめて一つ宛吾々の手に入るやうにして貰はふぢやないか」

カークス「どうかさう願ひたいものだなア」

伊太「其スーラヤ山と云ふのは何處にあるのだ」

カークス「此のスタルマ山を向ふへ渡りますと、スーラヤの湖といつて、可なり廣い水鏡が照つて居ます。其中に漂ふて居る岩山がスーラヤ山と云ひます。其山には岩窟があつて、ウバナンダと云ふナーガラシャー（龍王）が澤山の玉を蓄へ夜になると玉の光で全山が晝の如く輝いて居ます。其玉を一つ手に入れさへすれば、人間の一代二代は結構に暮されると云ふ高價な物ですが、多勢の人間が其玉を得むとして、行つては龍王に喰はれて仕舞ふのです。だから餘程神力が無いと其玉を手に入れる事は出来ませぬからなア」

伊太「アハ、ハ、ハ。お安い事だ。此伊太彦はアヅモス山に於て八大龍王の中でも最も凶悪なる、大身視毒龍王と云ふ豪い奴を往生させ、玉をボツ奪つたと云ふ勇者だから、ウバナナダ龍王位を言向和すは、朝飯前の仕事だ。エへ、ハ、ハ、」
と三人が一生懸命になつて玉取の話に靈を抜かれて居る。早くも玉國別一行は三人の前に近づき来り、此話を残らず聞いて仕舞つた。玉國別は伊太彦の背をポンポンと叩いた。

伊太「ア、玉さま否玉國別様でムいますか。どうぞ今度計りは改心を致しますから、今迄の御無禮をお許し下さいまして、ウバナナダ・ナーガラシャの玉を占領さして下さい。さうすれば私が捧持してエルサレムに参る荷物が出来すからな」

玉國別は道端の草の上にどつかと腰を卸し無言の儘考へて居る。

（大正一二・五・一八 舊四・三 於教主殿 加藤明子録）

第三章 伊猛彦（一六一〇）

玉國別は三人の話を聞いて雙手を組み何か思案に暮れてゐる。伊太彦は氣をい
らち、

「もし先生、千騎一騎の此場合、何を御思案してゐるのですか。貴方も玉國別と
名を頂いた以上は、今お聞きでせうが夜光の玉を、も一つ伊太彦にお取らせにな
るのも、お名前から云つても普通の事だと考へます。私も締めて居りましたが、
又俄に何だか勇氣が勃勃として参りました。諺にも「聞かざるは之を聞くに如か
ず、之を聞くは之を見るに如かず、之を見るは之を知るに如かず、之を知るは之
を行ふに如かず」と云ふ事がムいますから、玉の所在を聞いた以上は、何處迄も
實否をつきとめ、果して玉在りとせば、之を龍王の手より預つて歸らうと思ひま
す。そして龍王に三五の道を説き聞かせてやり度うムいますが、どうか私の特命
全權公使に任命して下さいますまいかな」
玉國「來りて學ぶを聞く、未だ行きて教ふるを聞かず」と聖人も云つて居る。

又お前の様に餘り強ばると失策をやらうまいものでもないから、些とジツクリしたら宜からう。ウバナダ龍王に教をするのは宜いが、ここへ言靈を以て招き寄せて教へてやつたらどうだ。こちらから行く必要はあるまい。諺にも「兵強ければ即ち滅び、木強ければ即ち折れる」と云ふ事がある。人間は控目にする事が肝腎だからな」

伊太「先生、貴方は卑怯な事を仰せられますな。「危きは疑ひに任すより危きはなし、危きものは其安を保ち、亡ぶるものは其存を保つ」と云ひますぜ」

玉國別は儼然として容を改め、徐に口を開いて、

「伊太彦さま、貴方は夜光の玉、夜光の玉と頻りに熱望して居られますが、形態ある玉は或は毀損し或は紛失する虞れが伴ふものですよ。夫れよりも貴方御自身が所持して居らるる内在の寶玉を穢さないやうに爲さいませ」

伊太「内在の玉とは何ですか。拙者はそんなものは持ちませぬがナア。貴師は夜光の玉をお持ちになつたものだから、ソナ平氣なことを謂つて居られるでせうが、苟くも三五教の宣傳使たるもの玉の一つ位有形的に所持せなくては、巾が利

かないぢや有りませぬか。現に、イク、サールの兩君さへも結構な水晶魂を神界より與へられて居られるでせう。拙者は如何しても、今回はお許しを戴いて大蛇の窟に飛び込み、一箇だけ手に入れて見たいものです。言依別命様も國依別様も琉と球との寶玉の威光によつて、アンナ立派な御神業を遊ばしたぢや有りませぬか。現にこの靈山に寶玉ありと聞いた以上は、實否は免も角も、一度探險と出かけたいたいものですなア」

玉國「伊太彦さま、御説は御尤もだが俺の話も一つ聞いて貰ひたい。先づ第一に僕が玉を所持して居るのは貴方の手を通して徳叉伽龍王から預かり、之を大神様に奉納せなくては成らぬ寶玉だ。この御用も僕から決して希望したのでは無い、惟神の攝理によつて自然に僕があづからなくてはならない様になつたのだ。天命ずる所だから、之を拒むことは出来ない。要するに龍王が歸順の至誠を表白する一つの證據品だ。之を僕が預かつて大神様に獻つて上げねば、龍王さまの解脱が出来ないからだよ。お前の様に自分の方から求めて寶玉を得ようとするのは、餘り面白くないと思ふがなア。伊太彦さま、僕が何時ぞやら比喩話を聞いたこと

を今思ひ出したから聞いて下さい。エ、と或る處に一人の男があつて、友人の所へ訪問した。そして大變に振舞酒に泥酔してグタグタに前後も知らず酔ひ潰れて了つた。その時にその親友は、或る官用のために急に出掛けることと成つたので酔ひ潰れて居る友人を色々と揺り起して見た所が、容易に目が醒めないので止むを得ず、眠つてゐる友人の衣服の裏へ非常に高價な玉をソツと繋いで出掛た。其後になつて酒に酔ひ潰れてゐた男は眼を醒まし、友人の繋いで置いて呉れた球のことは一向に氣が附かずに、親友のゐないのに驚き家を立出で、懷中無一物のため仕方がないので放浪して他國へ出かけて行つた。何と云つても無錢旅行をやつてゐるため衣食と住居に就て具さに艱難辛苦を嘗めた。然しその男は例の親友が自分の衣服の裏に、貴重なる寶玉を繋いで置いて呉れたことは夢にも知らず、依然として衣食に窮し所々方々と放浪し苦辛を嘗めた。所が餘程経つてから後のこと、偶然にも昔の親友に出會した。そこで今まで艱難苦勞したことの一部始終を涙と共に物語ると、友人は吃驚して、「君はマア何といふ馬鹿な眞似をしたのだらう。何もそれ程迄に苦まなくてもよかつたのだ。昔君と僕と酒を呑んだ際に君

は大變に酔つてゐたので知らなかつたけれ共、君に將來不自由なく安樂に暮させようと思つて、態々高價な寶珠を、君の衣服の裏に繋ぎ隠しておいた筈だ。まあ、一度調べて見給へ、今も當時の球は君の衣服の裏にきつと有るに違ひない。君がその球にさへ早く氣が附いてゐたら、決して今迄の様な苦勞なんか爲なくても可かつた筈だ。早く其の球を取り出して何なりと君に必用なものを買ふ資料にしたが可い」と親切に諭した。所がその男は今更のやうに氣がついて衣服の裏を查べると親友の言つた通り高價な球があつたので、男は友の懇情を涙と共に感謝し、それから後は安樂に暮したと謂ふことだ。然し伊太彦さま、これは譬話だから有形の寶玉ではない。人間が本來具有せる内在の神でもあり靈的の寶玉だ。そして球を繋いで呉れた親友と云ふのは、吾々に神の性能あることを知らして下さつた瑞の御魂の救ひ主、神素盞鳴尊様だ。又酒と云ふのは名利女色等の際限なき欲望のことだ。そして酒に酔ひつづれた男と云ふのは、果して何人であらうか」

伊太「先生ソナ事は三十萬年未來に於て月照彦様が釋迦と現はれて、御説きになつた法華經の七大比喻の中に記してある文句ですよ。内在の玉は既に已に認め

て居ります。併し世界は顯幽一本とか靈肉一致とか云つて、内外に玉が必用ぢやありませんか」

玉國「ア、困りましたなア。到底拙者の言靈では伊太彦砲臺の陷落は不可能かも知れぬ。治道様、貴方一つ援兵を繰出して下さいな。何うやら玉國別の軍勢は旗色が悪くなつた様です」

治道「伊太彦さま、先づ冷靜にお考へなさいませ。現在の吾々お互を神直日大直日の神鏡に照らして反省して見ると、今玉國別様の御言葉の酔ひ潰れの男とは、若しや自分共の事を仰有つたのでは在りますまいか。人間は兔角忘れてはならない事を忘れたり、忘れて可い事を忘れないものです。今私達は肉團の胸の中に高價な珠を持ち乍ら忘れ込んで了つて居るのです。又その珠を用ゆることもせず徒に形ある寶に心酔して、肝腎の靈魂を失つて居るのでは有りますまいかなア」

伊太「……」

玉國「魯の哀公は、「人の好く忘るるものあり、移宅に乃ち其妻を忘れたり」といつた所が、孔子は亦、之に對して「また好く忘るること此より甚だしきあり。」

桀紂は乃ち其身を忘れたり」と皮肉を言つたと言ふが、桀と紂とは支那の未來の暴君で、酒地肉林の淫樂に耽つて、遂にその身と國家とを失つた虐主である。何が一番大きな忘れものだと言つても、自分を忘れる程、大きい忘れものは無からう。人間の弱點は兎角この忘れる筈のもので無い自分を忘れてゐる場合が多いものだ。桀や紂の如く暴君ならずとも、金錢や名譽や酒色の暴君となつて何時も本來の我を忘れてゐるのだ。伊太彦さまの靈肉一致説も亦一理ある様だが肝腎の御魂の置所を忘れては居ないだらうかなア」

伊太「御心配下さいますな、拙者は神界から直接内流があつて命令を受けてゐるのです。何が御都合になるか判りませぬからなア」

玉國「神界からの内流とある以上は、吾何をか言はむやだ。そんなら伊太彦さま、玉國別はこれ限り何も申しませぬ。自由に神示の御用をなさい。人間の分際として神の御經綸は到底測知する事は出来ませぬからなア」

伊太「さすがは先生だ。有難うエへ、。サア、お許しを得た以上は、之から逸早くスダルマ山の嶮を越え、カークス、ベースの勇士を従へ旗鼓堂々としてスー

ラヤの湖に永久に漂ふ寶の山、スーラヤ山の岩窟に攻め寄せ、ウバナンダ龍王を言向け、夜光の玉を貢がせ、三人轡を竝べて黄金山に參上り、天晴功名手柄を致すでムらう。者共、吾に従へ」

と云ひ乍ら肩肱怒らし、カークス、ベースの兩人を引率れ、玉國別一行に別れ、「何れエルサレムにて御面會」と一言を残し、意氣揚々として、カークスに間道を教へられ足早に進み行く。

後見送つて玉國別は打笑ひ、

「アハ、々々、イヤ、面白い男だ。之で伊太彦の使命も果せるであらう。併し乍らスーラヤ山の龍王は非常に猛惡神と聞いて居る。どうも伊太彦一人にては心許ない。眞純彦さま、その他皆さま、之からそろそろ時機を見圖らひ應援に參りませうか」

治道「謹んでお伴いたしましたませう。伊太彦さまは随分快活な人ですな。拙者は非常に伊太彦崇拜熱が高まつて參りましたよ。アハ、々々、」

眞純「材に任じ能を使ふは務めを濟す所以なり、物を濟す所以なり」と云つて、

流石は玉國別様だ。適材を適所にお使ひ遊ばす、その御明察には感じ入りました。玉國「伊太彦さまは本當に偉いですよ。最前から彼んな事を云つてみました。が神界の御經綸によつて神懸になつてゐたのです。諺にも「死を知るは必ず勇なり。死するは難きに非ず、死に所するは難し」と云つて、劍呑な所を好んで神界のために行かうとする、その精神は天晴なものですよ」

三千「伊太彦さまは普通の人間ぢやありますまいね」

玉國「普通の人間ならば如何してタクシヤ力龍王を言向和す事が出来ませう。やがて靈の素性が分るでせう。私も今初めて非凡の神格者なる事を……恥し乍ら悟つたのです、アハ、ハ、ハ、」

デビス「サア、皆様、ボツボツ参りませうか」

「宜しからう」

と一同は油蝉の鳴く炎天の山道を喘ぎ喘ぎ登り行く。

(大正一二・五・一八 舊四・三 北村隆光録)

第四章 山上訓（一六一）

玉國別の一行は スダルマ山の麓にて

伊太彦徒弟に立別れ 焦つく如き炎天の

音の名高き急坂を 汗をたらたら絞りつつ

迦陵嚩伽の鳴く聲に 慰められつ登り行く

見渡す限り野も山も 緑彩どる夏景色

眺めも飽かず頂上に 黄昏ちかき夕の空

漸く辿りつきにけり。

眞純「お蔭によつて此急坂を漸く無事に登つて参りました。今夜は月を枕に草の褥、蒼空の蒲團を被つて安けき夢を結びませう。天空快闊一點の暗雲もなく、星は稀に月の光は吾等一行を照らし守らせたまふ有難さ愉快さ、旅をすればこそ、

こんな結構な恵の露に霑ふ事が出来るのですなア」

三千「本當に愉快だ。スダルマ山の峠の頂上に月の光を浴びて寝ると云ふ事は、

實に爽快の氣分に漂はされる。四方の山野は宏く遠く展開し、西南方に當つてスー

ラヤの湖は鏡の如く月に輝き恰も天國のやうだなア。先生是からは下り坂、今晚

は此處で寝む事に致しませうか」

玉國「本當に有難い事だ。此處で一夜の雨宿り、恵の露を浴びて靈肉共に天國に

進まう。併し乍ら先づ第一に吾々の務めを果し、神様に感謝の言葉を奏上し、そ

れから悠りと話でも交換して華胥の國に入らうぢやないか」

三千「さう願へば實に有難いです」

と茲に一同は聲も高らかに、スダルマ山の谷々の木魂を響かせ天津祝詞を奏上し、

終つて蓮の實を懷より出し夜食にかへ四方八方の話に時を移し、且つ歌など詠ん

で楽しんで居る。

玉國別「大空に輝く月も安々と

傾かたむきたまへば 躰やがて明あけなむ。

此この景色けしき天津あまつ御國みくにか 樂園らくえんか

何なんに譬たとへむ 術すべもなければ 』

眞ます純み彦ひこ 』 スダルマの山やまの尾上をのへに來きて見みれば

いよいよ高たかき月つきの輝かがやく。

眞ます澄み空そら星ほしはまばらに輝かがやけど

月つきのみ獨ひとり世よを知しろ 召めす 』

三み千ち彦ひこ 』 大空おほそらに星ほしはみちけり 三五あななひの

月つきの光ひかりも天てん地ちにみちぬ。

みちみちし神かみの御み稜いづ威づを只ただ一人ひとり

頂いただきにけり三千彦みちひこの胸むねに。

さりながら天津御空あまつみそらに照てり渡わたる

玉國たまくに別の惠めぐみ忘れじ

治道ちだう 『三五あななひの神かみの司つかさと諸もろとも共に

伊都いづのみやこに行ゆくぞ樂たのしき。

村肝むらぎもの心こころに宿やどる曲神まががみも

逃にげ散ちりにけり月つきの光ひかりに

デビス姫ひめ 『師しの君きみの御跡みあと慕したひて背せの君きみと

漸ちづく登のぼりぬ戀こひの山路やまぢを。

見渡みわたせば吾故郷わがふるさとは霞かすみけり

テルモン山の雪のみ見えて

治道 『ベル、バット軍の司は今いづこ

早や泥棒となり果てし彼

三千彦 『吾が寝ねし隙を窺ひ拔足に

近よりバット首を掻かなむ。

心して今宵一夜は眠るべし

ベルとバットの曲のありせば

玉國別 『ベル、バット如何に力は強くとも

吾^{われ}には神^{かみ}の守^{まも}りありけり。
身^みの外^{そと}の仇^{あだ}に心^{こころ}を焦^{こが}すより
吾^{わが}身^みの中^{うち}の仇^{あだ}を恐^{おそ}れよ

デビ^デス^ス姫^{ひめ} 皇^{すめ}神^{かみ}と吾^{わが}師^しの君^{きみ}の在^ます上^{うへ}は
何^{なに}か恐^{おそ}れむ露^{つゆ}の夜^よの宿^{やど}も

眞^ま純^{すみ}彦^{ひこ} いざ來^{きた}れべ^べルもバツトも曲^{まが}津^つ見^みも

生^{いく}言^{こと}靈^{たま}に服^{まつろ}へて見^みむ。

大^{おほ}空^{そら}に輝^{かがや}く月^{つき}の影^{かげ}見^みれば

吾^{わが}心^{こころ}根^ねの恥^{はづ}かしくなりぬ

斯く互に歌ひ終り、蓑を敷き雑談に耽つた。

治道「拙者の部下に使つて居たべル、バツト其外の連中が軍隊を放れて猛惡な泥坊となり、四方に放浪して數多の人間を苦しめるのを思へば、早や私は立てても居ても居られないやうな苦しい思ひが致します。どうしても人間は境遇に左右せらるるものと見えますなア。吾々は自分の罪は申すも更なり、部下一同の罪を贖ふために將軍職を廢し、治國別様の御教によりて三五教の教の子となり、比丘となりてビクトル山に根據を構へ同僚三人と共に交る交る天下を遍歴して居ますが、思へば思へば神様に對し恥かしい事です。かう云ふ部下が出来たのも全く私の罪でムいます」

と述懐を述べ、吐息をついて涙に沈む。玉國別は氣の毒さに堪へやらぬ面持にて言葉靜かに、

「治道居士様、必ず御心配なさいますな。現在親子の間でも、體は生んでも魂は生みつけぬと云ふ譬がムいます。決して貴方の罪ではムいませぬ。其人々の心の垢によつて種々と迷ふのですよ。吾々人間の精神といふものは、いつも健全なも

の^なでは無^ない。時々^{ときどき}一時的^{いちじてき}の變調^{へんてう}異常^{いじやう}が起^{おこ}るものでこの異常^{いじやう}には五^{いつ}つの型^{かた}があるやうです。

先^まづ

第一^{だいいち}は利欲^{りよく}に迷^{まよ}ふた時^{とき}だ。利欲^{りよく}に迷^{まよ}ふた時^{とき}は誰^{たれ}人も冷靜^{れいせい}な判断^{はんだん}と周密^{しうみつ}な考慮^{かうりよ}を失^{うしな}ひ易^{やす}いものだから、利^りを以^{もつ}て釣^つらるる事^{こと}が多いものだ。たとへば他人^{たにん}の物品^{ぶつぴん}を預^{あづ}かつて居^ゐるやうな場合^{ばあひ}にフト「是^{これ}が自分^{じぶん}のもので在^あつたらなア」と云^いふやうな心^{こころ}が浮^{うか}ぶと、責任^{せきにん}觀念^{くわんねん}などが無^なくなり、それを自分^{じぶん}が使^{つか}つた場合^{ばあひ}の状態^{じやうたい}などに眩^{げん}惑^{わく}されて自分^{じぶん}のものに爲^したり、また平生^{へいぜい}から欲^ほしい欲^ほしいと思^{おも}つて居^ゐるものが眼^めの前^{まへ}にあると前後^{ぜんご}を考^{かんが}へる暇^{いとま}がなくなつて萬引^{まんびき}をしたりするやうに成^なる、これは言^いふまでも無^なく副守^{ふくしゆせんせい}先生の發動^{はつどう}で、利益^{りえき}のために理智^{りち}を塞^{ふさ}がれ健全^{けんぜん}なる働^{はたら}きをせないといふ事^{こと}に原因^{げんいん}するものです。

第二^{だいに}の型^{かた}は、強^{つよ}い強^{つよ}い刺戟^{しげき}に接^{せつ}した時^{とき}だ。單純^{たんじゆん}な蔭^{かげ}口^{くち}位^{ぐら}み聞^きいても心^{こころ}を亂^{みだ}さない様な人間^{やうにんげん}でも、面^{めん}と向^{むか}つて手酷^{てきび}しく痛罵^{つうば}されると、吾身^{わがみ}を忘^{わす}れて豫期^{よき}しなかつた行爲^{かうゐ}をしたり、また普通^{ふつう}の異性^{いせい}に對^{たい}しては普通^{ふつう}の態度^{たいど}が保^{たも}たれ得^うる人間^{にんげん}が、美^{うつく}

しく化粧した異性の誘惑的な嬌態に接すると日頃の平静を破られやすいと云ふ様に同じ刺戟でもその程度によつて精神に異常な影響を與へる事がある。無論是等はその人間の先天的性質や後天的教養によつて程度の差が在ることは云ふまでもないが、副守先生の活動に原因する事が最も多いのである。又異常なる強烈な刺戟が人間の精神を異常ならしむると云ふ事は間違ひの無い事實だ。

第三の型は、焦心したり狼狽した時に起る精神の狀態だ。こんな時には精神の活動が安静を缺いで居るので精神的の作業にしても、又肉體的の作業にしても過失や失敗を招き易いものだ。少々許りの失策を隠さうと爲たために却て、その失策を大きくしたり、又少々の損失に狼狽した結果、大損失を招くやうな事をした事實は、能く世にあることだ。こんな時には副守先生の最も煩悶を續けて居た際である。

第四の型は、失意の時と得意の時だ。失意の時には精神の能率が減退して因循になり、消極的になつて努力を厭ふやうな傾きになり、得意の時には其反對に精神の能率が増進して快活になり、積極的になつて努力を惜まぬやうになるもので

す。従つて事業の成功と身體の健康慰安のある時と無い時、名譽を得た時と恥を受けた時とは其精神に及ぼす影響は全く正反對だ。そして精神が極端に沮喪した時は餘り消極的になる結果、次第々々に社會生活の敗殘者となり、極端に精神を發揚した時は積極に進み過ぎた結果、實力以上に仕事をやるやうに成つて冒險的や獨斷的に走るやうに成るものだ。これも副守先生の活動の結果と云つても良い位なものです。

第五は迷信に陥つた時に起る精神状態だ。不健全なる信仰を持つて居る人間は其他の方面の事物に就ては普通の判断を誤ることが無いにも拘らず、信仰の方面になると著しい誤解を來たすものです。従つてそれが難病治療に關する場合であつても又利欲に關して居る場合であつても、冷靜な判断や、前後の考へも廻らす餘裕がなくなつて遂に、幼者を誘拐したり、死體を發掘したり、或は七夕の夕に七軒の家から物を盗む様になるのです。以上の外に婦人が妊娠、月經などの生理的原因に基いて、一時的に精神に異常を來すことは言ふまでも無いことです。それだから凡ての人間は狂人の未製品だ豫備品だ、と言つたのだ。伊都の教祖や美都

の教主而已が突發性狂人では無い。本正副守護神さまの容器たる人間は實に不可思議なものです」

治道「有難う御座います。貴師の御説に由つて拙者も漸く安心致しました。人間

と云ふものは實に困つたものですなア」

三千「治道様、貴方も先生の御説で御安心なさつたでせう。私も一寸得心致しま

した。併し乍ら突張の無い蒼雲の天井の下に寝るのですから、何時頭の上に月が

落ちて来て目を醒ますか、ベル、バツトがやつて来て、玉を取るか分りますまい

が、そこは惟神にまかして寝ませうか。比丘さまは經が大事、拙者は明日が大

事だ」

治道「アハ、ハ、ハ。然らば御免蒙つて寝ませう」

茲に一同はスダルマ山の峠の頂上に、河も無きに白河夜船を漕いで眠つて仕舞

つた。一塊の黒雲天の一方に起るよと見るまに忽ち満天に急速力をもつて擴がり、

今迄皎々と照り輝いて居た月も星も皆呑んで仕舞つた。かかる所へ峠をスタス

タと登つて来た二人の覆面頭巾の男があつた。此男は云ふ迄もなく、ベル、バツ

トの泥棒である。二人は鼯の聲を聞きつけ小聲になつて、ベル「オイ、バット、何だか暗がりに、フゴフゴと云つたり、粥を炊くやうにグツグツグツと云ふやつがあるぢやないか、こんな所に畚賣りも登つて来る筈もなし、お粥を炊く婆も居る道理が無い。一體何だらうな、餘りバットせぬぢやないか」

バット「これや、ベル、大きな聲でシャー【ベル】ない、バットせないので俺達の豊年だ。此奴はどうしても人間の鼯だよ。一つそつと枕探してもやつてポロつたらどうだ。こんなよい機會は又とあるまいぞ」

ベル「枕探しと云つても、こんな山の上に枕をして寝て居る奴も無いぢやないか、探さうと云つても眞暗で一寸先も分りやしない。どうしたらよからうかなア」

バット「眞暗の中を探すからまつくら探しだ、暗がりに仕事が出来ないやうな泥棒が何になるかい」

治道居士は横になつた儘一目も寝ず、玉國別一行の保護の任に當つて居た。夫故ベル、バットの囁き聲を残らず聞いて居る。そんな事とは知らぬ兩人は聲低に

尚も囁きを續けて居る。

バット「オイ、鬼治別將軍も、隨分耄碌したものでぢやないか。あれだけ權要な地位を放り出して身窄しい比丘となり、昨夜も昨夜とて祠の森に寢て居たぢやないか。いい馬鹿だなア。大方彼奴は發狂したのかも知れないねえ」

ベル「そんな事は云ふだけ野暮だよ。喇叭を法螺貝にかへ三千の部下を棄て、只一人墨染の衣を身に纏ひ殊勝らしく乞食に廻ると云ふのだから大抵極つて居るわ。あいつは治國別と云ふ極道宣傳使に靈をぬかれ、呆けて仕舞つたのだよ」

治道居士は一つ喝かしてやろうと、法螺貝を口に當て、ブウブウと吹き立てた。寢耳に水の法螺の聲に二人は驚きドスンと其場に尻餅をつき慄い戦いて居る。治道居士は闇の中から細い作り聲をしながら、

「諸行無常是生滅法、生滅滅已寂滅爲樂」

と稱へてみた。

バット「オイ、ベル彼奴は法螺の化者だ、俺達に「わざ」をしようと思つてあんな事を吐きやがる。一つ此方にも武器があるのぢやから對抗せなくてはなるまい。

かう云ふ時には悪事災難除けに自在天大國彦命様のお助けを蒙るために陀羅尼を稱へるに限つて居る。』
ベル「泥棒が陀羅尼を稱へても神様は聞いて呉れるだらうかなア」
バット「きまつた事だ。是から俺が化物に對抗して見るつもりだ。

イテイメー イテイメー イテイメー

イテイメー イテイメー ニメー

ニメー ニメー ニメー

ニメー ルヘー ルヘー

ルヘー ルヘー スッヘー

スッヘー スッヘー スッヘー

スッヘー スワッハー

ベル「そりや何と云ふことだい。妙なことを吐くぢやないか。痛いわい 痛いわ

い 痛いわい なアんで」

バット「これは陀羅尼品の文言だ。是を義譯すれば、「是に於て 斯に於て 爾

樓^ろけ^い 樓^ろけ^い 樓^ろけ^い 樓^ろけ^い 泥^で履^び 泥^で履^び 泥^で履^び 泥^で履^び 泥^で履^び 伊^い提^て履^び 阿^あ提^て履^び 伊^い提^て履^び 伊^い提^て泥^ん 伊^い提^て履^び

(而住) (己成) (己生) (己興) (俱同) (無所) (無身) (無吾) (無我) (極甚) (於氏) (於爾) (於斯) (於是)

ルヘー
ルヘー
ルヘー
ルヘー
ニメー
ニメー
ニメー
ニメー
ニメー
イテイメー
イテイメー
イテイメー
イテイメー
イテイメー

多たけい 多たけい 多たけい 多たけい 兜とけい 兜とけい

(而立) スツヘー
 (亦住) スツヘー
 (嗟嘆) スツヘー
 (亦非) スツヘー
 (消頭大疾無得加害) スツヘースワゝハ一

法螺貝ほらがひの聲こゑは益々ますます高たかくなつて來くる。玉國たまくに別外わけほか一同いちどうは直ただちに夢ゆめを破やぶられバツトが稱とな
 ふる陀羅尼だらにの聲こゑを興味きょうみをもつて聞きいて居ゐた。治道ちだう居士こじ頓とみに大おほきな聲こゑで、
 拙者せつしゃは月つきの國くにハルナの都みやこに名なも高たかき、バラモン教けうの神司かむつかさ、大黒主おほくろぬしの神かみの幕下ばくか、
 鬼春おにはる別將軍わけしやうぐんのなれの果はて、今いまは三五教あななひけうの信者しんじや治道ちだう居士こじと申まをす比丘びくであるぞよ。汝なんぢべ
 ル、バツトの兩人りやうにん早はやく心こころを入いれ替かへ、神かみの正道せいだうにつけ
 と嚴おごそかに呼よばはれば、二人ふたり何なんとなく其言靈そのことたまに打うたれて、「ハイ」と僅わづかに云いつた

きり其場に跣んで仕舞つた。黒雲の帳をやぶつて大空の月はパツと覗かせたまふた。一同の姿は晝の如く見えて來た。

治道 「黒雲に包まれたまひし月影も

誠の光あらはしたまひぬ。

ベル バツト心の雲を押し除けて

玉の光を研き照らせよ」

と詠みかけた。二人は恐る恐る慄ひ聲にて、

バツト 「村肝の心の闇を照らすため

神の恵の燈火ともさむ。

今迄の深き罪咎赦せかし

元津御靈にかへる吾身を」

ベルぬす「盗みする心こころは露つゆもなければも

醜しこの鬼奴おにめに使つかはれけるかな。

鬼春おにはる別軍わけいくさの君きみの御前おんまへに

拜をろがむ吾われを救ゆるさせたまへ。

三五あななひの清きよき教をしへの神司かむつかさ

吾われを許ゆるせよ神かみのまにまには」

治道ちだう「村肝むらきもの心こころの暗やみの晴はれぬれば

その身みも明あかく清きよまりぬべしは」

玉國たまくに別わけ「ベル、バツトふたり二人の男子をのこに言告ことつげむ

神かみは誠まことの恵めぐみなるぞやは」

バツト 有難し司の君の御言葉に

胸は晴れけり心澄みけり。

吾心バツト明るくなりけり

神の教の燈火に遇ひて

ベル 大空の月に心を照らされて

心恥かしくなりにけるかな。

今迄は醜の曲靈にさやられて

黑白も分かず踏み迷ひけり

治道 大空に輝く月の御姿を

心となして世を渡れかし

三千彦みちひこ「スダルマの山やまの尾上をのへに假寝かりねして
今日けふはうれしき夢ゆめを見みしかな」

眞純彦ますみひこ「村肝むらぎもの心こころの空そらは眞純彦ますみひこ
かかるくもなき今宵こよひの嬉うれしさ」

デビス姫ひめ「あら尊月たふとつきの恵めぐみの輝かがやきて
二人ふたりの御子みこの蘇生よみかへりぬる」

斯かく話はなす所ところへ天てん空くうに嚙りつりやう曉たる音おん樂がく聞きえ、
月つきを笠かさに被かぶりながら一いつ行かうが前まへに雲くも押おし
分わけて悠いう々いうと下くだりたまうた大神だいしん人じんがある。玉たま國くに別わけ一いち同どうはこの神しん姿しを見みるより忽たちまち
大だい地いちに平ひれ伏ふし感かん涙るみに咽むせんで居ある。この神しん人じんは月つきの御み國くにの大おほ神かみに在ましまして産うぶ土すな山やま

の神館に跡を垂れたまひし、三千世界の救世主、神素盞鳴の大神であつた。大神は一同の前に四柱の從神と共に輝きたまひ、聲も涼しく神訓を垂れたまうた。一同は拜跪して感謝の涙に暮れながら一言も漏らさじと謹聽して居た。

神素盞鳴の大神が山上の神訓

一、無限絶對無始無終に坐しまして靈力體の大元靈と現はれたまふ眞の神は只一柱在す而已。之を眞の神又は宇宙の主神と云ふ。

汝等、この大神を眞の父となし母と爲して敬愛し奉るべし。天之御中主大神と奉稱し、又大國常立大神と奉稱す。

一、嚴の御靈日の大神、瑞の御魂月の大神は、主の神即ち大國常立大神の神靈の御顯現にして、高天原の天國にては日の大神と顯はれ給ひ、高天原の靈國にては月の大神と顯はれ給ふ。

一、愛善の徳に住するものは天國に昇り、信眞の光徳に住するものは靈國に昇るものぞ。

一、此外天津神八百萬坐しませども、皆天使と知るべし。眞の神は大國常立大神、又の名は天照皇大神、只一柱坐します而已ぞ。

一、國津神八百萬坐しませども皆現界に於ける宣傳使や正しき誠の司と知るべし。

一、眞の神は、天之御中主大神只一柱のみ。故に幽の幽と稱え奉る。

一、眞の神の變現したまひし神を、幽の顯と稱へ奉る、天國に於ける日の大神、

靈國に於ける月の大神は何れも幽の顯神なり。

一、一旦人の肉體を保ちて靈界に入り給ひし神を顯の幽と稱え奉る。大國主之大

神及び諸々の天使及び天人の類を云ふ。

一、顯界に肉體を保ちて、神の大道を傳え、又現界諸種の事業を司宰する人間を

稱して顯の顯神と稱へ奉る。

而して眞に敬愛し尊敬し依信すべき根本の大神は幽の幽に坐します一柱の大神

而已。其他の八百萬の神々は、主神の命に依りて各その神務を分掌し給ふものぞ。

一、愛善の徳に住し信眞の光に住し、神を愛し神を信じ神の爲に盡すものは天界

の住民となり、惡と虚偽とに浸りて魂を曇らすものは地獄に自ら墮落するものぞ。

斯く宣り終へたまひて以前の從神を率ゐて紫の雲に乗り大空高く月と共に昇ら
せたまふた。

玉國別 素蓋鳴の瑞の御靈の御恵に

教の泉湧き出でにけり。

昔よりためしも聞かぬ御教を

居ながらに聞く事の尊さ

治道 水火の中をかい潜り 求ぎて往くべき道芝の

恵の露に濡れながら スダルマ山の頂上に

聞くも嬉しき御教 あゝ惟神々々

神の恵を赤心に 留めて感謝し奉る

三千彦みちひこ 大空おほぞらゆ瑞みづの御靈みたまの下くだりまして
生命いのちの清水しみづ與あたへたまひぬ

デビス 夜よるの露つゆうけて寝やすらう身みの上うへに
注そそがせたまひし惠めぐみの御露みつゆ

眞純彦ますみひこ 大空おほぞらの雲くも押し分わけて輝かがやきつ
眞澄ますみの水みづの教のりを賜たまひぬ

治道ちだう 尊誠たふまことの神かみの御姿みすがたに
謁見まみえまつりし吾われぞ嬉うれしき

ベル 村肝の心の闇の晴れ往きて

誠の神の光に遇ひぬ

バツト 限りなき神の恵を悟りけり

悔改めて正道に入らむ

茲にベル、バツトの兩人は心の底より悔改め、玉國別一行に従ひて聖地エルサ
レムを指して進む事となつた。あゝ惟神靈幸倍坐世。

(大正一二・五・一八 舊四・三 於教主殿二階 加藤明子録)

第五章 宿縁(一六一二)

伊太彦、カークス、ベースの三人はスダルマ山の麓より間道を通り抜け、スー
ラヤの湖邊に出た。ここには此湖を渡海する船頭の家が十四五軒建つて居る。三
人は一々船頭の家を尋ねて、湖中に浮べるスーラヤ島に渡るべく探して見たが、
何れも漁に出た留守と見えて一人も船頭は居なかつた。家に残つたものは爺婆か、
嬢子供ばかりである。一軒も残らず尋ねて最後の家に至り、最早船がなければ仕
方がない、船頭衆が歸つて来る迄ここに待つ事にしよう、爺さま、婆アさまに
澁茶を汲んで貰ひ、遂に其夜は老人夫婦の親切によつて宿泊する事となつた。

庭先には梅檀の木が香ばしく薫つて小さき賤ヶ屋の中を包んで居る。爺さま婆
アさまの子には二人の男女があつた。兄をアスマガルダと云ひ妹をブラワゝ
と云つた。兄妹共に天稟の美貌でキメも細かく兄の方は瑪瑙の様な美しい肌をし
てゐるのでそれを名としたのである。アスマガルダと云ふ事は瑪瑙の梵語であり、
ブラワゝ一ダと云ふのは梵語の珊瑚である。伊太彦外二人は先づ夕餉を饗應され
庭先に向つて天津祝詞を奏上し、再び家に歸つていろいろの話をしたり、「是非
とも明日はスーラヤ山に登り夜光の球をとつて来ねばならぬ」と希望を抱いて勇

ましく嬉しげに四方八方の話に耽つて居た。

伊太彦はスダルマ山の麓に於て暫らく神懸状態となつてより俄に若々しくなり、體の相好から顔の色迄玉の如く美しくなつて了つた。これは木花姫命の御靈が伊太彦に一つの使命を果さすべく、それに就いては大變な大事業であるから御守護になつたからである。併し乍ら伊太彦は自分の顔や姿の優美高尚になつた事は氣がつかず、依然として元の蜴蜥面であると自ら信じてゐた。三人が話をして居ると土間の襖をソツと開けて珊瑚樹の様な顔をした女がチヨイチヨイ儷む様な目をして覗いて居た。伊太彦は「娘が何の意で自分等を覗くであらうか、餘り珍妙な顔をして居るので面白がつて、チヨコチヨコと化物の無料見物をやつて居るのだらう。ア、斯うなつて來ると人間も美しく生れたいものだ。何故俺はこんなヒヨツトコに生れて來たのだらう」と心の底で呟やいて居た。爺さまも婆アさまもカークスもベースも何となく伊太彦の威嚴の備はりたるに畏敬尊信の念を起し恰も救世主の降臨の様にあらゆる美しい言葉を竝べて、何呉れとなく世話をする。伊太彦は、

「何とまア親切な人もあるものだな。こんな僻地だから人間が純朴で親切なのであらう。まるで神代の様だなア」
と今度は感謝の意味に於て腹の底で囁いた。此老夫婦の名は、爺さまをループヤ（銀）と云ひ婆アさまをバツマラーカ（眞珠）と云つた。年はとつて居るものの、何處ともなしにブラワゝーダの様に美しい面影が残つて居る。爺さまのループヤは嬉しさうに伊太彦の前に進みよつて両手を支へ、

「これはこれは何處のお客さまか存じませぬが、よくもこんな山間僻地を訪ねて来て下さいました。承はりますればスーラヤの島に夜光の玉をおとりの爲お渡りとの事ですが、昔からあの島へ渡つて玉を取りに行つたものは一人も生きて歸つたものはムリませぬ。夜分になると、それはそれは立派な光が出ますので欲に目のない人間はソツと渡つて命をとられるのです。併し貴方はかう見た所で普通の人間と見えませぬ。神様の御化身と思はれます。何卒あの玉をとつてお歸りになれば此村中は申すに及ばず、國人が再び生命をとられる事がなくなります。貴方なれば屹度玉をとつて歸れるでせう。悴のアスマガルダが明日は歸るでせうから

お伴を致させます。何卒御成功をお祈り致します。そして私の家は御存じの通り、かう云ふむさくるしい狭い所でムいですが、まさかの時の用意に裏の林に狭い乍らも新しい亭が建ててありますから何卒それへお寝み下さいませ」

伊太「これはこれはお爺様、俄に御厄介になりました、さう氣を揉んで貰ひましては誠に濟みませぬ。庭の隅でも結構です。夜露を凌げたら宜しいのです。私は三五教の宣傳使として山に寝たり野に寝たりして修行に廻るものですから、そんな處に寝まして貰うと畏れ多うムいます」

ルーブヤ「さう仰有らずに何卒老人夫婦の願ひでムいますから新建へ行つてお寝みを願ひます」

伊太「そこ迄仰有つて下さるのにお断りするのも却て失禮に當りますから、然らば御厄介になりませう」

バツマラーカ「何卒そうなさつて下さいませ。お床をチャンとして置きましたから」

伊太「然らば寝まして頂きませう。カークスさま、ベースさま、サア御一緒にお

伴致ともいたしませう〇

カークス、ベースの兩人りやうにんはモチモチとして居ゐる。

ルーブヤ〇いえいえ、このお二人様ふたりさまは私の宅うちに寝やすんで頂いただきませう。貴方あなたは神様かみさまで

すから何卒どうぞあたり新しい處ところで寝やすんで下くださいませ〇

伊太いた「左様さやうならば御主人ごしゆじんの御命令ごめいれいに従したがひお世話せわになりませう〇

と婆アばさまのバツマラーカに導みちびかれ清酒こんもりとした涼すずしい新建しんだちに案内あんないされた。

このルーブヤの家いえは此近邊このきんべんの里庄りしやうをつとめて居ゐるので、見た割わりとは富裕ふゆうであつ

た。それ故萬事萬端ゆゑばんじばんたん、座敷ざしきの道具等だうぐなどが整頓せいとんして何なんとも云いへぬ氣分きぶんのよい住居すまゐである。

伊太彦いたひこは婆アばさまに案内あんないされ久ひさし振ぶりに美うつくしき座敷ざしきに泊とまる事ことを得えて非常ひじやうに喜よろこび、

且かつ明日あすの希望きぼうを思おもひ出だすと何なんだか氣きが勇いさんで寝ねる事ことが出來できぬので、横よこに寝ねたま

ま目をパチつかせて居ゐた。

子ねの刻こくとも思おぼしき時とき、ソツと表戸おもてどを開あけて足音あしおとを忍しのばせ乍ながら暗やみに浮ういた様やうな年若としわか

い美しい女をんなが、伊太彦いたひこの枕邊まくらべに近ちかくやつて來きた。

伊太「ハテ不思議な事だなア。夜でしつかりは分らぬが、どうやら素敵な美人らしい。此色の黒い蜴蜥面の、自分でさへ愛憎の盡くる様な俺に女が秋波を送つてやつて来る筈もなし、これは屹度此林に居る狐が化て居るのかも知れない。こりや、しつかりせねばなるまい」

と轟く胸を抑へ、稍慄ひを帶た聲で、

伊太「誰だ。この眞夜中に人の寢所を襲ふ奴は妖怪變化か、但しは人目を忍ぶ盗人か、返答を致せ」

暗の影は幽かの聲で恥かしさうに、

「妾はブラワゝーダでムいます」

伊太「ブラワゝーダさまが此伊太彦に何用あつて今頃おいでになりましたか。御用があらば明日承はりませう。男の寢所へ夜中に御婦人がおいでになるとは、チツと可怪しいぢやありませんか」

ブラワゝーダはモチモチし乍ら、

「ハイ、妾は一寸此座敷に忘れ物を致しましたので尋ねに来たのでムいます。夜

中にお目を覺まして誠に濟まない事でムいました」

伊太「ハテ、合點の行かぬ事を仰有います。貴女の家には貴女の物があるのをお忘れになつたといふ道理はありますまい。又明日お探しになつては如何ですか」

ブラワ「ーダ「いえいえ是非とも今晚、それを捉まへなくてはならないのですも

の」

伊太「その又捉へなくてはならぬと仰有るのは何んなものでムいますか。何なら私もお手傳ひして探させうか」

ブラワ「ーダ「ハイ、有難うムいます。何卒手傳を願ひます」

伊太「品物は何でムいますか。それを聞かなくちや探す見當がつきませぬがな。簪ですか、櫛ですか、笄ですか」

ブラワ「ーダ「いえいえ、そんな小さいものではムいませぬ。妾の大切の大切の一生の寶のイタ……でムいます」

伊太「それは又不思議なものをお尋ねになるのですな。洗ひ張りでもなさるのですか。ゆつくり明日になさつたらどうです」

ブラワゝーダ「いいえ、板ぢやムいませぬ。あの……彦さまでムいます」

伊太「ますます分らぬぢやありませぬか。板だとか彦だとか、まるで私の名の様なものをお探しになるのですな」

ブラワゝーダ「その伊太彦さまを探しに來たのでムいますよ」

伊太「ハ、ア、さうするとお前はここのお嬢さまに化けて來てゐるが、大方ナーガラシヤーだらう。此伊太彦が明日夜光の玉を取りに行くのを前知し、害を加へにやつて來たウバナダ龍王の使だらうがな」

ブラワゝーダ「いえいえ、決して其様な恐ろしいものではムいませぬ。妾は此家の娘、正真正銘のブラワゝーダでムいます。貴方は神様のお定めになつた妾の夫でムいます」

伊太「もしお嬢さま、冗談云つちやいけませぬよ。此様な色の黒い菊目石面の蜥面に擲掬つて貰つちや困るぢやありませぬか。自分でさへも愛憎のつきた此面付、そんな事を仰有つても伊太彦は信ずる事は出來ませぬ」

ブラワゝーダ「貴方、そんな嘘が見す見す云へますね。三十二相揃ふた女神の樣

なお姿すがたをしてしてゝ△じぎるぢやありませんか。妾わたしはここ一週いっしゅう間程かんほど以前いぜんに三五あななひの神様かみさまのお告つげによつて夫をつとを授さづけてやらうと仰おつしや有ありましたが、只今ただいま神様かみさまが妾わたしの耳みみの邊はたでお囁ささやきになるのには、お前まへの夫をつとは、今晚こんばんお泊とまりになるあの宣傳せんでん使しだと仰おつしや有ありました。是非ぜとも妾わたしの夫をつとになつて頂いたき度たいもので△ごさいます。否々いないな神様かみさまからお定さだめになつた夫をつとで△ごさいます」

伊太いた「ハーテ、ますます分わからぬ様やうになつて來たわい。ア、如何どうしたら宜よいかな。嬉しい様うれいな氣きもするし、何なんだか、つままれて居をるやうな氣きもするし、神様かみさまに濟すまぬやうな氣きにもなつて來た。ハハアこいつは神様かみさまのお試練ためしだらう。ヤア劍吞けん々々けん、惟かむながら神靈たま幸倍ちはへ坐世ませ」

ブラワ「ーダ「マアお情なさけのない貴方あなたのお言葉ことば、さう【じらす】ものではありませんせぬよ」

伊太いた「それだと云いつて餘あまり思おもひがけもないぢやありませんか。マア明日あす迄まで待まつて下くださいな。ゆつくり考かんがへさして貰もらひませうから」

ブラワ「ーダ「明日あす迄まで待まてる位くらゐなら女をんなの身みとして貴方あなたの居間一居へまへ誰たれが出て参まり

ませう。決して不潔な心で来たのではありませぬから御安心下さいませ。只一言

「ウン」と仰有つて頂けばそれで宜しうムいます」

伊太「ア、兔も角、私にはお師匠様もムいます。又貴女にも御両親やお兄様がありますから、雙方相談の上、どんな約束でも致しませう」

ブラワ「ーダ」仰せ御尤もでは御座いますが、神様のお告げは一刻の猶豫もムいませぬ。そんな事を仰有らずに何卒よい返事をして下さいませ」

伊太「ハテ、どうしたらよからうかな。あゝ惟神靈幸倍坐世」
ブラワ「ーダ」惟神靈幸倍坐世」

かく兩人はお互に問ひつ答へつ曉の鳥の聲する迄夜を更かした。果して、如何
落着をしたであらうか。

思はざる家に泊りて思はざる

時に思はぬ人に會ひける。

ブラワ「ーダ」明日をも待たず直ここで

返答せよやと迫る割なさ。

（大正一二・五・一八 舊四・三 於教主殿 北村隆光録）

第六章 テルの里（一六一三）

夜は烏の聲にカラリと明け放れた。老人夫婦を初め、美人のブラワゝーダは早朝より花園の手入れをし、門を掃きなどして、アスマガルダの船をもつて歸つて来るのを待つて居る。伊太彦を神の告によつてブラワゝーダの夫とした事の喜びを早く兄に告げて悦ばせたいと一時千秋の思ひであつた。伊太彦も肝腎の船がないので、心ならずも待つより仕方がなかつた。涼しい森林の中に建てられた新宅に主客六人は車座となり、果實の酒を呑みながら、嬉々として謠ひ舞ひなどして、兄の歸るを待つて居る。爺さまのルーブヤは先づ第一に神に感謝し且つ謠ひ初め

た。

空照り渡る月の國　　スダルマ山の南麓に

伊都の鏡をのべしごと　　廣く浮べるスーラヤの湖

其邊りなるテルの里　　ルーブヤの家にも

常世の春は來りけり　　吾は元より三五の

神の教を朝夕に　　つかへ守りし信徒ぞ

此處は名に負ふバラモンの　　神の教の茂き國

三五教と名乗りなば　　忽ち醜の司等が

刃の錆となり果てむ　　卑怯未練と知り乍ら

三五教の信徒と　　名乗りも得せずバラモンの

醜の教に信従し　　時待ち居たる苦しさよ

此里人も古ゆ　　三五教に身を奉じ

仕へまつりしものなれど　　醜の猛びの強ければ

止むを得ずして醜道に 仕へまつりし哀れさよ

それゆるゑ兄のアスマガルダにも 年頃なれど若草の

妻さへ持たさず三五の 神の御前に朝夕に

聲をひそめて祈りつつ イドムの神の御計らひ

待つ折もあれ三五の 神の司の伊太彦が

嬉しく此處に現れまして 吾子娘のブラワゝーダ

妻といたはり慈み 給はむ事の御誓ひ

聞くにつけても有難く 枯木に花の咲く心地

老の涙も漸くに 歡喜の涙と變りけり

あゝ惟神々々 神の恵のいや深く

大御稜威の彌高く 限り知られぬ喜びの

心勇みて大前に 感謝し仕へ奉る

朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

星落ち海は涸るとも 三五教の御教は

孫子に傳へて放れじと 忍びし事の甲斐ありて
一度に開く梅の花 いと香ばしく薫る代の
今日の生日ぞ目出たけれ あゝ惟神々々
御靈幸倍ましませよ

伊太彦は又謠ふ。

吾は伊太彦宣傳使 玉國別の師の君に

祠の森より仕へ來て 諸の功を現はしつ

スダルマ山の麓迄 來りて見れば吾體

其面影も若々と 緑の色と輝きぬ

はて訝かしやと思ふ間に カークス、ベースの兩人に

夏木茂れる道の邊に 巡り遇ひてゆスーラヤの

山にかくれしウバナナダ ナーガラシャーのかくしたる

夜光の玉のありと聞き
伊都の言靈打ち出だし

龍神達を言向けて
夜光の玉を授かりつ

珍の聖地のエルサレム
黄金山の神館に

奉らむと勇み立ち
二人に間道教へられ

緑滴るテルの里
スーラヤ湖水の磯端に

來りて見れば摩訶不思議
木花姫の再來か

但しは神代を松代姫
容貌麗しきブラワゝーダ

姿やさしき姫君に
玉の御聲をかけられて

胸轟きし愚かさよ
かくなる上は伊太彦も

唯惟神々々
神の經綸と畏みて

ブラワゝーダ姫を娶りつつ
千代に八千代に玉椿

赤き縁を結びつつ
神の大道に仕ふべし

玉國別の師の君も
此消息を知りまさば

必ず喜びたまふべし
あゝ惟神々々

神かみに誓ちかひて伊太彦いたひこが

心こころの岩戸いはと押し開ひらき

思おもひの丈たけを述のべまつる

朝あさひ日は照てるとも曇くもるとも

月つきは盈みつとも虧かくるとも

假たとへ令だい大地だいちは沈しづむとも

誠まこと一つを立たて通とほし

ループちちうへヤ父上ははうへ母上ははうへの

バヅマラーカによく仕つかへ
ブラワゝーダをいつくしみ

三五あななひけつ教みをしへの御教みをしへを

月つきの御國みくには云いふも更さら

四方よもの國々くにくに隈くまもなく

傳つたへまつりて大神おほかみの

御前みまへに凱申かちごまをすべし

あゝ惟かむながら神々かむながら

守まもらせたまへ三五あななひの

皇大神すめおほかみの御前おんまへに

畏かしこみ畏かしこみ願ねぎまつる

バヅマラーカは又また謠うたふ。

待まちに待まちたる文月ふみづきの

今日けふは十とをまり二ふたつの日ひ

神素盞鳴の大神の 瑞の御靈の幸はひて
 千代の喜び來りけり 三五教の伊太彦よ
 愚なれども吾娘 ブラワゝ一ダ姫を憐みて
 千代もかはらぬ宿の妻 娶らせたまへ相共に
 鴛鴦の衾の睦じく 神にならひて岩窟を
 押して開けてふ神業に 清けく仕へさせたまへ
 吾は老木の身なれども 汝が命の來りしゆ
 心勇みて何となく 嬉しく樂しくなりにけり
 汝が命は天津日の 元津國より下ります
 日の出の神によく似たり テルの里にも春は來て
 永久の花さく代となりぬ あゝ惟神々々
 三五教の皇神の 深き恵を今更に
 喜び感謝し奉る 朝日は照るとも曇るとも
 月は盈つとも虧くるとも 假令大地は沈むとも

これの赤繩は變らまじ
あゝ惟神々々

御靈の恩賴を祝ぎまつる

ブラワゝーダは又謠ふ。

實に有難き今日の日は
天の岩戸の開けたる

常世の春の心地なり
天の河原に棹さして

天降りましたる彦星の
嚴の御顔伏し拜み

蕾の花も露を得て
今や開かむ時は來ぬ

吾父母よ背の君よ
吾赤心を憐みて

常磐に堅磐に恵みませ
二人の親によく仕へ

兄の言葉に背かずに
吾背の君と諸共に

スーラヤ山に立ち向ひ
八大龍王の随一と

世に聞えたるウバナナダ
ナーガラシヤーを言向けて

すめおほかみ 皇大神の御前に
かちどき 凱あげて功勳を

ちよ 千代に八千代に傳へなむ
めぐ 惠ませたまへ
かむながら 惟神

かむすさを 神素盞鳴の大神の
みまへ 御前に感謝し奉る

このよ 此世を造りし神直日
こころ 心も廣き大直日

ただなにごと 唯何事も人の世は
なほひ 直日に見なほし聞直し

あななひけう 三五教の御教を
いたひこつかき 伊太彦司の背の君と

こころ 心を合せ力をば
ひと 一つに固めて八十の國

やそ 八十の島々隈もなく
ひら 開き傳へむ門出を

まも 守らせたまへ惟神
かしこ 畏み畏み願ぎまつる

カークスは又謠ふ。

スダルマ山の森林の
ほとり 邊に住めるカークスは

かみ 神の恵に守られて
いたひこつかき 伊太彦司と諸共に

常世とこよの花はな咲さくさテとルらのの里さと

ルらブぶヤや館かたにに立たちち向むひ

思おもひも寄よららぬぬ待も遇てししに

與あつつかかままししたた有ありりががたた難がさ

夫それののみみななららずず伊い太た彦ひこのの

神かみの司つかははブぶラらワわダだ

姫ひめのの命みことのの背せととななりりて

いいとともも尊たふときき御み教をしへをを

世せ界かいにに開ひらききたたままははむむと

スすーーラらヤや山さんにに立たちち向むひ

功いさををを立たててむむととななししたたままふふ

神しん力りき無む限げんのの宣せん傳でん使し

伊い都づのの司つかのの御おん伴ともと

仕つかへへ奉まつりりしし吾われ々われは

天てんににもも登のぼるる心こころ地ちして

神かみの御み稜いづ威いをを感かん謝しやししつ

心こころのの限かぎりり身みのの限かぎり

此この世よのの爲ためにに盡つくすすべべき

嬉うれししきき身みととははななりりににけけり

三あなな五な教ひけうのの大おほ御み神かみ

罪つみにに汚けがれれしし身みななれれどども

大おほ御み心こころにに見み直なほして

赦ゆるささせせたたままひひ吾われ々われをを

空くう前ぜん絶ぜつ後ごのの神しん業げふに

使つかははせせたたままへへ惟かむ神ながら

御み前まへにに感かん謝しやしし奉たてままつり

ルらブぶヤや館かたのの喜よろこびびを

言こと祝はぎぎままつりり願ねぎぎままつる

あゝ惟神々々かむながらかむながら

御靈幸倍ましませよみたまさちはへ

ベースは又謠ふ。またうた

目出度い目出度いお目出度いめでてためでためでた 枯木に花は咲き出でぬかれき はなはさきい

梢こずえに深く包つつまれし 無花果いちじゆくさへも今は早はや

開ひらき初そめたる優曇華うどんげの 目出度めでたき春はるとなりにけり

スーラさんヤ山さんの寶玉ほうぎよくを 神かみの守まもりに手てに入いれて

吾わが一生いつしやうを安樂あんらくに 暮くらさむものと思おもひしは

今いまに至いたりてつくづくと 省かへりみすれば恥はづかしや

いざこれよりは伊太彦いたひこの 珍うづの司つかさに従したがひて

赤あかき誠まことの心こころもて 大神業だいしんげふに仕つかふべし

神かみの御おん爲ため世よの爲ために ナーガラシャはの寶玉ほうぎよくを

請取うけとるならば難なんはなし 吾身わがみの欲よくに搦からまれて

其寶玉を得むとして 尊き命を召されたる

人は今迄數知れず 實にもうたてき次第なり

あゝ惟神々々 神の大道を生々に

悟りそめたる吾々は 最早昨日の人ならず

神の恵に包まれし 尊き神の御子ぞかし

あゝ有難し有難し ルーブヤさまやバツマラーカ

ブラワゝーダーのお姫さま 何卒宜敷く願ひます

一時も早くアスマガルダ 兄の命の歸りまし

此有様を戀はし 共に喜び手を引いて

玉の御船をかざしつつ 伊太彦司に従ひて

スーラヤ山に登る日を 指折り楽しみ待ちます

あゝ惟神々々 御靈幸倍ましませよ

ループヤ「とざされし天あまの岩戸いはとも開ひらくてふ
樂たのしき春はるは吾家わがやに來きたりぬ」

バヅマラーカ「待まち佗わびし道みち文ふみづき月の今日けふこそは
瑞みづの御靈みたまの惠めぐみあまねし」

伊太彦いたひこ 「皇神すめかみの經綸しぐみの綱つなに操あやつられ
縁えにしの絲いとを結むすびけるかな」

ブラワ「ーダ」 待まち佗わびし神かみの司つかさの背せの君きみを
與あたへられたる吾われぞうれしき」

カークスカかかる代よに生れうままれ遇あふ身みの嬉うれしさは
常世とこよの春はるの心地こちするかなな

ベースベ如何いかにして稱たへむよしも無なきほどに
神かみの恵めぐみの尊たふとくなりぬぬ

(大正一二・五・一八 舊四・三 於教主殿 加藤明子録)

第二篇 日天子山スーラヤさん

第七章 湖上の影（一六一四）

おほぞら 一点の雲翳もなくスーラヤの湖の面は紺碧の波をたたへた小波が静かに
磯端を洗つて居る。ループヤ親子はアスマガルダの歸りの遅きを待ち侘て磯端に
佇み、西南の海邊を眺めて、一刻も早く悴の歸れかしと、心ひそかに祈願をこら
しつゝあつた。

太陽は少しく西の空に傾いた時、此方に向つて艦櫂を漕ぎ走せ來る一隻の小舟
を見付けた。果してアスマガルダの船であらうか。但しは他の村人の船であらう
かと一時千秋の思ひにて胸を躍らせ乍ら見つめて居ると、船は次第々々に大きく
見え出し船中には三人の男が乗つて居る事迄が分つて來た。

ループヤは確信あるものの如く、

「これ、バツマラーカよ、ブラワゝーダよ、どうやら兄が歸つて來たやうだ」
ブラワゝーダ「お父さま、あの船がもしも兄さまのでなかつたら、どうしませう

かな」

ループヤ□ いやいや心配しんぱいするには及およぶまい。屹きつと度あれはアスマガルダの船ふねに違ちがひない。あの通りとほ三人さんにんの姿すがたが見みえて居ゐる。二人ふたりは下男げなんのバルにサクだらう。此村このむらに三人乗さんにんつて行く船ふねは外ほかにはないからな□
バヅマラーカ□ 成程なるほど、親爺殿おやぢどのの仰有あつしやる通り、あれは兄あにの舟ふねに違ちがひない。ブラワ□
ダよ、安心あんしんしたがよからう□

斯かくとりどりの噂うはさをして待まつて居ゐる所ところへ、船ふねはおひおひと近ちかづいて、船中せんちゆうの人は確たしかにアスマガルダなる事ことが分わかつて來きた。ブラワ□ ーダは勇いさみ立ち、手てを拍うつて磯端いそばたを右みぎに左ひだりに躍をどり廻まはり乍ながら謠うたふ。

今いま來くる舟ふねは兄あにの舟ふね いとしいなつかしい兄上あにうへの

無事ぶじにお歸かへり遊あそばした 磐楠船いはくすふねに違ちがひない

あゝ有難ありがたや有難ありがたや 三五教あななひけうの宣傳使せんでんし

伊太彦司いたひこつかさが現あらはれて 神かみの教をしへを説とき玉たまひ

父ちちと母ははとの許ゆるし得えて 妹背いもせの契ちぎりを結むすびつつ

神かみの御おん爲ため世よの爲ために
 誠まことの道みちに盡つくさむと
 親おや子こ夫ふう婦ふが勇いさみ立たち
 兄あにの歸かへり宅たくを待まち暮くらす
 その日ひの永ながさ一いち日にちも
 百もも年とせ千ち年とせの思おもひなり
 兄あにの命みことの恙つつがなく
 吾わが家やに歸かへり來きますなら
 此この有あり様さまを聞きし召めし
 さぞや喜よろこび玉たまふらむ
 妾わたしはこれより三あな五なの
 神かみの司つかさと諸もろ共ともに
 スーラヤ山さんにかけ上のほり
 八はち大だい龍りゅう王わうの其その中なかで
 福ふく徳とく守まもる善ぜん歡くわん喜き
 ナーガラシヤ一の寶ほう玉ぎよくを
 神かみの力ちからに授さづかりつ
 戀こひにこがれしエルサレム
 珍つづの都みやこに參さん向かうし
 神かみの司つかさと許ゆるされて
 百もも八や十そく國にの果はて迄までも
 教をしへを傳つたへ奉たてまつ
 大おほ御み惠めぐみの萬まん分ぶ一いち
 報むくはむ事ことの嬉うれしさよ
 あゝ惟かむ神な々ながら々かむ々ながら
 御み靈たま幸さちひましませよ

ループヤはるか 遙にかすむ海の上うへ 小波分けて歸り來るかへ

磐楠船は兄の船あにふね 待ちに待つたる常磐木の

松の緑の美はしさまつみどりうる 日は西空に傾きてひにしぞらかたむ

空翔つ鳥も各々にそらたとりめいめい 己が埒に羽急ぐおのねぐらはいそ

吾子は如何にと待つ程にわがこいか 神の恵に守られてかみめぐみまも

千尋の海原乗り越へつちひろうなばらの 歸り來りし嬉しさよかへきたうれ

嘸や悴の歸り來てさぞせがれかへ 此有様を聞くならばこのありさまき

喜び勇む事ならむよろこいさ 思へば思へば三五のおもおもあななひ

神の恵の有難さかみめぐみありがた 慎み感謝し奉るつつしかんしやたてまつ

バヅマラーカなみ 波の上いと安らかに迂りつつうへやす

アスマガルダの歸り來るかも。かへく

朽ち果てし老の身なれど今日はしもくははおいみけふ

若葉わかばの緑萌みどりもゆる心地こころなり。

山やま青あをく海うみ亦また青あをく群鳥むらどりの

姿すがたも青あをく見えにけるかな。

野のも山やまも枯かれ果はてたりし心地こころして

なげき暮くらせし今日けふの嬉うれしさ

伊太彦いたひこ 足曳あしびきの山河海やまかはうみの底そこひにも

神かみの恵めぐみは充みち溢あふれけり。

親おやと子こが睦むつび親したしみ皇神すめかみの

道みちを踏ふみ行ゆく事ことぞ樂たのしき。

ウバナダ・ナーガラシャーの鎮しづまれる

スーラヤ山さんは雲くもに霞かすめる。

明日あすの日はスーラヤ山さんに驅かけ登のぼり

龍たつの腮あぎとの玉たまにまみえむ〇

斯かく歌うたふ折をりしも、兄あにのアスマガルダの船ふねは漸やうやく磯端いそばたに横よこたへる事こととなつた。

ルーブヤ〇いや、アスマガルダよ、昨日きのふ歸かへつて來くると思おもつて待まつて居ゐたのに、隨ずい分ぶん遅おそい事ことだつたな。又また湖上こじやうに變事へんじでも出で來きたのではないかと、どれ丈だけ心配しんぱいしたか分わからなかつた。ようまア無事ぶじに歸かへつて來きて呉くれた〇

アスマガルダ〇ハイ、誠まことに遅おそくなつて心配しんぱいをさせました。どうしたもののか、昨日きのふは一日いちにち漁れいふがなく、もう仕方しかたがないので歸かへらうかと磯端いそばたのパインの木蔭こかげに舟ふねを停とどめて休やすんでゐる處ところへ、天女てんによの様なお姫様ひめさまが犬いぬをつれておいでになり、是非ぜひぜひ々々スーラヤの島しまへ渡わたして呉くれと仰有おつしやるので、お伴ともをしてお送おくりをして來きました。隨分ずいぶん綺麗きれいな方かたで神様かみさまかと思おもひましたよ〇

伊太彦いたひこは合點がってんゆかず「扨さては初稚はつわか姫様ひめさまが吾われに先立さきだつて龍王りうわうの玉たまをとりにおいでになつたのではあるまいかな。又また自分じぶんの手柄てがらを人ひとにしてやられたか」とやや心配しんぱい相さうな顔かほをして俯向うつむいて居ゐる。

ループヤ「それは、兄、いい事をして来た。屹度神様の何かのお仕組だらうよ。就ては喜んで呉れ、ここに亙る宣傳使は三五教の伊太彦様と云つて、齋苑の館からお下りになつた御神徳高きお方、妹の婿になつて下さる契約が出来たので一時も早くお前に歸つて貰ひ、共に喜んで祝言の杯を取交したいと親子三人がどれ丈け待つたか知れないのだ」

と早くも兩眼より涙を落して居る。アスマガルダは元來孝行者、兩親の言葉には一度も背いた事はない。又妹の一生の一大事を自分の不在中に親子がきめた事も、普通の人間のやうに一言の故障も言はず、又不服にも思つて居なかつた。何事も皆神様の御恵と感謝するより外に考へはなかつた。

アスマガルダ「それは御兩親様、いい事をなさいました。これも全く三五の神様の御神徳で亙いませう。いや妹、お前も安心だらう。俺も嬉しい」

と云ひ乍ら船をかたづけ、磯端を傳ふて伊太彦に目禮し乍ら先に立つて吾家に歸つて行く。

主客九人は家に歸り休息する事となつた。先づ第一に伊太彦はアスマガルダに

向むかひ歌うたを以もつて、挨あい拶さつに代かへた。

伊い太た彦ひこ「アスマガルダあに兄あにの命みことに嬉うれしくも

神かみの恵めぐみに會あひにけるかな。

今いまよりは汝なれが妹いもうとブラワいもうとーダ

姫ひめの命みことと千ち代よを契ちぎらむ」

アスマガルダ「三あ五なの珍うづの教をしへの神かむつ司かさ

吾わが妹いもうとを慈いつくしみませ。

惟かむ神ながらの恵めぐみの幸さちはひて

今け日は嬉うれしき消た息より聞きくかな」

ブラワゝーダわがにあに 吾兄の珍うづの言こと靈たま聞きくにつけ

笑ゑみ榮さかえけり妾むすめの心こころも。

朝あさ夕ゆふに仕つかへ侍はべりし父ちち母ははの

御み許もと離はなれて都みやこへ上のぼるは

ルーブヤこブラワゝーダこ心こころなやます事ことなかれ

神かみに任まかせし二ふた人たりの親おやを。

汝なれは今いま伊いた太た彦ひこ司つかさと諸もろ共ともに

神かみの大道おほぢに安やすく進すすめよは

ブラワゝーダあり難がたし吾わが足たら乳ち根ねの言ことの葉はに

惠めぐみの露つゆの滴したたりにけりは

バヅマラーカ「待ち侘し吉き日佳き時廻り來て
一度に開く蓮花かな」

伊太彦「アスマガルダ兄の命の御爲に

妹の命を媒介めまつらむ。

さり乍ら珍の都のエルサレム

詣でし後と思召し玉はれ」

斯くの如く互に心のたけを述べ終り晚餐を濟ませ、形ばかりの婚禮の式を行ひ
其夜はルーブヤの家に伊太彦、外二人も足を伸ばして休息し、翌早朝よりアスマ
ガルダに送られてスーラヤの島に渡る事となつた。

(大正一二・五・二四 舊四・九 於龍宮館 北村隆光録)

第八章 怪物（一六一五）

紺青の浪を湛へたスーラヤの湖面を稍新しき船に眞帆を孕ませ、晩夏の風を受けて、彼方に霞むスーラヤ山を目蒐けて徐々と進み行く。アスマガルダは艦を操りながら欸乃を謠ふ。

☐ テルはよい所南をうけて

スーラヤ風がそよそよと。

沖に浮べるスーラヤ島は

夜は千里の浪てらす。

晝は日輪夜は龍王の

玉の光で澄み渡る。

此海は月の國でも名高い湖よ

浪のまにまに月が浮く。

三五あななひの神かみの司つかさの伊太彦いたひこさまが

今日けふの門出かどでのお目出度めでたさ。

空そら高く風かぜ澄すみ渡る此湖このうなばら面は

底そこひ分わからぬテルの湖うみ」

伊太彦いたひこは謠うたひ出だした。一同いちどうは船端ふなばたを叩たたいて拍子ひやうしをとる。

伊太いた「三五あななひけう教かむばしらの神柱かむすさのを

神素盞かむすさのを鳴をの大神おほかみの

瑞みづの御言みことを畏かしこみて

玉國たまくにわけ別の師しの君きみと

山野やまのを乗のり越こえ海渡うみわたり

千々ちぢに心こころを碎くだきつつ

神かみの依よさしのメツセージ

盡つくさむ爲ために遙々はるばると

テルの里さとまで來きて見みれば

思おもひがけなきブラワゝーダ

姫ひめの命みことの現あれまして

神かみの結むすびし赤繩えにしをば

茲ここに悟さとらせたまひけり

吾等われらは神かみの御言みこともて

おほくろぬし わだか
 大黒主の蟠まる
 ハルナの都へ言靈の
 いくさ すす
 軍に進む身にしあれば
 途中に於て妻を持ち
 ふうふきどり
 夫婦氣取で征討に
 上るも如何と思へども
 みちひこつかさ
 三千彦司もデビス姫
 妻に持たせる例あり
 わがし きみ
 吾師の君も此度の
 赤繩をいなませ給ふまじ
 ただなにごと ひと
 只何事も人の身は
 神のまにまに進むより
 ほか みち
 外に道なし伊太彦は
 茲に夫婦の息合せ
 さん
 スーラヤ山に驅け登り
 龍の腮の寶玉を
 かみ たす
 神の助けに手に入れて
 ミロク神政成就の
 うづ しんき たてまつ
 珍の神器と奉り
 神の御稜威を四方八方に
 うまら つばら
 完全に委曲に照らすべし
 あゝ惟神々々
 さん
 スーラヤ山は高くとも
 ナーガラシャーは猛くとも
 かみ めくみ かさ
 神の恵を笠に着て
 誠の道を杖となし
 すす
 進まむ身には何として
 しこ まがつ さや
 醜の曲津の障らむや

あゝ勇ましし勇ましし 一度に開く木の花姫の
神の命の御守り ブラワゝーダ姫と諸共に
珍の神業に仕へむと 進み行くこそ楽しけれ
あゝ惟神々々 御霊幸倍ましませよ

ブラワゝーダは又謠ふ。

父と母とに育くまれ 十六才の年月を
蝶よ花よと愛られつ 送り來りし身の果報
思へば思へば有難し これも全く三五の
皇大神の御恵と 朝な夕なに感謝しつ
大御恵の萬分一 報はむものと朝夕に
祈りし甲斐やあら尊 天津國より下らしし
御使人の伊太彦に 嫁ぎの契結びつつ

言靈軍の門出に 立つ白浪と諸共に

彼方に浮ぶスーラヤの 御山に進む嬉しさよ

ナーガラシヤーは猛くとも スーラヤ山は高くとも

神の恵に抱かれし 吾等は如何で撓まむや

救世の船に身を任せ 兄の命に送られて

千尋の湖を進み行く 今日の旅路の勇ましさ

あゝ惟神々々 御靈幸倍ましまして

吾背の君の使命をば 遂げさせたまへ大御神

珍の御前に願ぎまつる 朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも 星は空より墜つるとも

スーラヤの湖は涸るとも 神に誓ひし赤心は

いや永久に動かまじ 吾背の君よ兄君よ

カークス、ベース兩人よ 勇ませたまへ惟神

神は汝と共にあり 神は吾等を守ります

神かみと神かみとに抱いだかれし 人ひとは神かみの子こ神かみの宮みや

天地てんちの中うちに恐おそるべき 物ものは微塵みじんも非あらざらむ

進すすめよ進すすめ此この御船みふね 吹ふけよふけふけ北きたの風かぜ

あゝ惟かむながらかむながら神々々々 御靈みたま幸さち倍はへましませよ[㊦]

今日けふは一人ひと入しほ天氣てんきがよいので漁船ぎよせんの影かげは殊こと更さら多く、彼方あなた此方こなたに眞帆まほ片帆かたほ浪なみのまに
まに浮うかんで、春野はるのの花はなに蝶てふの狂くるふが如ごとく翅はねの様やうな帆ほが瞬またたいて居ゐる。少すこしく浪なみは北きた
風かぜに煽あふられて高たかけれど、何なんとも云いへぬ爽快さうくわいな氣分きぶんである。アスマガルダ、カーク
ス、ベースが汗あせをたらたら流ながして漕こぎ往ゆく船ふねは其日そのひの黄昏たそがれどき時に漸やうやく、スーラヤ山さん
の一角いっかくについた。磯端いそばたは白布しろぬのを晒さらした如ごとく、打うち寄よする浪なみが立たち上あがつて岩いはにぶつ
つかり、碎くだけては散ちる其光景そのくわうけいは可かなり物凄ものすさまじかつた。雪ゆきのやうな白しろい水煙みづけぶりの一丈いっさちやう
許ばかりも立たつ中なかを船ふねを漕こぎ寄よせ、漸やうやくにして陸地りくちについた。さうして船ふねを高たかく磯端いそばた
に上あげて繋つないで了しまつた。日ひは漸やうやく暮くれて來くる。俄にはかに暴風ばうふう吹ふき荒すさび、湖こ面めんは荒浪あらなみ
立たち狂くるひ、ザアザアと物騒ものさわがしき音おとが聞きこえて來き出した。一行いっかう五人ごにんは上陸じやうりく地點ちてんより

いちにちやうばか
一二町許り登つた所の
大岩石の蔭に身を潜めて湖上の疲れを休める事とした。さ
うして明日の拂曉を待つて登山する事と定めて仕舞つた。蓑を布き笠を顔の上に
乗せて岩蔭に一同は横たはつた。夜はおひおひと更わたり暴風も止み、海の唸り
も静まり、四邊は深閑として來た。十四日の月は雲を排して皎々と輝き初めた。
伊太彦、ブラワ、ダ、アスマガルダの三人は他愛もなく睡つて了つた。カーク
ス、ベースの兩人は何だか氣が立つて寢られぬので、まぢまぢして居ると、子の
正刻と覺しき頃、四邊の密林の枝をガサガサと揺つて怪しき物影が近よつて來る。
カークスは慄ひ乍ら、盜むやうにして其姿の行方を見詰て居る。怪しの姿は五人
の前に轟と立ち火のやうな赤い顔を晒し、青い舌を五六寸許り前に垂らして錫杖
をついて居る。忽ち怪物は雷の如き聲を張り上げ、
怪物「イーイーイー、伊太彦の神司とやら、其方はスーラヤ山に、ウバナダ龍
王の玉を取らむとして來た心憎き曲者、これより一足でも登れるなら登つて見よ
と唸鳴りつけた。此聲に伊太彦も兄妹も目を覺まし、きつと聲する方を見れば以
前の怪物が立つて居る。伊太彦は轟く胸をグツと押へ、「惟神靈幸倍坐世」を高

唱し終り、

伊太「アハ、ハ、ハ。スーラヤ山に年古く棲む其方は古狸であらうがな。吾々を何と心得て居る。勿體なくも大神の使命をうけて大蛇退治に進む神の使だ。汝等が如きものの容喙し得べき限りのものでない。控へ居らう」

アスマガルダ兄妹を初め、カークス、ベースは一所に集まり、顔色まで眞青にして慄つて居る。伊太彦は瘦我慢を出して一人空氣焰を吐いてゐる。怪物には此方から云ひ負たら敗北ると云ふ事を豫て聞いて居たので、此方から負かしてやらうと思つて、轟と立ち上り怪物に向つて、

伊太「イーイーイー、齋苑の館の宣傳使、天下無雙の勇士、伊太彦とは俺の事だ。種々な事を致して吾々の邪魔を致すと了見は致さぬぞ」

怪物「口、口、口、碌でもない女を連れて神聖無比なるスーラヤ山に登るとは何の事だ。汝は聖場を汚す癡漢、今此方が神力によつて其方の體を「ビク」とも動かぬ様にして呉れる。覺悟を致せ。ワハ、ハ、ハ、ハ、ても扱ても可憐さうなものだわい」

伊太「口、口、口、碌でもない、ど倒し者奴、ナ、何を吐すのだ。妖怪變化の容喙す

べき限りでない。早くすつ込み居らう。ぐづぐづすると言葉の發射と出かけようか

怪物「ハ、ハ、ハ、ハ、腹が立つか、恥入ったか、薄志弱行の腰拔宣傳使奴、高が知れたウバナンダ龍王の玉を取るに加勢を頼み、女を連れて來るとは、實に見下げ果てたる腰拔野郎奴」

致「ハ、ハ、張子の虎のやうに首ばかりふりやがつて何の態だ。サア早く退散致すか、正體を現はすか、何神の化身だと云ふ事を白状致すか、返答次第によつては此方にも考へがあるのだ」

怪物「二、二、憎いか、いや憎らしいと思ふか、其苦い顔は何だ。

ホ、ホ、呆け野郎奴、身の程知らずも程があるわい。

へ、へ、下手な事を致して、後でベースをカークスな。

ト、ト、途方途轍もない大それた欲望を起し、栃麵棒を振つてトンボ返りを致

し、岩窟のドン底迄おとされて頓死すると云ふ災厄が目の前に近づいて來て居る

のを知らないのか。イイ馬鹿だなア

致「チ、ちやアちやア吐すな、些も貴様等のお世話に預ら無くてもよいのだ。
智謀絶倫の伊太彦、

り、凜々たる勇氣を鼓して、ウバナダ龍王の館に進む神軍の勇士だ。

又、ぬかりのない此方、水も漏さぬ仕組を致して茲に、いづ御魂が登山探検
と出かけたのだ。すつ込んでおらう。其方の出て来てゴテゴテ申す幕ぢやないの
だ」

怪物「ル、累卵の危きを知らぬ癡呆者奴、類は友を呼ぶと云ふ馬鹿者の好く揃
つたものだ。

オ、大馬鹿者奴、大泥坊奴、大戯氣者、神の道歩きながら、鬼か大蛇のやう
になつて龍神の玉を、「ぼつたくらう」とは此方も「おとましよう」なつて來たわ
い。身の程知らずの横道者だな」

伊太「ワハ、ハ、笑はしやがるな。没分曉漢奴、吾輩のすることに容喙する
権利がどこにあるか。悪い事は些しも致さぬ善一筋の宣傳使ぢや。分らぬ事を申
さずに、己の住所にトツトと引込んだがよからうぞ」

怪物「カ、構ふな構ふな、惟神だとか神の道だとか何とか、かとか申て、其處邊を騙り歩く我羅苦多宣傳使だらうがな。第一女をイヤ嬢を連れて登つて來るとは以ての外だ。當山の規則を破つた大罪人奴、サア覺悟を致せ、頭からこの大きな口で嘔ぶつて食て仕舞つてやらう」

伊太「ヨ、妖怪變化の分際として此方に指一本でも觸へられるのなら觸へて見よ。下らぬ世迷ひ事を申さずに、もはや夜明に間もあるまいから、氣の利いた化物は足を洗うて疾に引込む時間だ。與太リスクを竝べずに、よい加減に伏さつたらどうだ」

怪物「タ、癡呆者奴、要らざる類術を叩くと叩きつぶしてやるぞ。高が知れた人間の三匹や五匹一口にも足らぬわい。欲の熊鷹股が裂けると云ふ事を貴様は知らぬのか癡呆者奴、

レ、レ、戀愛至上主義を發揮して神聖なる當山に迄、初めて嬢をもつた嬉しさにトチ迷ひ登つて來ると云ふデレ助だから、吾々仲間のよい慰み者だ」

伊太「ソ、ソ、そうかいやい、そらさうだらう。羨りいなつたか。一寸位手を握

らしてやり度いが、矢張それも止めて置こうかい、何だ、その六ヶ敷い面つきは。貧相なものだのう」

怪物「ツ、月が空から貴様の脱線振を見て笑つてゐるのも知らぬのか。心の盲、心の聾は仕方がないものだなア。捉まへ所のない屁理屈を並べて其處邊を遍歴致すと云ふ強者、おつとドツコイ、つまらぬ代物だからなア。」

ネ、猫撫聲を出しやがつて、夫婦がいちやづいて此島に打渡り、グウースケ八兵衛と睡つて居るとは念の入つた癡呆者だ」

「ナ、何を吐しやがるんだい。情ない事を云ふて呉れない。何程羨ましくても貴様の女房にしてやる譯には行かず、あゝ難儀のものが出来たものだ。俺も同情の涙に暮れぬ事もないのう怪物」

怪物「ラ、らつちも無い事を吐くもんぢやないわい。」

ム、昔から誰一人目的を達した事のない龍王の玉を取らうとは無法にも程がある。ほんに命知らずの無鐵砲者だのう。こりや無茶彦、向つ腹が立つか、ムツとするか、蟲が好かぬか、夫れや無理もない。併し乍ら玉が取りたけれや明朝と

つとと登つたらよからう。此山の中腹には死線といつて人間の通れぬ所があるのだ。其處へ往くと邪氣充滿し、其方如きものが其毒にあたると心臓痲痺を起し、水脹れになつて死ぬるのだから、さうすれば俺達が寄つて集つて皆喰つて仕舞つてやるのだ。ても扨ても不愼ものだなア」

伊太「ウフ、五月蠅奴だなア、そんな事を申て俺達の荒肝を取らうと思ふても駄目だぞ。牛の丸焼でも二匹三匹一遍に平げる此伊太彦さまだ。ウゴウゴ致して居るともう堪忍袋の緒が切れるぞよ。」

「イ、何時迄も何時迄も羨ましさに夫婦の睦まじい姿を見て指を銜へて見て居るより、いい加減に幻滅致したらどうだい。悪戯も程があるぞよ」

怪物「ノ、ノ、野太い代物だなア。野に寝たり、山に寝たりして露命を繋いで来て、漸くテルの里で満足の家に泊めて貰つたと思つて得意になり、ブラワァーダを女房に持つたと思ふて其はしやぎ方は何だ。天下の馬鹿者、命知らずとは貴様の事だ。イタイタしい伊太彦の我羅苦多奴、イヒ、イヒ、」

伊太「オ、お構ひだ、俺のする事をゴテゴテ構ふて呉れない。」

ク、苦勞の凝の花が咲いたのだ。貴様もこんなナイスが欲しけりや、ちつと

誠の道に苦勞を致せ

怪物「ヤ、矢釜敷いわい、夜分に山の中で露の宿を取る厄雜宣傳使奴、八岐大

蛇の一の乾兒の此方様に今命を取られるのを御存じがないのか。

マ、負惜みのつよい、眞面目腐つた其面付で表面をかざつて居るが、貴様

の心の中は地異天變大地震が揺つて居らうがな。どうだ恐れ入つたか

伊太「ケ、怪體の悪い怪しからぬ奴だ。怪我が無い中に早く歸れといったら歸

らぬか。

フ、不都合な、フザケた事を致すと、捕縛つて仕舞ふぞ。いや踏み潰して

やらうか、何が不足で夜夜中、安眠妨害に出て來せたのだ。不都合な不届きな奴、

コ、耐へ袋が切れるぞよ。こん畜生、八岐大蛇の眷族なぞは眞赤な偽り、其

方は數千年劫を経た、苔の生えた小狸であらうがな。

エ、邪魔臭ひ、この金剛杖をもつて叩きつけてやらう。最愛のブラワ、

ダが安眠の妨害になる

怪物「テ、々、【てんごう】を致すな、此方の神力と貴様の力とは天地の相違だ。デندن蟲の角を振り立てて氣張つて見たとて岩石に蚊が襲來するやうなものだ。ア、々、阿呆な限りを盡さずと、早く此處を立ち去れ。グツグツして居るとアフンと致して泡を吹くぞよ。それでも聞かねば、アンポンタンの黒焼にして食てやらうか、サ、々、サア、どうだ早速に口が開くまいがな。扱ても扱ても見下げ果てたる腰抜計りだな。

キ、々、氣に喰はぬ怪物だと思ふであらうが、この方を一體誰だと心得て居る。鬼神もひしぐ勇ある結構な五大力様だぞ。

ユ、々、々、夢々疑ふ事勿れ。只今幽界より其方の命を召し取りに來たのだ。ても扱ても愉快な事だなア。

メ、々、々、迷惑さうな其面付、薩張面目玉を踏み潰され、折角貰ふた嬢には愛想盡かされ、メソメソ吠面かはくのが、可憐さうだわい。サア冥途の旅にやつてやらう」

伊太「ミ、々、々、見て居れ。此伊太彦の神力を、何程貴様が威張つた所が駄目だ。

死線だらうが、五線だらうが神力をもつて突破し、一戦に勝鬨をあぐる三五教の
宣傳使様だ。「え」體の知れぬ汝等如き怪物に辟易するやうで、どうしてハルナ
の都に進む事が出来ようか。タクシヤ力龍王でさへも屁込ました此方だ」
怪物「ヒ、仰有りますわい。日向にあてたらハシヤぐやうな腕振りまはし、何
程威張つて見た所で、

モ、もう駄目だ。耄碌宣傳使の伊太彦司、

セ、雪隠で饅頭食ふやうな甘い事を考へても薩張駄目だ。終りの果には糞を

垂れるぞよ」

伊太「ス、好かんたらしい屁理屈を垂れな。酢でも蒟蒻でもいかぬ妖怪だな。

ひとふたみよいつむゆななやこのたりももちよろう
一二三四五六七八九十百千萬

惟神靈幸倍坐世」

怪物「キヨキヨキヨ京疎い事を致す伊太彦司、また幽冥界でお目にかからう。エ

へ、へ、へ、」

と體を揺りながら何處ともなく消えて仕舞つた。

伊太「アハ、々、仕様の無い古狸がやつて来やがって、嚇し文句を竝べ立て面白
い事だつた。アハ、々、」

アスマガルダは漸く胸をなでおろし、四邊をキヨロキヨロ見廻し乍ら、

「ア、先生随分偉い奴がやつて来たぢやありませんか。どうなる事かと思つて大
變心配しましたよ。併し貴方の私の強いのにも呆れましたよ」

伊太「アハ、々、實の所は私も一寸面喰つたのだが、こんな事に負てはならな
いと空元氣を出して見た所、キヤツキヤツと云つて逃げた時のおかしさ、いや心
地よさ。齋苑の館出立以來のよい経験だよ」

ブラワ「ダ、神様の仰の通り妾の夫伊太彦さまは本當に勇壯活潑の神使です。

妾はもうこんな強い方を夫にもつならば世に恐るべきものは無いませぬわ」

カークス「アハ、々、豪いお惚けでムいますこと。なあベース、お浦山吹の至
りぢやないか」

ベース「ウフツ」

伊太 〇 古狸吾枕邊に現はれて

フルナの辨をふるふをかしさ。

ブルブルと慄ひ乍らに古さまの

世迷ひ言をば聞く人もあり

カークス 〇 恐ろしさカークスと思へど何となく

腹の底から慄ひけるかな

ベース 〇 恐ろしさにベースをカークス吾々は

地獄におちし心地なりけり

其後は何事もなく夜はカラリと明けた。是より一行五人は死線を越へてウバナ

ンダ龍王の匿る岩窟の玉を取らむと進み往く事となつた。

（大正一二・五・二四 舊四・九 於教主殿 加藤明子録）

第九章 超死線（一六一六）

水面を抜く事、七千三百尺のスーラヤ山の中腹迄一行五人は漸く登りつめた。

これより上は夜前妖怪の云つた死線地帯である。山の中腹に邪氣帯があつて四方を取圍み、何れもこの死線を突破せむとして、邪氣にうたれ、身體水症病を起し、

ここにパタリパタリと倒れて一人もこれより上に登つたものはない。何程夜光の

玉が燦爛と輝き渡り高價な寶が目の前にブラ下つて居つても此死線を越へる事は

到底人間業では出来ぬ事であつた。此地帯は殆んど七八十間ばかりの幅であつた。

死線の近邊迄來て見ると白骨累累として横たはつて居る。伊太彦は此光景を見て、

これは到底一通りでは突破する事は出来ない。神力を得て登るに如かずと、ここ

に伊太彦を導師として天津祝詞を奏上し、天の數歌を歌ひ終へ乍ら勢に任せて驅
け上つた。漸くにして一行五人は死線を突破する事を得た。
伊太「あゝ惟神靈幸倍坐世。開闢以來龍王と雖も此死線を突破して下る事を得な
い危険帯を無事に越へられたのも全く神様の御神徳だ。」

皇神の恵みの衣に包まれて

危き死線を渡りけるかな。

惟神神に任せば世の中に

恐るべきものはあらしとぞ思ふ』

ブラワ「ーダ」千早振る神世も聞かぬ死の關を

無事に越へたる人ぞ尊き。

靈幸はふ神の守りのなかりせば

如何で渡れむ醜の死線を

アスマガルダ 伊太彦の神の司の功績は

神代にも聞かぬためしなりけり。

ウバナナダ・ナーガラシャーも伊太彦の

武者振り見れば驚くなるらむ。

スーラヤの海に浮びし此山に

初めて登る今日の嬉しさ

カークス 恐ろしき醜の死線を突破して

登り来りぬ山の尾の上に。

ウラル彦神に仕ふる信徒が

屍かばねさらせしスーラヤの山やま」

ベース「あななひ 三五あななひの神かみの力ちからに守まもられて

安やすく登のぼりぬ寶たからの山やまに。

さり乍ながら胸むね苦くるしくもなりにけり

醜しこの死線しせんに觸ふれたる爲ためか」

カークス「われ 吾われも亦また胸むね騒さわがしくなりにけり

守まもらせ玉たまへ三五あななひの神かみ」

ブラワ「ーダ「肉體からだは俄にはかに重おもくなり行きゆきて

行ゆきなやみけり此この山道やまみちを

伊太彦いたひこ 村肝むらきもの心こころひきたて神かみに據より

登のぼれば登のぼる道みちもありけり

アスマガルダ 何なんとなく胸むねは騒さわぎぬ手ても足あしも

心こころの儘ままに動うごかずなりぬ

伊太彦いたひこ 名なにし負おふ死線しせんを突破とつぱしたる身みは

少すこしの惱なやみは免まぬかれざらまし。

いざさらば心こころの駒こまに鞭むちちて

進すすみ行ゆかなむ龍りゅう王わうの岩いは窟やに

伊いた太ひ彦こは先さきに立たつて一いつ行かうの心こころを勵はげませ乍ながら自じ分ぶんも重おもたい足あしを引ひ摺きりつつ峰みねの尾を
のへ上かぜの風かぜに吹ふかれ、歌うたを謠うたつて元げん氣きよく進すすみ行ゆく。四よ人にんは後あとに牛うしの歩あゆみの抄は々ばし
からず、汗あせをタラタラ流ながし乍ながら喘あへぎ喘あへぎ従したがひ行ゆく。

伊いた太ひ彦こ 神かみが表おもてに現あらはれて 善ぜんと惡あくとを立たてわ

三あ五な教ひの宣せん傳でん使し 伊いた太ひ彦こ司つかさが今いまここに

神かみの御み言ことを蒙かうむりて ナーガラシヤ一の永とこ久しに

守まもらせ玉たまふ瑞みづの玉たま 神しん政せい成じやう就じゆのそその爲ために

吾わが手てに受うけてエルサレム 貴うづの都みやこの大おほ前まへに

獻たてまらむと登のぼり來きぬ 此この山やま守まもるウバナンダ

ナーガラシヤ一ものに物まを申まをす 汝なれが命みことは千ち早はや振ふる

神かみ代よの遠とほき昔むかしより 神かみの怒いかりを蒙かうむりて

スーラヤ山の岩窟に 閉ぢ込められて千萬の
悩みを受けしいたはしき 三千世界の梅の花
一度に開く時は充ち 八大龍王悉く
神の恵の御許しに 天津御國に救はれて
尊き神の御柱と 仕へまつらむ世となりぬ
喜び給へウバナダ 龍王の前に告げまつる
朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも
假令大地は沈むとも 誠一つの三五の
神の言葉に二言ない 心を平に安らかに
此伊太彦が使命をば 諾ひまして逸早く
夜光の玉を渡せかし 汝の身靈を之よりは
廣き世界に現はして 五六七神政の柱とし
天地日月相並び 神と人との隔てなく
いと安らかに世を照らし 醜の曲靈を悉く

言向和し神國の常世の春の花匂ふ

目出度き御代と開き行く
此神業を諾ひて

一日も早く歸順せよ
あゝ惟神々々

神に従ふ武士よ
少しの悩みに撓まずに

心を引立て進めかし
神は汝と俱にあり

人は神の子神の宮
如何に死線を越ゆるとも

障害のあるべき道理なし
心一つの持ちやうぞ

來れよ來れ早や來れ
龍王の岩窟近づきて

御空を照す光明は
晝とは云へど明かに

吾目に映り來りけり
勝利の都は近づきぬ

勇めよ勇め言靈の
神の使の御軍よ

カークスは一丁ばかり遅れ乍ら足を引摺りもつて
謠ひ初めた。

あゝ惟神々々 神の守りに吾々は

さも恐ろしきスーラヤの 死線を越へて登りけり

さはさり乍ら何となく 足許重く胸騒ぎ

歩み倦みし苦しさを 伊太彦司待ち玉へ

如何に心を焦つとも 自由にならぬ吾體

憐れみ玉へ今一度 伊吹の狭霧に曲津身を

袂はせ玉へ惟神 神かけ念じ奉る

ブラワゝーダ 吾背の君よ待ち玉へ 踏みも習はぬ高山を

一瀉千里に登りつめ 吾肉體も疲れ果て

手足も重くなりけり 汝が命は宣傳使

如何なる枉の棲處をも 恐れ玉はずさり乍ら

兄の命のアスマガルダ その外二人の伴人が

死線の邪氣に襲はれて

手足も心もままならぬ

悲しき身とはなりましぬ

ナーガラシャーの岩窟は

吾目の前に横はり

夜光の玉の御光は

四邊に輝き玉へども

吾等の心は何となく

曇りて黄泉の道芝を

迎るが如く覺ゆなり

休ませ玉へ背の君よ

偏に願ひ奉る

伊太彦はブラワゝーダの此歌を聞いて四人の者の行歩に惱んで居る事を憐れみ、

山頂に暮布せる岩石に腰かけて、暫らく落伍者の追付くを待つ事とした。

カークスは氣息奄々として息も絶え絶えに這ふやうにして追付き來り、

カークス「もし先生、神様の御用とは申し乍らどうにも斯うにも苦しくて堪りま

せぬわ、一つ神様に願つて下さいな」

伊太「神様に願ふのは、お前の心で念じた方が宜い。俺だとして全責任を負ふてゐ

るのだから足の痛いのも、體の苦しいのも辛抱してここ迄やつて來たのだよ。何

れ神界の御用をするのだから、さう樂々に勤まるものではない。神徳さへあれば何でもないのだがナーガラシャーでさへも死線を越へて逃げ出す譯にもゆかず、神代から此處に蟄伏して居る様な險難千萬の處を越へて來たのだから、少し位苦しいのは當然だよ。暫らくここの山風に當つて休んで居たら又元氣恢復するだらうよ」

カークス「はい、有難うムいます。何事も神業だと思へば、假令死んでも怨みとは思ひませぬ」

伊太「そんな氣の弱い事を云ふものぢやない。永遠の命の源泉たる瑞の御魂さまがお守り下さる以上は大丈夫だよ。兔に角神を信じ神に祈るより外にないのだ。

あゝ惟神靈幸倍坐世」

ベース「先生、私も何だか弱音を吹くやうですが、息がきれさうになつて來ました」

伊太「エー、氣の弱い事を云ふ男だな。もう一息だ。神様の御神力に頼つて目的を達せねばなるまい。九分九厘行つた處で成就せない事があるとどうするか。そ

んな弱蟲では現幽一致を守らせ玉ふ神様の御前に、復命する事が出来ぬぢやないか」

ベース「ハイ、お言葉の通りでムいますが、どうも苦しくて欲にも徳にも換られなくなりまして」

伊太「困つたな。兔も角祈祷が肝腎だ」

アスマガルダ「スーラヤの湖水の彼方を眺むれば

父と母との戀しくなりぬ」

伊太彦「千早振る神の大道に進む身は

此世のものを忘るるに如かず。

父母の恵は如何に高くとも

神の恵に比ぶべきやは」

ブラワゝーダあめつち 天地の誠まことの親おやに抱いだかれて
神國みくにに登のぼる心地こころしにけり〇

ベースなにごと 何事も皇大神すめおほかみの御心みこころの

ままと思おもへば何なにをか怨うらみむ。

苦くるしさののち後にたの樂きたしみ來きたるてふ

嚴いづの教をしへを思おもひて微笑ほほゑむ〇

伊太彦いたひこ いざさらば夜光やくわうの玉たまの所在ありかへと

進すすみ行ゆかなむ諸人もろびと立たてよ〇

斯かく互たがひに述懐じゆつくわいをのべ終をはり伊太彦いたひこは又また先頭せんとうに立たち龍王りうわうの潛ひそむてふ岩窟がんくつの側近そばちかく立たち

寄つた。

此岩窟は深き井戸の如く縦穴が開いてゐる、そして幾丈とも知れぬ岩窟の底には夜光の玉が目も眩きばかり幾つともなく光つて居る。伊太彦は手の尾の上を搜つて藤蔓を切り之にて太き繩を縋ひ、入口の岩窟に一端を括りつけ綱を傳ふてスルスルスルと底深く下り着いた。一同も勇氣を鼓して伊太彦の後に従ひ藤の繩梯子を足にて刻み乍ら、漸くに岩窟の底に安着した。見れば其處から又横穴が開いてゐて無数の玉が光つて居る。奥の方にはウバナンダ龍王が澤山な眷族をつれて蜒々と蟠まつて居るその恐ろしさ、伊太彦は雙手を合せ拍手をうち、天津祝詞を奏上せむとしたが、どうしたもののか俄に舌硬ばり一言も發し得なくなつて其場に昏倒して了つた。アスマガルダを初め外一同も枕を竝べて其場に昏倒した。あゝ五人の運命は如何になり行くであらうか。

(大正一二・五・二四 舊四・九 於教主殿 北村隆光録)

第三篇 幽迷怪道

第一〇章 鷺と鴉（一六一七）

人間が靈肉脱離の後、高天原の樂土又は地獄の暗黒界へ陥るに先んじて何人も踏まねばならぬ経過がありまして、この状態は三種の區別があります。そしてこの三状態を大別して、外面の状態、準備の状態、内面の状態と致します。併し乍ら死後直に高天原へ上る精靈と地獄へ陥る精靈とのあることは、今日迄の物語に於て讀者は既に已に御承知の事と思ひます。中有界一名精靈界の準備を経過せずして直に天界又は地獄に行くものは生前既に其準備が出来て居て善惡の情動並に因縁によつて各自靈魂相應の所を得るものです。右の如く準備既に完了せる精靈にあつては只その肉體と共に自然的世界的なる惡習慣等を洗滌すれば直に天人の保護指導に依つて天界の、それ相應の所主の愛に匹敵した樂土に導かるるもので

あります。之に反して直に地獄に陥る精靈にあつては、現界に於て表面にのみ愛と善とを標榜し且つ偽善的動作のみ行ひ、内心深く悪を藏し居りしもの、所謂自己の凶悪を糊塗して人を欺くために善と愛とを利用したものであります。中にも最も詐偽や欺騙に富んで居るものは足を上空にし頭を地に倒にして投げ込まれるやうにして落ち行くものです。この外にも種々様々の状態にて地獄へ陥ち行くものもあり、或は死後直に岩窟の中深く投げ入れられるものもありますが、斯の如き状態になるのは凡て神様の御攝理で精靈界にある精靈と分離せむがためであります。或時は岩窟内より取り出され、又ある時は引き入れられる場合もあります。斯の如き精靈は生前に於て口の先計りで親切らしく見せかけて、世人を油斷させ其虚に乗じて自己の利益を計り、且つ世の人に損害を與へたものですが、斯様な事は比較的少數であつて、その大部分は精靈界に留められて神教を授かり精靈自己の善悪の程度によつて神の順序に従ひ、第三下層天國、又は地獄へ入るの準備を爲さしめらるるものであります。人間各自の精靈には外面的、内面的の二方面を有しております。精靈の外面とは人間が現世に於て他の人々と交はるに際

し其身體をして之に適順せしむる所の手段を用ひる事で特に面色、語辭、動作等の外的状態であり、精靈の内面とは人の意思及びその意志よりする想念に屬する状態であつて、容易に外面には現はれないものであります。凡ての人間は幼少の頃より朋友の情だとか、仁義誠實、道德等の武器を外面に模表する事を習つて居りますが、其意志よりする所の凡ての想念は之を深く内底に包藏するが故に、人間同士の眼よりは之を觀破することは實に不可能であります。現代の人間はその内心は如何に邪惡無道に充ちて居つても、表面生活上の便宜のために似非文明的生涯を營むのは常であります。現界永年の習慣の結果、人間は精神痺し切つて了つて、自己の内面さへ知る事が出来なくなつて居ります。また自己の内面的生涯の善惡などに就いて煩慮することさへも稀であります。況んや自己以外の他人の内面的生涯の如何を察知するに於ておやであります。死後直ちに精靈界に於ける人間精靈の状態はその肉體が現世にありし時の如く依然として容貌、言語、性情等は相酷似し、道德上、民文上の生活の状態と少しの相違もない。故に人間死後の精靈にして精靈界に於て相遇ふ事物に注意を拂はず、又天人が彼精

靈を甦生せし時に於ても、自己は最早一箇の精靈だといふことを想ひ起さなかつたなれば、その精靈は依然高姫の如く現界に在つて生活を送つて居るといふ感覺をなすの外は無いのです。故に人間の死といふものは唯此間の通路に過ぎないものであります。

現世を去りて未だ幾何の日時も経ない人間の精靈も又現界人の一時的變調によつて靈界に入り來りし精靈も、先づ以上の如き状態に居るものであつて、生前の朋友や知己と互に相會し相識合ふものであります。何となれば、精靈なるものは、その面色や言語等によつて知覺し又相接近する時はその生命の圓相によつて互に知覺するものです。靈界に於て甲が若し乙の事を思ふ時は忽ちその面貌を思ひ之と同時に、その生涯に於いて起りし一切の事物を思ふものです。そして甲に於て之を爲すときは、乙は直ちに甲の前に現はれ來るもので丁度態人を使ひに遣つて招いて來るやうなものです。靈界に於て何故斯の如き自由あるかと謂へば靈界は想念の世界であるから自ら想念の交通があり何事も靈的事象に支配されて居りますから、現界の如く時間又は空間なるものが無いからであります。それ故靈界に

入り来りしものは其想念の情動によつて、互にその朋友、親族、知己を認識せざるは無く、現世にあつた時の交情によつて互に談話も爲し、交際も爲し、殆ど現世にありし時と少しの相違もないのです。中にも夫婦の再會などは普通とせられて居ますが、夫婦再會の時は互に相祝し、現世に於て夫婦雙棲の歡喜を味はひ楽しんで程度に比して、或は永く久しく、或は少時間、その生涯を共にするものです。そしてその夫婦の間に眞實の婚姻の愛、即ち神界の愛に基づいた心の和合の無い時は、その夫婦は少時にして相別るるものであります。

又夫婦の間に現世に於て互に了解なく嫉妬や不和や争鬪や、その他内心に嫌忌しつゝあつたものは、此仇讎的想念は忽ち外面に破裂して相争鬪し分離するものであります。

靈界にある善靈即ち天人は現界より新たに入り来りし精靈の善惡正邪を點檢すべく、種々の方法を用ふるものです。精靈の性格は死後の外面状態にあつては容易に辨別が付かないものです。如何に凶惡無道なる精靈にても外面的眞理を克く語り、善を行ふ事は至誠至善の善靈と少しも相違の點を見出すことが出来ないの

です。外面上は皆有徳愛善らしき生涯を送つて居る。現界に於て一定の統治制度の下にあつて法律に服従して生息し、之に由つて正しきもの、至誠者との名聲を博し或は特別の恵を受けて尊貴の地位に上り富を蒐めたるものであつて、是等は死後少時は善者有徳者と認めらるるものです。併しながら天人は是等の精靈の善悪を區別するに當り、大抵左の方法に由るものであります。凡て何人も所主の愛に左右さるるものでありますから、即ち凶靈は常に外面的事物にのみ就て談論するを好むこと甚だしく内面的事物に就ては毫も顧みないからであります。内的事物は神の教、又は聖地救世主の神格、及び高天原に關する眞と善とに關しては之を談論せず、又之を教ふるも聽くことを嫌忌し更に意に留めず、又神の教を聽いて樂まず、却て不快の念を起し面貌にまで表はすものです。現界人の多くは凡て神佛の教を迷信呼ばはりをなし、且つ神佛を口にする事を大に恥辱の如く考へて居るものが大多數であつて、大本の教を此方から何程親切を以て聞かし、天界に救ひ助けむと焦慮するとも、地獄道に籍を置いた人間には、到底駄目である事を屢實驗いたしました。併しながら大慈大悲の大神の御心を奉體し一人たりとも天

界に進ませ、永遠無窮の生命に赴かしめ以て神界御經綸の一端に仕へなくては成らないのであります。靈界に於ても現界に於ても同一ですが、地獄入りの凶靈と天界往きの善靈とを區別せむとするには凶靈は屢ある一定の方向に進まむとするを見る事が出来ます。凶靈がモシその意のままに放任される時はそれに通ずる道路を往來するもので、彼等が往來する方向と轉向する道路とによりて、その所主の愛は何れにあるかを確めらるるものであります。

現界を去つて靈界に新たに入り來る精靈は何れも高天原とか地獄界とかの或る團體に屬して居ないものは有りませぬが、併し之は内的の事ですから、その精靈が尚ほ依然として外面的状態にある間は其内實を現はさない。外面的事物が凡ての内面を蔽ひかくして了ひ、内面の暴惡なるものは、殊に之を蔽ひかくすこと巧妙を極めて居るからです。併し或る一定の期間を経たる後に彼等の精靈が内面的状態に移る時に於て、その内分の一切が暴露するものです。この時は最早外面は眠り且つ消失し内面のみ開かるるからであります。人間の死後に於ける第一の外面的情態は或は一日、或は數日、或は數ヶ月、或は一年に渉ることがあります。

されど一年を越ゆるものは極めて稀有の事であります。斯の如く各自の精靈が外面状態に長短の差ある所以は、内外両面の一致不一致によるものです。何故なれば、精靈界にあつては何人と雖も思想及び意志と言説又は行動を別にする事を許されないから、各精靈の内外両面が一となつて相應せざればならぬからであります。

精靈界にあるものは、自有の情動たる愛の影像ならぬものはありませぬから、その内面にある所の一切をその外面に露はさない譯にはゆきませぬ。此故善靈なる天人は先づ精靈の外面を暴露せしめ、是を順序中に入らしめて以て其内面に相應する平面たらしめらるるのであります。そして斯の如き順序を取る所は精靈界即ち中有界の中心點たる天の八衢の關所であつて、伊吹戸主神の主管し給ふ、ブルガリオに於て行はるるものであります。

内面的情態は人間の死後或る一定の期間を中有界にて経過し、心即ち意志と想念に屬する精靈の境遇を云ふのです。人間の生涯、言説、行爲等を觀察する時は何人にも内面外面の二方面を有することが知り得られます。その想念にも意志に

も内外両面の區別があるものです。凡て民文の發達した社會に生存するものは他人の事を思惟するに當り、その人に對する世間の風評又は談話等に由つて見たり聞いたりした所のものを以て人間の性能を觀察する基礎となすものです。されど人間は他人と物語る時に際して自分の心の儘を語るものではありません。たとへ對者が悪人と知つても、又自分の氣に合はない人であつても、その交際應接などの點は成る可く禮に合ふべく、又相手方の感情を害せざる様と努むるもので、實に偽善的の行爲を敢てするもので、又此でなければ社會より排斥されて了ふやうな矛盾が出来る世の中でありませぬ。そして凡ての人は見えすいたやうな嘘でも善く言はれると大變に歡ぶものです。之に反し眞實を其人の前に赤裸々に言明する時は非常に不快の念を起し、遂には敵視する様になり、害を加ふるやうな事が出来るものです。故に現代の人間の言ふ所、行ふ所は、その思ふ所願ふ所と全く正反對のものです。偽善者の境遇にあるものは、高天原の經綸や死後の世界や、靈魂の救ひや聖場の眞理や國家の利福や隣人の事を語らしておけば恰も天人の如く愛善と信眞に一切基づける様なれども、其内實には高天原の經綸も靈魂の救ひ

も死後の世界も信じないのみか、只愛する所のものは自己の利益あるのみであります。斯の如き偽善者、偽信者は随分太古の教徒の中にも可なり澤山あつたものですが、現代の三五教の中には十指を折り數へたら最早残るは外面的状態にあるもの計りで、天國に直ちに上り得る精靈は少いやうであります。

凡て人間の想念には内面、外面の區別がありまして、斯の如き人間は、外面的想念によりて言説をなし、内面には却て異様の感情を包藏して居るものです。そして内外両面を區別する事に努めて、一とならない様にと努むるものです。眞に高天原の經綸を扶け聖壇の隆盛を祈り死後の安住所を得むことを思はば如何なる事情をも道のためには忍ぶべきものであります。神様の御用にたて得らるるだけの餘裕を與へられたのも皆神様のお蔭である事を忘れ、自有と心得て居るからです。爰に外面内面の衝突を來すことになつて來るのです。併し現代の理窟から言へば、内外両面を區別して考ふる事が至當となつて居ります。そして右様の説に對しては種々の惡名を以て對抗し、且つ惡魔の言と貶すものであります。又斯の如き人は内面的想念の外表に流れ出でて爰に暴露することなからむを勉め、現界

的(てき)道理(だうり)によつて、凡(すべ)てを解決(かいけつ)せむとし内面的(ないめんてき)神善(しんぜん)を抹殺(まつざつ)するものであります。

さり乍(なが)ら人間(にんげん)の創造(さうぞう)さるるや、その内面的(ないめんてき)想念(さうねん)をして相應(さうおう)に由(よ)りて外面的(ぐわいめんてき)想念(さうねん)と相一(あひいつち)致(ち)せしめなくては成(な)らない理由(りいう)があるのです。この一致(いつち)は眞(しん)の善人(ぜんにん)に於(おい)て見る所(みるところ)であつて、その思(おも)ふ所(ところ)も言(い)ふ所(ところ)も、唯(ただ)々(ただ)善(ぜん)のみだからであります。かくの如(ごと)き内外(ないぐわい)兩面(りやうめん)の想念(さうねん)の一致(いつち)する事(こと)は到底(たうてい)地獄(ぢごく)的(てき)惡人(あくにん)に於(おい)ては見(み)る事(こと)が出来(でき)ない。何(な)故(ぜ)なれば、心(こころ)に惡(あく)を思(おも)ひながら善(ぜん)を口(くち)に語(かた)り全(ま)く善人(ぜんにん)と正(せい)反(はん)對(たい)の情態(じやうたい)にあるものです。外面(ぐわいめん)に善(ぜん)を示(しめ)して惡(あく)を抱(いだ)いて居(を)る。かくて善(ぜん)は惡(あく)のために制(せい)せられ、之(これ)に使役(しえき)さるるに至(いた)るのであります。惡人(あくにん)はその所主(しよしゆ)の愛(あい)に屬(ぞく)する目的(もくてき)を達成(たつせい)せむがために、表(おもて)に善(ぜん)を飾(かざ)つて唯(ゆ)一の方便(ほうべん)となすものです。故(ゆゑ)にその言説(げんせつ)と行動(かうどう)とに現(あら)はれる所(ところ)の善事(ぜんじ)なるものは、その中(なか)に惡(あく)き目的(もくてき)を包藏(ほうざう)して居(を)るので、善(ぜん)も決(けつ)して善(ぜん)でなく、惡(あく)の汚(けが)す所(ところ)となるは明(めい)白(はく)なものです。外面的(ぐわいめんてき)に之(これ)を見(み)て善事(ぜんじ)となすものは、その内面(ないめん)を少(すこ)しも知(ち)悉(じつ)せざるもの言葉(ことば)であります。

眞(しん)の善(ぜん)に居(を)るものは、順序(じゆんじよ)を亂(みだ)すこと無(な)く、その善(ぜん)は皆(みな)内面的(ないめんてき)想念(さうねん)より流(なが)れて外面(ぐわいめん)に出(で)てそれが言説(げんせつ)となり行(かう)動(どう)となるのは、人間(にんげん)は斯(かく)の如(ごと)き順序(じゆんじよ)のもとに創造(さうぞう)

せられたものであるからであります。人間の内面は凡て高天原の神界にあり、神界の光明中に包まれて居る。その光明とは、大神より起來する所の神眞で所謂高天原の主なるものです。人間は内外兩面の想念があり、その想念が内外互に相隔たり居ることは前述の通りであります。想念と言つたのは其中に意志をも包含して併せて言つたのです。蓋し想念なるものは意志より來り、意志なければ何人とも雖も想念なるものは有りませぬ。又意志及び想念と云ふ時は、この意志の裡にも又情動、愛、及び、是等より起來する歡喜や悅樂をも含んで居ります。以上のものは何れも意志と關連して居るからです。何故なれば人はその欲する所を愛し、之によつて歡喜悅樂の情を生ずるものだからです。又想念といふことは人が由りて以て其情動即ち愛を確かむる所の一切を言ふのです。何んとなれば想念は意志の形式に過ぎないものです。即ち意志が由りて以て自ら顯照せむと欲する所のものに過ぎないからであります。この形式は種々の理性的解剖によつて現れるもので、その源泉を靈界に發し人の精靈に屬するものであります。

凡て人間の人間たる所以は全くその内面にあつて内面を放れた所の外面にあら

ざることを知らねばならない。内面は人の靈に屬し、人の生涯なるものは、此の内面なる靈（精靈）の生涯に外ならないからです。人の身體に生命のあるのは此精靈に由るものです。是の理によつて人はその内面の如くに生存し永遠に涉りて變らず、不老不死の永生を保つものです。されど外面は又肉體に屬するが故に、死後は必ず離散し消滅し、其靈に屬して居た部分は眠り、唯内面のために、是が平面となるに過ぎないのです。かくて人間の自有に屬するものと屬せざるものと區別が明かになるのであります。悪人にあつては其言説を起さしむる所の外的想念と、其行動を起さしむる所の外的意志とに屬するものは、一も以て彼等の自有と爲すべからざるものと知り得るでありませう。只その内面的なる想念と意志とに屬するもの而已が自有を爲し得るのであります。故に永遠の生命に入りたる時自有となるべきものは、神の國の榮えのために努力した花實ばかりで、其他の一切のものは、中有界に於て剥脱されるものであります。ア、惟神靈幸倍坐世。

（大正一二・五・二四 舊四・九 於龍宮館 加藤明子録）

第一章 怪道（一六一八）

カークス、ベースの兩人は、俄に四邊の光景一變した大原野の眞中を無言の儘トボトボと、何者にか押さるるやうに進んで行く。頭の禿げた饅頭形の小さい丘の麓を辿つて往くと其所には、松と櫻の樹が一株のやうになつて睦まじげに立つてゐる。冬の景色と見えて尖つた松葉が風に揺られてパラパラと兩人が頭上にふつて来る。櫻はもはや眞裸となつて冴に梢が慄うて居た。

カークス「オイ、ベース、俺達はスーラヤの死線を越えて、伊太彦司と共に龍王の岩窟に確に這入つた積りで居るのに、何時の間にか、かふ云ふ所へ來てゐるのは不思議ぢやないか。さうして俺の立つた時はまだ夏の終りぢやつたがいつの間にかう冬が來たのだらう。合點の行かぬ事だなア」
ベース「ウン、さうだなア、何とも合點の行かぬ事だ。大方夢を見て居たのだらう。矢張スダルマ山の山腹で樵夫をやつて居た時に、グツスリと眠つて仕舞ひ、其間に冬が來たのかも知れないよ」

カークス「それだと云つて伊太彦と云ふ綺麗な神司とテルの里へいつて、ループ
やさまの館に宿り込み結構な御馳走に預かり、それから船に乗り、スーラヤ山の
死線を越えた事は確に記憶に残つて居る。大方今が夢かも知れないよ。夢と云ふ
奴は僅か五分か六分かの間に生れて死ぬ迄の事を見るものだ、夢は想念の延長だ
から、かうして居るのが夢かも知れない。何と云つても夢の浮世と云ふからなア」
ベース「何と言つても此處は見馴ない所だ。いつの間にスーラヤ山から此處へ來
たのだらう。さうして四邊の景色は冬の景ぢや。パインの老木の間から針のやう
な枯松葉が降つて來る。櫻は眞つ裸になつて慄つて居る。兔も角も行く所迄行か
うよ。又好い事があるかも知れないよ。」

ベース「思ひきやスーラヤ山の岩窟に

進みし吾の斯あらむとは。

夢ならば一時も早く覺めよかし

心の空の雲を晴らして」

カークスカークス 大空おほぞらは皆黒雲みなくろくもに包つつまれて

行手ゆくても知らぬ吾われぞ悲かなしき。

ウラル彦神ひこかみの命みことの戒いましめに

遇あひて迷まよふか吾われら二人ふたりは

ベースベース ウラル彦神ひこかみの教をしへも三五あななひの

道みちも御神みかみの作つくらしし教のり。

吾われは今途方いまとはうに暮くれて冬ふゆの野のの

いとも淋さびしき旅たびに立たつかな。

伊太彦いたひこやブラワブラワダ姫ひめは今いまいづく

アスマガルダアスマガルダの影かげさへ見みえず

カークスむらきも 村肝こころの心やみの暗つづに包まれて

今いま八衢やちまたに迷まよふなるらむ。

天地あめつちの皇大神すめおほかみよ憐あはれみて

吾等われら二人ふたりの行方ゆくてを照てらしませ。

月つきも日ひも星ほしかげもなき冬ふゆの野のを

彷徨さまよふ吾等われらが心こころ淋さびしさ。

如何いかにせば常世とこよの春はるの花はな匂におふ

吾故郷わがふるさとに歸かへりゆくらむ

ベースひ 日つきも月にしも西かたむに傾よく世なかの中に

吾われは淋さびしき荒野あらのに迷まよふ。

西にし「きた」か東ひがしへ來きたか知しらねども

【みなみ】の罪つみと締あきらめゆかむ。

西にし東ひがし南みなみも北きたもわきまへぬ

今いま幼を兒さなごとなりにけるかな㊦

カークス㊦エ、仕しかた方がない。犬いぬも歩あるけば棒ぼうに當あたるとやら云いふ事ことがある。さアこれ
から膝ひざ栗くり毛げの續つづくだけ此この道みちを進すすんで見みよう㊦
茲ここに二ふた人は風こがらし吹ふき荒すさぶ野の路ぢの淋さびしみを消けさむが爲ために出で放はう題だいの歌うたを謠うたつて足あしに任まか
せトボトボと進すすみ行ゆく事こととなつた。

カークス㊦あゝ訝いぶかしや訝いぶかしや 茲ここは冥めい途いどか八やち衢またか

但ただしは浮うき世よの眞ま中なかか 四あ邊たりの景け色しきを眺ながむれば

山やま野の草くさ木きは枯かれ果はてて 露つゆもやどらぬ淋さびしさよ

パインの木こ蔭かげに立たち寄よつて 息いき休やすめむと打うち仰あふぎ

見みれば枯かれ葉ははバタバタと 針はりの如ごとくに下くだり來きて

薄うすき衣ころもを刺さし通とほし 櫻さくらの梢しんはブルブルと

冷き風つめたかぜに慄ふるひ居ゐる 合がてん點てんの行いかぬ此この旅たび路ぢ

夢ゆめか現うつつか幻まぼろしか 三あななひけう五ご教けうの伊いた太た彦ひこと

スダルマ山さんの間かんだう道だうを 漸やつやく渡わたりてテルの里さと

ルーブヤ館やかたに立たちよりて 天てん女にょのやうなブラワ、ーダ

姫ひめの命みことにもてなされ それより船ふねに身みを任まかせ

一行いつかうごにん五人スーラヤの 山やまに鎮しづまるウバナダ

ナーガラシャ一の寶はうぎよく玉ぎよくを 神かみの御おん爲ため世よの爲ために

受うけ取とり珍うづの聖せい場ぢやうへ 獻たてまつらむと思おもひしは

夢ゆめでありしかこれは又また 合がてん點てんの行いかぬ事こと計けいり

夢ゆめの中なかなる貴あてびと人は 今いまはいづくに在あるか

尋たづぬるよしも泣なく計けいり 霜しもの劍つるぎや露つゆの玉たま

吾わが身みにひしひし迫せまり來くる これぞ全まく今いま迄までの

犯をせし罪つみの報むくいにか 唯ただしは前ぜん世せの因いん縁ねんか

實げに怖おそろしき今日けふの空そら 進すすみかねたる膝ひざ栗くり毛げ

あて所もなしに彷徨ひて 地獄の里に進むのか

但しは常世の花匂ふ 天国浄土に上るのか

神ならぬ身の吾々は 如何に詮術泣く涙

暗路に迷ふ苦しさを 早く吾身を照らせかし

神の光の一時も 早く吾身を照らせかし

ベース 旭は照らず月は出ず 星の影さへ見えぬ空

亡者の如く吾々は 見なれぬ道を辿りつつ

あてどもなしに進み行く 吾行く先は天国か

但しは聖地のエルサレム 黄金山か八衢か

深き濃霧に包まれて 大海原を行く船の

あてども知らぬ心地なり 早く吾身を照らせかし

天地に神のましまさば 二人の今の身の上を

あはれ 憐みたまひて 現界か
ただ 但しは 地獄か 八衢か
ひと 人は 神の子 神の宮
かくも 迷ひし 吾靈は
つきひ 月日の 光も 左程には
われら 吾等も 今は 漸くに
つき 月の 光の 尊さを
あゝ 惟神々々 吾等を作りし 皇神よ
いちじ 一時も 早く 吾胸の 醜の 横雲 打ち 拂ひ
うまら 完全に 委曲に 行方を ば 照らさせた まへ 惟神
かみ 神の 御前に 願ぎまつる 』

か 斯く 謠ひ つつ 漸く にして 濁流 漲る 河邊 に 着いた。

カークス 『オイ、此處には 雨も 降らぬ のに 大變な 濁流が 流れて 居る ぢやないか。

斯んな大きな川を渡らうものなら、夫こそ命の安賣だ。もう仕方がない。二十世紀ぢやないが、何も彼も行きつまりだ、後へ引きかへさうか」

ベース「引きかへさうと思つても、何者か後から押して来るのだから仕方が無いぢやないか。「慢心致すと神の試に遇ふて行も歸りもならないやうになる」と三五教の教典に示されて居るが矢張り吾々は、ソーシャリズムとか自由平等主義だとか云つて神様を輕んじて來た結果こんな羽目に陥つたのだ。どうしても是は現界とは思はれないな。龍神の岩窟で命を取られ此處へ來たのだ。もう斯うなれば覺悟をするより仕方が無いぞ」

カークス「さうだ。どう考へて見ても現界のやうぢやない。お前の云ふ通り、これから駒の頭を立て直し、弱くてはいけなから、假令地獄へ行かうとも大いに馬力を出してメートルをあげ、地獄の鬼を脅迫し、舌を捲かせ、共和國でも建設しようぢやないか。兔に角今日の世の中は弱くては立てぬのだからなア」

ベース「さうだと云つて、吾々兩人の小勢では地獄を征服する譯にも行くまい。閻魔大王とか云ふやつが居て帖面を繰つて吾々の罪状を一々讀み上げ焦熱地獄へ

でも落さうと云つたらどうする。どうせ天國へ行かれる様な行ひはして来て居ないからなア

カークス「何心配するな地獄と云ふ所は強い者勝の世の中だ。小さい悪人は厳しい刑罰を受けるなり、大なる悪人は地獄の王者となつて大勢の亡者を臆で使ひ、愉快な生活を送らうと儘だよ。閻魔などはあるものぢやない。靈界も現界も同じ事だ。現界の状態を考へて見よ。下にあつて亂すれば刑せられ、上にあつて亂すれば衆人より尊敬せらるる矛盾暗黒の世の中だ。吾々は弱くてはならない。是から禪を確りと締め、捻鉢巻をして細い腕に撚をかけ、此濁流を向ふに渡り、地獄征服と出かけようぢやないか。人間の精靈と云ふものは所主の愛によつて天國なり、又地獄へ籍を置いて居るのださうだから、何地獄だつて構ふものか、自分の本籍に歸るやうなものだ。片端から暴威を揮つて四邊の小團體を征服し、大同團結を作り、カークス、ベース王國を建てようぢやないか。何、地獄位に屁古垂れてたまらうかい。何程地獄が辛いと云つても現界位のものだ。現界は所謂地獄の映象だと云ふ事だから、吾々は経験がつんで居る。現界では大黒主と云ふ大將が

居るから吾々の思ふやうには往かないが、地獄では勝手だ。この腕が一本あれば
どんな事でも出来るよ」

ベース「さうだなア。どうやら地獄の八丁目らしい。取つたか見たかだ。此濁流
を横ぎり、其勢で地獄に侵入し、一つ脅喝的手段を弄して粟散鬼王を平げ、天晴
地獄界の勇者となるも妙だ。ヤア勇ましくなつて来た。毒を喰へば皿迄だ。どう
せ吾々は天國代物ぢやないからなア。アハ、ハ、ハ、」

斯兩人は河端に佇み泡沫の如き望みを抱いて雄健びして居る。傍の生へ茂つた
茅の中の藁小屋から黒い瘦こけた怪しい婆が破れた莫蔭を肩にかけ、ガサリガサ
リと萱草を揺りながら二人の前に出て左の手に榎の杖を携へた儘、
婆「誰だ誰だ、あた矢釜しい。そんな大きな聲で喋り散らすと、俺の耳が蝸にな
るわい。貴様はどここの兵六玉だ。一寸こちらへ来い」

カークス「ハ、ハ、ハ、何とまあ汚い婆もあつたものぢやないかい。物を言ふも
汚らはしいわい。何と云つても天下の豪傑兵六玉のカークス王様だからなア」
婆「ヘン、人の見ぬ所でそつと猫婆を極め込み、欲な事計り致し、何も彼も人の

前まへにカークス爺おやぢだらう。も一匹いっぴきの奴やつは何なんと云いふ兵六玉ひやうろくだまだい」

ベール「此方このほうは失敬しつげいながら月つきの國くににて名なも高たかきベース様さまだよ」

婆ばば「成程なるほどどいつも此奴こいつも人氣にんきの悪いわる面つらつきだなア。ベースをカークスやうな其哀そのあはれつぽいスタイルは何なんだ。此處ここは三途せうづの川かはの渡船場わたしばだ。サアこれから貴様きさまの衣類いるい萬端ばんたん剥取はぎとつてやらう。覺悟かくごを致いたしたがよいぞい。今いまの先さき、伊太彦いたひこ、ブラワ―ダの若夫婦わかふうふが嬉うれしさうに手てを引ひいて此所ここを通とほりよつた。さうして馬鹿面ばかうらをした、何なんでも兄貴あにきと見みえるが、アスマガルダと云いふ奴やつが妹いもうとや妹いもうとの婿むこの僕しもべとなつて通とほりよつたぞや」

カークス「何なに、伊太彦いたひこさまが此所ここを通とほられたと云いふのか。何なんぞ立派りっぱな玉たまでも持もつて居をられただらうなア」

婆ばば「玉たまは澤山たくさん持もつて居をつたよ。粟粒あはつぶのやうな小ちつぽけな肝玉きもたまやら縮ちぢこまつた鞆丸きんたまやらどん栗くりのやうな目めの玉たまやらをぶらさげて、悄氣しよげかへつて此處ここを通とほりよつた。

眞裸まっぱだかにしてやらうと思おもつたが貴様等きさまらとは餘程よほど御靈みたまがよいので、此婆このばばも手てをかける事ことが出来できず、此萱このかやの中なかに隠かくれてそつと見みて居をつたら、綺麗きれいなナイスに手てを引ひかれ、

あの川の真中を通りよつた。大方天國へ往くのだらう。併し乍ら貴様達は此婆の手を経て、三途の川を渡らずに一途の河を渡り、直様地獄へ突き落される代物だ。ても切ても憐れなものぢやわいのう、オンオンオン」

ベース「ヤア此奴ア、グツグツしては居られない。此婆を突つ倒かして置いて此河を渡り、一つ地獄征服と出かけようか、カークス來れ」
と早くも尻引き捲り、濁流目蒐けて渡らうとする。婆は細い瘦せこけた手を出して、ベースの胸座を取り、三つ四つ揺する。

ベース「これや婆、どうするのだい。失敬な、人の胸座を取りやがつて」

婆「取らいでかい取らいでかい、貴様の肝玉を引き抜いてやるのだ。こら其處な兵六玉、貴様も同様だから待つて居れ。この婆が此所で荒料理をして骨も肉も付け焼にして食つてやるのだ。大分腹が減つた所へよい餌が來たものだ」

カークスは後より婆の足をグツと掴み力限り突けども押せども、地から生えた岩のやうにビクとも動かない。

カークス「ヤア何と腰の強い、強太い婆だな」

婆「定つた事だよ。俺は地の底から生えたお岩と云ふ幽霊婆だ。兵六玉の十匹や二十匹集かつて来た所でビクとも動くものかい」

ベース「こら婆アさま、放さぬかい。俺の息が切れるぢやないか」

婆「定まつた事だい。息の切れるやうに搦んで居るのだ。息を切らして軍鶏を叩くやうに叩きつぶし、砂にまぶし、肉團子をこしらへて食つて仕舞ふのだ。こう

なつたら貴様達ももう娑婆の年貢の納め時だ。潔う覺悟をして居るがよい」

二人は進退谷まり、如何はせむかと案じ煩ふ折柄、遙か後の方から、宣傳歌が聞えて来た。ハツと思ふ途端、今迄婆と見えたのは河の傍の巨巖であつた。川と見えたのは果しも知られぬ薄原で、其薄の穂が風に揺られて水と見えて居つたのであつた。

(大正一二・五・二四 舊四・九 於教主殿 加藤明子録)

カークス、ベース兩人は不審の胸を抱き乍ら、路傍に直立せる立岩の側に佇んで、宣傳歌の聲の近寄るのを耳をすませて聞いて居る。

伊太彦 三五教の宣傳使 吾は伊太彦司なり

玉國別に從ひて スダルマ山の麓迄

進み來れる折もあれ 木蔭に休む兩人に

不圖出會してスーラヤの 山に夜光の玉ありと

聞くより心勇み立ち 吾師の君に許されて

カークス、ベース兩人を 從へ間道潛り抜け

スーラヤ湖邊のテルの里 ルーバヤ館に立寄りて

神の仕組のブラワゝーダ 姫の命と赤繩をば

結び終りて兄とます アスマガルダの舟に乗り

波に漂ひ漸くに スーラヤ山に漕ぎつけて

一夜を明かす折もあれ 得體の知れぬ怪物が

忽ちここに現はれて いろはにほへとちりぬるを

わかよたれそつねならむ うみのおくやまけふこえて

あさきゆめみしゑひもせす 京味の深い問答を

負けず劣らず開始して 火花を散らせば怪物は

煙となりて消え失せぬ 夜も漸くに明け放れ

一行五人はスーラヤの 危き死線を突破して

足を痛めつ頂上に 登り終せてウバナンダ

ナーガラシヤ一の潛みたる 醜の岩窟に立向ひ

山の尾の上に茂り生ふ 藤蔓切りて繩梯子

やつと拵へ吊り下ろし 五人一度にスルスルと

下りて見れば思ひきや 果てしも知らぬ廣い穴

際限もなく展開し 山河草木立竝ぶ

廣き原野となりけり あゝ惟神々々

神の仕組の玉絲に 索かれて來る吾々は

何處いづこをあてと白雲しらくもの 行ゆける所迄進とこまですすまむと

ここ迄まできた来り息休いきやすめ 後あと振り返かへり眺ながむれば

如何いかにになしけむカークスや ベースふたりの二人は落伍らくこして

姿すがたも見えずなりにけり あゝ惟かむながらかむながら神々々

御靈みたま幸さちはひましまして 一時いちじも早はやく兩人りやうにんが

吾等われらの後あとを追おつかけて 互たがひに無事ぶじを祝しゆくし合あふ

喜びよろこび與あたへ玉たまへかし 醜しこの岩窟いはやの入口いりぐちは

いとも狭せまけく覺おぼゆれど 此この岩窟がんくつの廣ひろ々と

展開てんかいしたる不思議ふしぎさよ 空そらは岩窟いはやに包つつまれて

月日つきひの影かげは見みえねども 何なんとはなしに心地こちよし

あゝ惟かむながらかむながら神々々 神かみのまにまに進すすみ行ゆく」

と云いひつつ 兩人りやうにんの傍そばに近寄ちかよつて來きた。カークスは三人さんにんの姿すがたを見みるより飛とび立たつや
ううに喜こんで、

カークス「あゝ先生でムりましたか。ブラウ「ーダさまに、アスマガルダさま、
どれだけ尋ねて居った事か知れませぬよ。どうして居られましたか」

伊太「いや有難う。實の所はお前等二人の姿が見えぬので又足を痛めて遅れて居
るのではあるまいかと、幾度も幾度も路傍に佇み見合せ見合せやつて来たものだ
から、斯う遅れて了ったのだ。随分待たしただらうな」

カークス「随分待ちましたよ。然しここは妙な所ですな。只今濁流漲る大川が横
はり、汚い婆が現はれて色々雑多と嚇し文句を竝べやがるものだから、ベースと
二人一生懸命に掛合つてみました但其婆は岩と化けて了ひ、川は薄原となりました。
一體ここは冥途ぢやありませんまいかな」

伊太「死んだ覚えもないのに、どうして冥途へ来るものか。ここはスーラヤ山の
岩窟から此通り展開してある大きな廣場だ。あまり広い穴だから此通り目の届か
ぬ程草原が展開してゐるのだ。何と不思議な事ぢやないか」

カークス「いや、それ聞いて安心しました。私は又ベースと兩人冥途の旅ぢやな
いかと、どれだけ氣を揉んだか知れませぬよ。なア、ベース、随分いやらしかつ

たな

ベース「婆の出た時は本當に肝潰しましたよ。そして婆が貴方等三人が此川を渡つて向ふへ行つたと嘘ばかり吐きやがるものだから、早く追付かうと思つて、どれ丈け氣をもんだか知れませぬわ」

伊太「ア、さうだつたか、ここは岩窟内の事だから四邊の光景も違ふて居るなり、何れ妖怪も出るだらうよ。さア之から奥に行かう。屹度ウバナンダ龍王が玉を翳して待つて居るだらう」

カークス「そんならお伴を致しませう。おいベース、どうやら此方のものらしいぞ。まア喜んだり喜んだり。一つ宣傳歌でも謡つて潔う行きませう。

カークス「不思議な事があるものだ スーラヤ山の岩窟に

藤で造つた繩梯子 垂らしてスルスルスルと下り

見れば四邊は思つたより 廣き山川草木が

縦横無盡に展開し 岩窟の中とは思へない

心の迷ひか知らねども
三途の川の渡し場で

お岩幽霊の醜婆が
萱の中から現はれて

凄^{すこ}い文句^{もんく}を竝^{なら}べ立て
二人^{ふたり}の肝玉^{きもだま}とり挫^{ひし}ぎ

忽^{たちま}ち岩^{いは}と化^ばけよつた
いざ之^{これ}よりは伊太彦^{いたひこ}の

司^{つかさ}と共にある限り^{かぎ}
如何^{いか}なる曲^{まが}の來^{きた}るとも

如何^{いか}で恐^{おそ}れむ惟^{かむ}神^{ながら}
神^{かみ}の光^{ひかり}に照^てらされて

曲^{まが}津^つの潜^{ひそ}む岩窟^{いはやど}も
何^{なん}の苦^くもなく進^{すす}み行^ゆく

吾^{わが}身^みの上^{うへ}ぞ樂^{たの}しけれ
朝^{あさ}日は照^てらず月^{つき}はなく

風^{かぜ}さへ碌^{ろく}に吹^ふかねども
皇^{すめ}大神^{おほかみ}の御^{おん}爲^{ため}に

進^{すす}む吾^{わが}身^みは有^{あり}難^{がた}や
八^{はち}大^{だい}龍^{りゅう}王^{わう}の其^{その}一^{ひと}つ

歡^{くわん}喜^き龍^{りゅう}王^{わう}と聞^きえたる
ナーガラシャ一の寶^{たから}をば

伊^{いた}太^た彦^{ひこ}さまが手^てに入^いれて
珍^{うづ}の都^{みやこ}のエルサレム

黄^{わう}金^{こん}山^{ざん}に獻^{たま}り
五^み六^{ろく}七^{しち}神^{しん}政^{せい}の完^{くわん}成^{せい}を

計^{はか}らせ玉^{たま}ふ神^{しん}業^{げふ}の
その一^{いつ}端^{たん}に仕^{つか}ふるは

神代も聞かぬ功績ぞ
あゝ勇ましや勇ましや

如何なる枉のさやるとも
神に任せし吾身魂

何か恐れむ敷島の
神國魂を振り起し

地獄の底迄進み行く
あゝ面白や勇ましや

神は吾等と共にあり
神に守られ進む身は

如何なる嶮しき山坂も
濁流漲る大川も

いと安々と進むべし
來れよ來れいざ來れ

勝利の都は近づきぬ
朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも
假令大地は沈むとも

吾身の命は亡ぶとも
此神業を果さねば

決して後には引きはせぬ
守らせ玉へ大御神

御靈の恩頼を願ぎ奉る

斯く謠ひつつ進んで行くと禿山の麓に草葺の屋根が一軒建つてゐる。そして屋

根は所々洩り幾條も幾條も谷が出来て青い草が生え、下地の竹が骨を出して居る。
「八テ不思議な家があるものだ」と一同は佇んで首を傾けて考へて居る。

そこへ一人の婆が破れ戸を、ガタつかせ乍らニユツと現はれ來り、アトラスのやうな斑な顔をして、

婆「これこれ旅のお方、一寸寄つて下さい。澁茶でも進ぜ度いから……随分お前

さまも草臥ただらう。お前の草鞋には泥埃の寄生蟲が湧いてるやうだ。さぞ足が

重たい事だらう」

伊太「ハイ、有難う。然し乍ら御親切を無にするは誠に濟みませぬが、少し急

旅ですから又歸りがけにお世話に預りませう」

婆「これこれ、お前は心得が悪いぞや。此婆が親切に茶を與へようと云ふのに、

何辭退をなさるのか。急ぐ旅ぢやと云つても一日歩く譯にも行くまい。此處で休

んで行かつしやい。結構な結構な三五教の話聞き上げてませうぞや」

伊太「貴女は三五教のお方ですか。實は私も三五教の宣傳使でムいます」

婆「お前も何と目の悪い事だな。俺の相貌を見ても神司であるか、神司でないか

分らなならぬ筈だ。實の所は三五教の高姫と云ふ變性男子の系統、日出神の生宮だが、言依別や東助の没分曉漢に愛憎をつかし、又舊のウラナイ教を開いて此處でお道を説いて居るのだ。まアまア聞いて行かつしやい。決して悪いことは云はぬぞや」

伊太「あゝ貴女が噂に高き高姫さまでムいましたか。いや初めてお目にかかります。さうして又三五教を捨てウラナイ教へお這入りになるとは、どう云ふお考へですか、如何に言依別や東助さまと御意見が合はぬと云つても神様に二つはありますまい。貴女は人間を信用なさるから、そんな間違が出来るのでせう」

高姫「まアまア道端に立つて話しても仕方がない。一厘の仕組を教へて上げますから、とつととお這入りなさい。まア綺麗なお姫様なこと、三五教は夫婦ありては御用が出来ないと神様が仰有るのだが、今は言依別のド灰殻や東助が幹部を占めて居るものだから、何もかも規律が亂れて……アタ阿呆らしい。宣傳使が女房を連れて……何の事ぢやいな。それだから三五教は駄目だと云ふのだよ」

伊太「まア兔も角一服さして貰はう。なアブラワ、一ダさま、アスマガルダさ

ま
」

ブラワ、ーダ「はい、そんならお世話になりませうかな」

高姫「サアサアお世話になりなさい。何と云ふても日出神の生宮だから、三千世

界の事は此生宮に聞かねば分りはせぬぞや」

カークス「もし先生、こんな私の強い婆アさまの所へ休むのは胸が悪いぢやあり

ませぬか。なア、ベース、一つ先生に歎願してここへ這入るのは止めて貰はうぢ

やないか」

ベース「ウン、あまり偉さうに云ふぢやないか。澁茶を飲ますと云つて馬の小便

でも飲ますか知れないぞ。こりやうつかり這入れまい」

高姫「こりや瓢六玉、何と云ふ事を云ふのだい。嫌なら這入らんでも宜いわい。

何だ、泥坊の様な面して、側から何を横槍を入れるのだ。さアさア三人のお方、

貴方はどうも利口さうなお方だ。屹度身魂が宜いのでせう。サア遠慮は要らぬ、

早うお這入り下さい」

伊太「さアさア、カークス、ベースの兩人さま、お前もそんな理窟云はずに這入

つたらどうだ」

高姫「これ伊太彦さま、あんな瓢六玉は日出神の館に入る資格はありませぬわい。又這入つて貰ふと家が穢れるから、山門の仁王の様に門番をさして置けば、それで結構だ」

ブラワ「ーダ」もし伊太彦さま、妾は斯うして五人生死を共にして御用に來たのでムいますから、カークス、ベースさまが這入れぬ宅へはお世話になる事はやめませうか」

伊太「ウン、それもさうだ」

高姫「扱も扱も分らぬ姫様だな。お前は身魂の善惡正邪を知らないから、そんな小理窟を云ふのだよ。此高姫の眼で一才睨んだら金輪奈落、違ひはせぬぞや。才ツホ、何分立派な男の中に混つて宣傳に歩くと云ふやうな新しい女の事だから、どうで此婆の言ふ事は氣に合ひますまい。然し、そこは一つ胸に手を當てて考へたが宜しからうぞや」

ブラワ「ーダ」お言葉でムいますが、妾はカークス、ベースさまに同情して一緒

に立番を致しませう。伊太彦様、お兄様、どうぞ中に入つて高姫さまのお話を聞いて下さい」

伊太「いやお前が外へ居るのに私が中に入る事は出来ない。そんなら私も断らうかな」

アスマガルダ「そんなら私も断らう。高姫さまとやら、大きに有難う、又御縁があつたらお目にかかりませう」

高姫「オホ、流石の伊太彦宣傳使も女に掛けたら弱いものだな。涎をくつたり皆を下げたり……そんな事でお道が、どうして開けますか」

伊太「高姫さま、そんなら貴女もドツと讓歩して五人ともお世話になる譯には行きませぬか」

高姫「エー、仕方が無い。そんならお前さまに免じて入れて上げませう。決して座敷なぞへ上つてはなりません。庭の隅になつと蹲踞つて居なさいや」

カークス「それ程むつかしいお屋敷へは這入りませぬわい。なア、ベース、馬鹿にしてるわ」

ベース「ウン、さうだ。絶対俺も這入らぬ積りだ。それより高姫に外に出て貰つ

て、茶はどうでもいいから結構なお話を聞かして貰はうかい」

高姫「オホ、、、それはよい思案だ。さうすれば俺の宅も穢さんで都合が好い。

俺は此處で坐つてお話するから五人は外に蹲踞つて聞きなさい。それが身魂相應

だらう。どれ 平易い處から話して上げようから、よく耳をすまして聞きなさい

や」

伊太「アツハ、、、、」

アスマガルダ「ウツフ、、、、」

ブラワ「ーダ「オツホ、、、、」

カークス「エツへ、、、、」

ベース「イツヒ、、、、」

（大正一二・五・二四 舊四・九 北村隆光録）

第一三章 蚊熏〔一六二〇〕

人（精靈）の内面的情態に居る時は自有の意志その儘を思索するが故にその想念は元來の情動即ち愛そのものより來るものです。そして其時に於て想念と意志とは一致する。この一致によつて人の内面的なる精靈は自ら思惟するを覺えずただ意志するとのみ思ふものです。又言説する時も之に似たるものがあります。相違せる點は、その言説はその意志に屬する想念そのままを赤裸々に露出することを憚るの情が籠つてゐるものです。その故は人（精靈）が現界に在つた時に俗を逐ふて其生を營みたる習慣がその意志に附屬するに至るからであります。精靈が内面の情態に居る時は、その精靈（人）が如何なる人格を所有して居るかと云ふことを明かに現はすものです。この時の精靈は自我に由つてのみ行動するからであります。現界に在つた時に内面的に善に居つた精靈は茲に於て其行動の理性と證覺とにかなふこと益々深きものあるを認め得られるものです。今や肉體との關連を斷ち、雲霧の如く心靈を昏迷せしめ、且つ執着せる物質的事物を全

部脱却したからであります。之に反し精靈の内面が悪に居つたものは、今や外面的情態を脱れて了ひ、その行動は癡呆の如く狂人の如く、現世に在つた時よりも層一層の癡狂状態を暴露し、醜惡なる面貌を表はすものであります。彼精靈の内面惡なりしものは今や自由を得て表面を飾る外面情態の繫縛を離れたからです。現世にあつて外面上善美と健全の相を装ひ理性的人物に擬せむとして焦慮して居たものが、全く外面の皮相を取り除かれたので、その狂質は遺憾なく暴露するに至つたのであります。外面上善人を装ひ學者識者を以て擬して居た人間は馬糞を包んだ錦繪の重の内の様なもので、外面より見れば實に美麗なる光澤を放ち人をして羨望の念に堪へざらしむるものですが、その蔽蓋を取り除けて内面を見る時は始めて汚物の伏在せるを見て驚くやうなものです。心靈學者だとか、哲學者だとか、宗教家だとか、種々の立派な人間も外面の蔽蓋を取り去つて見れば、實に癡呆癡狂の汚物が内面に堆積され、地獄界の現状が暴露されるものであります。現世に在つた時神格を認め神眞を愛し内面の良心に従つて行動を爲せしものは、靈界に入り來る時は直に内面の情態に導き入れられて永き眠りより醒めたる如く、

また暗黒より光明に進み入りしもの如きものであります。その思索もまた高天原の光明に基き内面的證覺より發し來るが故に、凡ての行動は善より起り、内面的情動より溢れ出づるものです。かくて高天原は想念と情動との中に流れ入り歡喜と幸福とを以て其内面を充滿せしめ、未だかつて知らざる幸福を味はふものです。最早かくなりし上は高天原の天人との交通が開けて居るので、主の神を禮拜し眞心を盡して奉仕し、自主の心を發揮し、外的聖行を離れて、内面的聖行に入るものです。かくの如きは三五教の教示に由りて、内面的善眞の生涯を送りしもの將に享くる所の情態であります。併し三五教以外の教團に入信したものと雖も、神眞を愛し内面的善に住し神格を認めて奉仕したるものの精靈も亦同様であります。

之に反し現世にあつて偽善に住し神を捨て惡に住し、良心を滅し神格を否定し、或は神の名を稱ふる事を恥ぢて、種々の名目にかくれ靈的研究に没頭し、凶靈を招致して靈界を探り現世の人間を欺瞞し、又は一旦三五の教を信じ乍ら心機一轉して弊履の如く之を捨て去り、或は誹謗し、世間の人心を狂惑したるものの精

靈界に於ける内面的情態は全然之と正反對であります。
又内心に神格を認めず、或は輕視し何事も科學に立脚して神の在否を究めむとし、且つ自己の學識にほこるものは、皆惡の靈性であります。たとへ外面的想念に於いては神を否定せず、之を是認し少しは敬神的态度に出づるものと雖も、其内面的精神は決して然らざるものは依然惡であります。何故なれば神格を是認することと惡に住することとは互に相容れないからであります。又「吾々は單に神を信じ宗教を學ぶ位なれば、決して學者の地位を捨てたり、役目を棒に振つて入信はしないのだ。只吾々は神諭のある文句を信じたからだ。萬萬一その神諭が一年でも世界に現はるる事が遅れたり間違ふ様なことがあつたならば、自分が率先して教壇を打ち潰して了ふ」と揚言し、到頭意の如く神の聖團を形體的にも精神的にもたたき毀し、澤山な債務を後に塗り付け、谷底へ神柱を突き落とし頭上から煮茶を浴びせかけ、尻に帆を掛けてエルサレムを後に又々種々の企てを始めて居る守護神の如きは、實に内面の凶惡なる精靈であります。然し乍ら斯る精靈は表面に善の假面を被り、天人の如き善と眞との言説を弄するが故に、容易に現界に

於ては其内面の醜惡を暴露せないものであります。かくの如き精靈が靈界に來り内面的情態に入つて其言説する所を聞き、其行動する所を見る時は恰も前後の區別も知らず、發狂者の如く見ゆるものであります。彼等精靈の凶欲心は爰に爆裂して、一切憎惡の相を現はしたり、他を侮蔑して到らざる無く所在惡の實相を示し、惡行を敢てし殆んど人間の所作なるかと疑はしむる許りであります。

現世にあつた時には、外的事物のために制壓せられ沮滯しつつあつたけれ共、今や其羈絆を脱し彼等の意志よりする想念に任せて放縱自在に振舞ふ事を得るからです。彼等が又生前に於て所有した理性力は皆外面に住し、内面に住して居なかつたから、斯の如き惡相を現するに到るのであります。而も彼等は他人に優りて内面的に證覺あるものと自信して居たものであります。今日の學者や識者と謂はるる人の精靈は、概して外面的情態のみ開け、内面は却て惡靈の住所となつて居るものが大多數を占めて居るやうであります。

高姫「これ、お前さま等、何が可笑しうてさう笑ふのだい。千騎一騎の此場合、

笑ふ所ぢやムるまい。變性男子様の教にも「座敷を閉めきりてジツとして居らぬと、笑つて居るやうな事では物事成就致さぬ」とありますぞや。五人が五人とも揃うて笑ふとは何の事ぢやい。此日出神を馬鹿にしてるのぢやあるまいかな」

カークス「何、馬鹿にする所か、私達五人は高姫さまに馬鹿にされて馬鹿になつて、此道端でお話を聞かうと思つてるのです。なあベース、さうだらう。これも旅の慰みだからな。立派な先生があり乍ら三五教の謀反人ウライ教の高姫さまに説教を聞く者がありますか。あんまり名高い高姫さまだから、一つ話を聞いてやるのですよ」

高姫「オツホ、盲蛇に怖ぢとやら、困つたものだわい。斯う云ふ代物も神様は濟度遊ばすのだから、竝や大抵の事ぢやないわい。日出神や大神様のお心を察しましておいとしようムりますわいな。オーンオーン。日出神様、斯くの如く憐れな身魂ですから、何卒蟲族だと思つて腹を立てずに、神直日大直日に見直して助けてやつて下さい。どうして又世の中は斯うも曇つたものだらう。俺もここで足掛け二年も大彌勒さまの教を傳へて居るのに、唯一人聞く者がいない

とは、如何に暗がりの世の中とは云へ、困つたものだな」

カークス「お前さま、えらさうに善人らしく、智者らしく、神さまらしく仰有る

が、肝腎要の内面的状態は地獄的精神でせうがな。此カークスは斯う見えても精

神の内面状態は……ヘン……第一天國に感應して居るのだから、お前さまの云ふ

事が、何だか幼稚で馬鹿に見えて仕方がありませんわ。ウツフ、

高姫「オツホ、何とまあ没分曉漢なこと。現在目の前に底津岩根の身魂が現

はれて居るのも分らず、第一靈國の天人、珍の神柱高姫が言葉を幼稚だとか、馬

鹿に見えるとか云ふて居るが、ほんに困つたものだな。丹波の筍ぢやないが、煮

ても焚いても喰はれない代物だ。それでも人間の味がして居るのかな。伊太彦さ

ま、お前も大抵ぢやなからうな。假令千年萬年かかつてても、誠の道に歸順させる

事は難かしいよ。如何な此大彌勒の御用する高姫でも、此代物には一寸、手古摺

らざるを得ないからな」

カークス「ヘン、【そこつ】岩根の大彌勒さまだけあつて随分【粗忽】な事を仰

有るわい。【靈國】の天人ぢやと仰有つたが、いかにも無情【冷酷】の天人イヤ

癡狂人と見える。神の道には好き嫌ひは無い筈、それに結構な神様の生宮を捉まへて這入ると家が穢れるの、なんのつて仰有るから恐れ入るわいウツフ、、」

高姫「お前のやうなコンマ以下に相手になつて居つたら日が暮れる。さア伊太彦さま、お前は一寸利口さうな顔をして居るが、高姫の云ふ事は耳に入るだらうな」

伊太「もとより愚鈍な私、賢明な貴女の仰有る事、どうせ耳に入りますまいよ。平易簡単に仰有つて下さい。どうぞお願い致します」

高姫「あ、よしよし、お前の方から、さう出れば文句はないのだ。然し乍ら此大彌勒さまに教へてやらうと云ふやうな態度に出たら大間違が出来ますぞ。それこそアフォンとして尻がすぼまりませぬぞや。結構な結構な大神様の一厘の仕組、之が分つたら俺も私も高姫の足許に寄つて来るなれど、あまり身魂が曇つておるから何も申されぬが、兔角改心が一等ぞや。これ伊丹彦さま、傷み入つて改心するなら今ぢやぞえ。後の後悔間に合はぬ。毛筋の横巾でも間違ひはないぞや。大彌勒の神に間違ひはないぞえ。高姫が申しても高姫が申すのではない。口借るばかりぢやから慎んでお聞きなさい。分つたかな。分つたら分つたと、あつさり云

ひなさい。これ丈だけけ説教せつけうしたら分わかる筈はずだから……」

伊太いた「根ねつから分わかりませぬがな。もつと詳くわしく簡單かんたん明瞭めいれうに仰有おつしやつて下くださいな」

高姫たかひめ「何なんと頭あたまの悪わるい、これ丈だけけ細こまかう云いふてもまだ分わからぬのかな。何程なにほど簡單かんたんに言い

つても肝膽かんたん相照あひてらさない伊丹彦いたみひこさまにはイタイタしいぞや」

カークス「何なんだ、譯わけの分わからぬ能書のうがきばかりを吹聴ふいちやうして、肝腎かんじんの事ことは一つも云いはぬぢ

やないか」

高姫たかひめ「エー、黙だまつて居あなさい。お前等まへたちの下司げす身魂みたまに分わかるものか。此この高姫たかひめは底津岩そこついは

根ねの大彌勒おほみろくと分わかれば宜いいのだ」

伊太いた「そりや分わかつて居をります。その大彌勒おほみろくが又またどうして斯かやう様な處ところでお一人ひとりお鎮しづま

りになつてるのでせうかな」

高姫たかひめ「龍りうは時ときを得えて天地てんちに蟠わたかまり、時ときを得えざれば蚯蚓みみず蠖いもりと身みを潛ひそむ」と云いふ事こと

がある。何程なにほど天地てんちの大先祖おほせんぞの大先祖おほせんぞの、も一つ大先祖おほせんぞの底津岩根そこついはねの大彌勒おほみろくさまで

も時節じせつが來こねば身みを落おとして衆生しゆじやう濟度さいどをなさるのぢやぞえ。此この高姫たかひめを見て改心かいしんなさ

れ。此世このよの鑑かがみに出だしてあるのだよ。別べつにエルサレムとか齋苑館いそやかたとかコーカサス山ざん

とか甘粕大尉山とかへ行かなくても此高姫の云ふ事を腹に締め込みて置いたら世
界が見えすきますぞや」

伊太「どうもハツキリ分りませぬがな。餘程甲粕御魂と見えますわい。ア

八、八、八、八」

高姫「これ程細かく云つても未だ分らぬのかいな。さうするとお前は一寸落して
来て居るのだわい。一體誰のお弟子になつてみたのだな」

伊太「玉國別の先生に教養を受けて居りました」

高姫「何だ。あの玉かいな。彼奴は音彦と云つてフサの國の本山にも、俺の宅の
門掃をして居つた奴だ。彼奴は謀叛者でな。自轉倒島の魔窟ヶ原でも後足で砂を
かけて逃げて行つた不人情者だ。あんな者が天理人道が分つて堪るものかい。五
十子姫と云ふ阿婆摺れ女郎を貰つて玉國別だ等と云ふ名で其處邊りを歩き廻つて
居るのだから、臍茶の至りだ。オツホ、八、八、八、何とまア三五教も人物拂底だな。
之では瑞の御靈が何程シヤチになつても駄目だわい。それだから底津岩根の大彌
勒さまの肝腎の事が分らぬと申すのだ。さア伊太彦さま、ここが宜い見切り時だ。

天國てんごくに上のぼるが宜よいか、地獄ぢごくに落おちるが宜よいか、一ひとつ思案しあんをしなされや。チツと許ばか

り耳みみが伊太彦いたひこでも辛抱しんぱうして聞きいて見みなさい、利益りやくになりますよ」

伊太いた「高姫たかひめさま、もうお暇致いとまいたします。私わたしは玉國別様たまくにわけさまが大切たいせつなお師匠様ししやうさま、そのお師しし

匠様やうさまの悪口あくこうを云いはれて、どうして黙だまつて居をられませう。さア皆みなさま、歸かへりませう」

カークス「萬歳ばんざい々々、始終臭しじうくさひの婆ば々々萬歳ばんざい」

ベース「退却たいきやく々々本當ほんたうに誠まことに退屈たいくつ々々」

高姫たかひめ「これお前まへは三五教あななひけうの宣傳使せんでんしぢやないか。怒いかる勿なかれと云いふ掟おきてを知しつてをるか。

さう二ふたつ目めには腹はらを立てて歸かへるとは何なんの事ことだい。それで宣傳使せんでんしと云いはれますか。

お前まへのやうな無腸漢むちやうかんが居をるから三五教あななひけうの名なが日ひに月つきに落おちるのだ。よい加減かげんに馬ば

鹿かを盡つくして置おきなさい」

ブラワ「ーダ「思おもひきや高姫様たかひめさまに廻めぐり會あひ

醜しこの教をしへを授さつからむとは」

高姫たかひめ 〃 思おもひきや三五あななひけう教けうの神かむつ司かさ

闇やみと枉まがとつに包つまれしとは 〃

伊い太た彦ひこ 〃 思おもひきや斯か程ほどに自じ我がの強きやう烈れつな

ウウララナナイイ教けうの高たか姫ひめ婆ばさまとは 〃

アアススママガガルルダダ 〃 思おもひきや斯こんな處ところにウウララナナイイの

醜しこの婆ば々々アアが構かまへゐるとは 〃

ベベーースス 〃 思おもひきやウウララナナイイ教けうの高たか姫ひめの

減へららずず口くちでも之これ程ほど迄までとは 〃

アスマガルダ「高姫さま、お前さまは何時の間に、スーラヤの死線を越えて此岩窟に來たのだい」

高姫「オツホ、馬鹿だな。一つ手洗を使ふて來なさい。ここは岩窟の中ぢやありませんよ。フサの國テルモン山の麓、高姫高原の神館だ。夜中の夢を見て世の中をぶらついて居るのだな。妹の婿の尻を追ふて歩く代物だから、どうせ碌な奴ぢやないと思つたが、矢張りひのかみが一見したら違はんわい。何と云ふても金挺聾だから何にも分らぬ、困つた人足だな」

アスマガルダ「何、言はして置けば際限もなき雑言無禮、かう見えても俺はスーラヤの海で鍛へた腕だ。覺悟せい」

と鐵拳を揮つて殴りつけむとする。伊太彦は早くも其腕を掴んで、

伊太「待つた待つた、三五教は無抵抗主義だ。さう亂暴な事をしちやいけませぬ」
アスマガルダ「それだと云つて餘りぢやありませんか」

伊太「そこを辛抱するのが誠の道です。堪忍五萬歳と云つて堪忍は無事長久の基ですからな」

アスマガルド「そんなら伊太彦さまの命令に従ひませう。エー残念な……」

高姫は腮をしゃくり乍ら、

高姫「イツヒ、無抵抗主義の三五教、お氣の毒様」

と大きな尻をプリンプリンと振り乍ら、裏の柴山を獅子の如くに駆け上り、何處ともなく姿を隠して了つた。五人は又もや宣傳歌を謠ひ乍ら露おく野邊を悠々と進み行く。

(大正一二・五・二四 舊四・九 於龍宮館 北村隆光録)

第一四章 嬉し涙(一六二一)

黒雲濛々として天地四方を包み、夜とも晝とも見別のつかぬやうな光景となつて来た。吹き来る風は何となく腥く、且つ濕つぽく、表面は冷たく、どこやらに熱氣を含み、體から沾つた汗の滲む空氣である。伊太彦一行は足に任せて、方向

も定めず、膝栗毛の續く限り進んで行くと、相當に高い岩骨の山の麓に行き當つた。相當に高い山らしいが、五合目あたりから、灰色の雲が包んで巔を見る事が出来なかつた。一行は此山を登るより道がない。針のやうな草や、荊の間を種々と苦心して右へ避け左へ避け、板壁のやうな嶮しい所を登つて往く。四方八方から、何とも知れぬ悲しいやうな嫌らしいやうな泣聲が聞えて来る。猿の聲でもなければ秋の夕の蟲の音でもない。實に絶望の淵に沈んだ時のやうな嘆聲である。一行は天津祝詞を奏上せむとしたが、どうしても唇が強直して聲を發する事が出来なかつた。灰色の雲の中へ身を没するやうになると、スーラヤ山の死線を越えた時のやうな再び不快の氣分に襲はれた。一同は不言不語運を天に任し、伊太彦の後に從ひ登つて往くと、山の巔は、蠣殻を打ちあげたやうな小石が一面に被さつて居て恰も劍の山を登るが如くであつた。伊太彦は頂上のバラの花のやうな形した岩の上にソツと腰を下した。後れ馳せながら四人はヘトヘトになり、顔色蒼白め、唇を紫色に染め、さも絶望の淵に沈んだやうな面貌で辿りつき、氣息奄々として夏犬のやうに舌を垂らし、胸に浪をうたせながら蠣殻のやうな小石の上に

倒れて仕舞つた。

其處へ下の方からスタスタ偉ひ勢で登つて来た一人の婆がある。一同の屁古垂れた姿を見て婆は大口を開いて、

婆「オホ、。これや伊太に阿魔女に三人のガラクタ共、往生致したか。もう此處迄来た以上は往も戻りもならず、此處で露の命を捨てて八萬地獄へ落ちるの

だが、夫でもお詫を致して助けて貰ふ氣はないか。三五教の宣傳使だなどと申て、よくもよくも世界を股にかけて歩きよるな。俺を誰だと思ふて居るか。高姫の守

護を致して居る銀毛八尾のお稻荷様だぞ。これや開いた口が窄まるまい。一口でも喋るなら喋つて見い。アスマガルダの馬鹿者が、此方の肉の宮を打擲せむと致

し嚇かしやがつた爲めに、此方の生宮は、とうとう吾家を飛び出し行衛不明となつて仕舞つたのだ。恨を晴らさうと思ひ此方の計略によつて、此山に踏み迷はし

てやつたのだ。サア、心を改めてウラナイ教に歸順致すか、どうだ、きつぱりと返答致せ。いやいや返答は出来まい。耳は聾、口は開かず、言葉も出ぬものだから、

併し耳は少し聞えるだらう。此方の申すやうに致すなら首を縦にふれ。ても

扱ても【いげつない】ものだなア、ても扱ても小氣味よい事だなア、オツホ、、、

伊太彦は發言機關の止まつた悲しさに、一言も發する事を得ず、頻に首を横に振つて居る。外四人も伊太彦に做らつて機械人形のやうに首を横に振る。

婆「ても扱ても、ど澁太い奴だなア。絶對絶命の場合になつても、まだ俺の云ふ事が分らぬのか。銅屑の靈と云ふものは因果なものだなア。これや伊太彦」

と茨の笞をふり上げて、伊太彦の頭を續け打ちに十二三打ち續けた。頭部からは、花火の薄のやうに血がボトボトと線を劃して流れ出づる其痛ましさ。伊太彦は目

をつぶつたまま、假令死んでも三五教の教は捨てぬ。如何な責苦にあつても、ウライナイ教に歸順するものかと益々首を横に振る。婆は又々鞭を加へる。此體を見

たベースは驚いて、そろそろ首を縦に振り出した。妖婆はさも嬉しさうに、忌やらしい笑を泛べて、

婆「オホ、、。お前はベースだな。よしよし偉いものだ。本當に水晶玉だ。五人の中でお前一人。「改心すれば其日から樂になるぞよ」と仰有るのだから、み

せしめのため此處で一つお前に天國の樂みを與へてやらう」

と云ひ乍ら、懷から、小さい玉のやうなものを取り出しブーブーと口に當て吹くと、フワリとした綾錦の座布團が七八枚、其處に現れた。

婆「ホ、ホ、ホ、これやどうだ、銀毛八尾様のお働きはこんなものだよ、さあべー
ス、さぞ足が痛からう。此上に坐りなされ。さあチャツと坐りなされ。そして、
腹が空いただらう。此玉を吹きさへすればお前の望み通りの美味の物が出て來る
のだ」

と云ひ乍ら、ベースの體を鷲掴みにして七八枚重ねた柔かい布團の上に坐らした。
ベースは四人の者に氣兼し乍ら坐つた。婆はいろんな果物や、葡萄酒などを玉を
吹ひては拵へ、ベースに與へて居る。アスマガルダも、ブラワ、ーダも、カーク
スも伊太彦同様で依然として首を横に振つて居る。妖婆は之を見て、さも慨歎し
たやうに、

婆「でも扱ても因縁の悪い魂だなア。此やうに結構にして助けてやらうと思ふ
のに、こんな責苦に遇ふてもまだ我を立て通しよる。何奴も此奴も首を横に振り

やがつて、エ、俺が善惡の鏡を出して見せてやらう。皆がベースのやうにすればよいのだ。俺だつて何も此様なひどい事をしたくはないが、八岐大蛇様からの御命令だから仕方なしにやるのだ」

と云ひ乍ら、又もや茨の笞で三人を打ち据ゑる。流血淋漓として目も當てられぬ無残さ、四人は運を天に任して心の中に神を念じて居た。何處とも無く山嶽を崩るる許りの犬の聲、

「ウーワウ　ワウ　ワウ」

此聲を聞くより妖婆は忽ち銀毛八尾の正體を現はし、倒けつ輾びつ雲を霞と逃げて行く。伊太彦、ブラワ、ーダ、アスマガルダ、カークスの四人は此聲の耳に入るや俄に元氣回復し言靈を自由に發する事を得た。さうして今迄滴つて居た血潮は痕跡も留めず、元の如く元氣よき面貌となり轟と立ち上り、天津祝詞を奏上した。ベースはと見れば猿取荊の中に突つ込まれてウンウンと唸つて居る。

伊太「あゝ惟神靈幸倍坐世」

三人も一度に、

「惟神靈幸倍坐世」

カークス「もし伊太彦の宣傳使様、怪體の事があるものぢやありませんか。高姫の守護神奴がこんな所迄やつて來まして、吾々を試みようと思いましたが、犬の聲が聞えると忽ち正體を現はして逃げて仕舞ったぢやないませぬか。矢張神様は信仰せねばなりませんなア」

伊太彦は有難涙を流し乍ら、

伊太「ア、何とも有難くて言葉も出ませぬわい。時にベースは何處へ行つたのでせうな」

アスマガルダ「この猿取荊の中に眞裸體にせられ血塗になつて苦しんで居ます。何とかして助けてやりたいものですなア」

伊太「吾々一同が神様にお願ひして救ふて頂くより仕方がないなア。サアお願ひせう」

と茲に四人は一同に天津祝詞を奏上し、ベースの取違をお詫し、稍暫し汗みどろになつて祈願を凝らした。ベースはウンウンと唸つて居る許りである。其處へ忽

然として猛犬スマートを引き連れて現はれたのは初稚姫の精霊であつた。四人は姫の姿を見るより喜びと驚きとにうたれ暫時、言葉もなく、姫の端麗なる顔を見詰めて居る。

初稚「伊太彦さま、貴方は試験に及第致しました。サアこれからウバナダ龍王の玉を受取つて聖地にお出なさいませ。妾は貴方がスーラヤ山にお登りになつたと聞き、スマートと共に船を雇うて當山に登り貴方の身の安全を守護して居りました。最早安心なさいませ」

と云ひながら迦陵嚩伽のやうな麗しい聲を出して天津祝詞を奏上したまふた。ハツと氣がついて見れば伊太彦以下四人は龍王の岩窟に、邪氣に打たれて倒れて居たのである。

伊太「あゝ矢張り此處は龍王の岩窟でムいましたかなア。大變な所へ往つて居りました。よくまあお助け下さいました、有難うムいます」

外四人は嬉し涙を垂らしながら、両手を合せ、初稚姫を伏し拜んで居る。斯る所へ岩窟の奥の方より、鏡の如く光る大火團現れ來り、一同の前に爆發するよと

見る間に、得も云はれぬ優美高尚なる美人が、十二人の侍女を従へ現はれ來り、
初稚姫に向ひ手を仕へ、

龍女「妾は神代の昔より大八洲彦命様に改心の爲め此岩窟に閉ぢ込められ、今迄
修業を致して居りましたウバナダ龍王でムいます。此度神政成就について如何
なる惡神もお赦し下さる時節が参りましたので、誰かお助けに來て下さるだらう
と、今日迄この寶玉を大切に保護して待つて居りました。所が伊太彦の宣傳使様
が四人の伴を連れて、お出でになりましたが、斯う申すと何でムいますか、もう
些し御神力が奥さまに引かされて薄らいで居ますので、私が解脱する事も出來ま
せず、困つて居りました。すると伊太彦様外御一同は龍神の毒氣に打たれ、精靈
が脱け出され死人同様になられ困つた事だと思つて居りました所、神力無限の貴女
様がお出になりまして言靈を聞かして下さつたので、昔の罪障も解け、執着心も
取れて今迄の醜しかつた姿も消え、こんな天女となりました。併しこの玉は伊太
彦さまにお授け致しますから、エルサレムに行き此玉を獻じお手柄をなさつて下
さい。妾は十二人の侍女と共に天に登り、ハルナの都の言向け和しに影乍らお助

けを申まをますし」

と云いひながら、夜光やくわうの玉たまを伊太彦いたひこに渡わたした。伊太彦いたひこは手足てあしを慄ふるはせ乍ながら押おし戴いたき、

叮嚀ていねいに布ぬのを以もつて包つつみ懐ふところに入いれた。

初稚はつわか「龍王りうわう殿どのお目出度めでたうごみます。嘸さぞ神様かみさまも御満足ごまんぞく遊あそばす事ことでごみます」

龍王りうわう「ハイ、お蔭かげで助たすけて頂いたきました。此この御恩ごおんは決けつして忘わすれは致いたしませぬ」

龍王りうわう「久方ひさかたの天津國あまつくにより天降あもりませし

姫ひめの命みことに救すくはれにけり。

いざさらば天津御國あまつみくににまひのぼり

月つきの御神みかみに仕つかへまつらむ」

初稚はつわか姫かひめ「古ゆ、暗くらきにかくれたまひたる

汝なれが命みことを救すくひし嬉うれしさ。

久方ひさかたの月つきの御國みくにに登のぼりまさば
吾神業わがしんげふを傳つたへたまはれ

龍王りうわう 有難ありがたし此この有様ありさまを委曲まつぶさに
申上まをしあげなむ月つきの御神みかみに

伊太彦いたひこ たくシャカのナーガラシャーを言向ことむけて
心傲こころおごりし吾われぞうたてき

ブラワゝーダ 背せの君きみの嚴いづの力ちからを包つつみたる
妾わひはは醜しこの曲津神まがつかみなりし。

さりながら心改め今よりは

神の大道に専ら仕へむ

初稚姫 皇神をまづ第一と崇めつつ

伊太彦司をいつくしみませ

ブラワゝーダ 有難し姫の命の御教は

胸に刻みて忘れざらまし

アスマガルダ 伊太彦やわが妹に従ひて

思はぬ恵に逢ひにけるかな

カークスカもろもろの神かみの試ためしに遇あひながら
今はいま嬉うれしき光ひかり見るかなな

ベースま曲か神かみにたぶらかされて思おもはずも

道みちに背そむきし吾われぞ悲かなしき。

暗やみ國くにの山やまの尾を上のへに登のぼりつめ

心こころを變かへし身みの恥はづかしさよ。

御み惠めぐみの限かぎり知られぬ皇すめ神かみは

此この罪つみ人びとも赦ゆるしたまひぬな

初はつ稚わか姫ひめ「いざさらばウバナンダ龍りゅう王わう永とこ久しへの

住す家みかを捨すてて御み國くにに入いりませな

龍王「ありがたし姫の命の御言葉に

天翔りつつ神國に往かむ」

かく互に歌を取り交し龍王に別れを告げた。龍王は十二人の侍女と共に岩窟より雲を起し空中に舞ひ上り、忽ち姿は煙の如く消えて仕舞った。初稚姫は岩窟の細き穴を傳ふて磯端に出た。此處は平素波荒く巨巖屹立し船の近づく事の出来ぬ難所である。さうして外に出れば底ひも知れぬ水の深さに、船を置く場所もなく、スーラヤの湖の大難所と稱へられ、船人の恐れて近寄らなかつた所である。初稚姫、スマートの後に従ひ五人は細い穴を潜つて出て見ると其處には玉國別、治道居士の一行が船を横付けにして待つて居る。伊太彦は飛び立つばかり喜んで船に飛び乗り、玉國別に獅噛みつき嬉し泣きに泣いて居る。玉國別も唯、嬉し涙に咽んで落涙する計りであつた。あゝ惟神靈幸倍坐世。

(大正一二・五・二五 舊四・一〇 於教主殿 加藤明子録)

第四篇 四鳥の別してう わかれ

第一五章 波の上なみ うへ（一六二二）

玉國別たまくにわけ、初稚姫はつわかひめ二人ふたりの乗のり來きたれる二艘にそうの船ふねは伊太彦いたひこ以下いかにん四人よにんを分乗ぶんじやうせしめ、スー
ラヤの湖面こめんを西南せいなんに向むかつて走かけ出だし、折柄をりからの順風じゆんぷうに眞帆まほをあげてエルみなどの港みなとに進すすみ
行く。

初稚姫はつわかひめの船ふねにはブラワ、アスマガルダ、カークス、ベースが乗のせられた。
玉國別たまくにわけの船ふねには伊太彦いたひこが只一人ただひとり乗のつて居ゐる。

漂渺へうべうとして際限さいげんもなき湖面こめんを渡わたり行く退屈たいくつ紛まぎれにいろいろの成功談せいこうだんや失敗談しつぱいだんに
花はなが咲さいた。眞純彦ますみひこは伊太彦いたひこに向むかひ、

眞純ますみ「伊太彦いたひこさま、随分ずいぶんお手柄てがらでムごまいましたな。まあこれで貴方あなたも夜光やくわうの玉たまが手て
に這入はいつて御不足ごふそくもありませぬ。何なんと云いつてもタクシヤカ龍王りうわうを言向ことむけ和やはすと云い

ふ勇者だから、到底吾々はお側へも寄せませぬわい」

伊太「いやもうさう言はれては面目次第もありませぬ。實の所ウバナダ龍王は、拙者には神力が足らぬからお渡しせぬが、初稚姫様ならお渡しすると云つて散々文句言つて渡して呉れたのですよ。サツパリ今度は失敗でしたよ。アハ、ハ、ハ、」

眞純「然し伊太彦さま、貴方はブラウワ、ーダとか云ふ奥さまが出来たさうですな」

伊太彦は眞赤な顔をし乍ら、

伊太「いや、どうも痛み入ります。何程断つても先方が肯かないものですから、

又親子兄弟の懇望によつて豫約だけはして置きました。然し乍らまだ正妻と云ふ

譯には行きませぬ。兔も角先生のお許しを得なくちやなりませぬからな。ウバナ

ンダ龍王が云ふには、伊太彦司は女に心をとられて居るから神力が弱つたと云ひ

ましたよ。別に女等に心をとられては居ないのだが不思議ですな」

玉國別、三千彦は可笑しさを堪へて俯向いてクウクウと笑ふて居る。

眞純「伊太彦さま、貴方に限つて女に心をとらると云ふ筈はありませぬが、大

方龍王の奴、岡嫉妬をして、そんな事云つて擲掬つたのですよ。本當なら初稚姫

眞純「貴方は何故死線を越へて死生を共にした奥さまを初稚姫にお渡ししたので
すか。あまり水臭いぢやありませんか」

伊太「いいえ、エルの港迄お世話になつたのですよ。又船の中で貴方等に冷かさ
れると困りますからな」

眞純「いや伊太彦さまは三千彦さまの御夫婦に就いて揶揄つたので機を見るに敏
なる伊太彦さまの事だから豫防線を張つたのでせう」

伊太「アハ、ハ、ハ、それ迄内兜を見透かされては仕方がありませんわい」

三千「伊太彦さま、随分冷かされるのは苦しいと見えますな」

伊太「三千彦さま、こんな處で敵討とは、ひどいぢやありませんか。いやもう貴
方御夫婦の事は申しませぬ。何卒何事もスーラヤの水と消して下さい」

三千「決して敵討でも何でもありませんよ。人に揶揄はれる時の御感想を承はり
度いと思つたわけですわ。然し先生、伊太彦さまの縁談はお許しになるでせうね」

玉國「三千彦さまの夫婦を承諾したのだからな」

伊太「ヤア先生、有難うムいます。そのお言葉でお許しを得たも同然と認めます」

玉國「まだ私は許して居りませぬ。然し乍ら結婚問題は當人と當人の自由ですから、そんな點までは干渉させぬわい」

伊太彦はつまらな相な顔して頭を掻いて居る。治道居士はニコツともせず、目を塞ぎ腕を組み、此問答を一生懸命聞いて居る。バット、ベルも治道居士の傍に小さくなつて伊太彦の顔ばかり見つめて居る。

玉國別「神ならぬ玉國別は皇神の

結ぶ赤繩を如何で論争はむや。

伊太彦の神の司は皇神の

御言のままに従へば宜し。

皇神の任さし玉ひし神業を

遂げ終るまで心しませよ」

伊太彦いたひこ 有難ありがたし 吾師わがしの 君きみの 御心みこころは

その言ことの 葉はに 知しられけるかな。

皇神すめかみの 結むすば せ 玉たまふ 縁えんなれば

否いなむに よしなき 伊太彦いたひこの 身みよ

眞純彦ますみひこ 月つきの 國くにハルナ の 都みやこに 立向たちむかふ

旅たびにも 芽出めでた度たき 話聞はなしきくかな。

言靈ことたまの 軍いくさの 君きみも 春はるめきて

花はなの 色いろ香かに 酔よひ つつぞ 行ゆく

三千彦みちひこ 若草わかくさの 妻つま定さだめて 何なんとなく

心苦こころくるしく 思おもひ つつ 行ゆく

眞純彦ますみひこ 苦しさくるの中になかに樂たのしみあるものは

妹背いもせの旅たびに如しくものはなし。

苦くるしみと口くちには云いへど心こころには

笑あみと榮さかえの花はな匂におふらむ

デビス姫ひめ 眞純彦ますみひこ神かみの司つかさの言ことの葉はは

妾わらわの胸むねによくもかなへり

眞純彦ますみひこ デビス姫ひめその言ことの葉はは詐いつはりの

なき眞人まさびとの心こころなりけり

治道ちだう 〇 三五あななひの神かみの大道おほぢに入りしより

いつも心こころは春はるめき渡わたりぬ。

花はなと花月はなつきと月つきとの夫婦めをと連れ

花はなの都みやこへ清きよく【つき】ませ。

大空おほぞらに冴さえたる月つきの影かげ見みれば

笑えませ玉たまひぬ今いまの話はなしに〇

伊太彦いたひこ 〇 大空おほぞらの月つきの御神みかみの笑えませるは

夜光やくわうの玉たまをみそなはしてならむ。

大空おほぞらに夜光やくわうの月つきは輝かがやきて

吾懐わがところの玉たまに照てりそふ。

ウバナナダ・ナーガラシャーの珍寶うづたから

吾懐わがところに光ひからせ玉たまふ。

願ねがはくばこれの光ひかりを友ともとして
常夜とこよの暗やみを照てらしてや行ゆかむ
□

艫ともに立たつて船頭せんどうは艫ろを操あやつり乍ながら聲こゑも涼すずしく謠うたひ出だした。

□
ここは名なに負おふスーラヤ湖水こすい

水みづの深ふかさは底そこ知しれぬ。

底そこ知しれぬ神かみの恵めぐみと喜よろこびに

會あふた伊太彦神司いたひこかむづかき。

初稚はつわかの姫ひめの命みことの玉たまの舟ふね

さぞや見みたからうブラワゝーダ姫ひめを。

ウバナンダ龍王りうわうさまの寶たからをば

乗のせて漕こぎ行ゆく此御船このみふね。

風かぜも吹ふけ波なみも立たて立たて龍神りうじん躍をどれ

いつかなこたへぬ神の舟。

玉國別の神の司の居ます舟に

醜の悪魔のさやるべき。

スーラヤの山は霞に包まれて

今は光も見えずなりぬ。

夜光るスーラヤ山も伊太彦の

神の身靈に暗くなる。

これからは百里を照らした山燈臺も

消えて跡なき波の泡。

月も日も波間に浮ぶスーラヤ湖水

今日は天女が渡り行く。

天人の列に加はる神司

嗚や心が勇むだらう。

漸くにエルの港が見えかけた

かすかに目につくエルやまの山。

十五夜の月は御空ありあけに有明の

朝も早うから船を漕ぐ。

エル港越えて進むはエルサレム

一度詣り度や神の前。

朝夕に波のまにまに漂ふ俺は

何時も月日の水鏡見る

毎晩光つて居たスーラさんや山も夜光の玉が伊太彦の懐に入つてからは光を失ひ、
今船頭の謡つた如く唯一の燈臺をとられて了つた。十六日の満月は東の波間より
傘の様な大きな姿を現はして昇り初めた。

波に姿を半分出した時は丁度黄金山が浮いた様に見えて来た。

玉國別 金銀の波漂ひし湖の上に

黄金山わつしんざんの光輝ひかりかがやく。

東ひむがしの波間なみまを昇のぼる月影つきかげは

黄金こがねの玉たまか夜光やくわうの玉たまか。

如意にょい寶珠ぼしゆ黄金こがねの玉たまも及およぶまじ

波間なみまを分わけて昇のぼる月影つきかげ」

眞純ますみ彦ひこ 空そら清きよく海原うなばら清きよき中空なかぞらに

月つきはおひおひ圓まるくなり行ゆく。

月々つきつきに月見つきみる月つきは多おほけれど

今宵こよひの月つきは殊ことさら更きよし」

三千彦みちひこ 御惠みめぐみの露つゆは天地てんちに三千彦みちひこの

今いまさし昇のぼる月つきの大神おほかみ。

瑞御靈みづみたまはや早くも月つきは波間なみまをば

離はなれて御空みそらにかかりましけり
□

伊太彦いたひこ 波間なみまをば分わけて出いでたる如意寶珠にょいほつしゆ

吾懷わがところの玉たまに勝まされる。

夜光よるひかる珍うづつの寶珠ほつしゆも瑞御靈みづみたま

昇のぼり給たまへば見みる影かげもなし
□

デビス姫ひめ 眞純彦ますみひこ 三千彦司みちひこつかさの守まもります

珍うづつの寶たからも月つきに如しかめや。

月つきの國くにハルナの都みやこへ進すすみ行ゆく

旅路たびぢの空そらに清きよき月影つきかげ ㊦

治道ちだう ㊦ 大空おほぞらに昇のぼり輝かがやく月見つきみれば

吾魂わがたましひの恥はづかしくなりぬ。

日ひは西にしに早はやや傾かたむきて東ひむがしの

波間はかんを出いづる珍うづの月影つきかげ ㊦

玉國たまくに別わけ ㊦ 西にしへ行ゆく吾わが一行いつかうを見送みおくりて

昇のぼらせ玉たまふか月つきの大神おほかみ。

仰あふぎ見みる清きよき大空おほぞら隈くまもなく

照てらし玉たまひぬ一ひとつの玉たまに。

日ひは暑あつく月つきは涼すずしく澄すみ渡わたる

百の草木も露に生きなむ

伊太彦 朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

假令命は失するとも

誠の神の御教に

任しまつりし吾々は

如何なる枉の攻め來とも

必ず神の恵みあり

歡喜龍王の岩窟に

一行五人進み入り

邪氣に襲はれ吾魂は

浮世にけがれし肉體を

脱けて忽ち死出の旅

枯野ヶ原をさまよひつ

ウラナイ教の高姫が

醜の精靈に廻り合ひ

いろいろ雑多と論争ひ

揚句の果ては大喧嘩

おつ初めたる恥しさ

アスマガルダは鐵拳を

かためて高姫打たむとす

流石の高姫驚いて

裏口あけて裏山の

枯木林に身をかくし 雲を霞と消えにける

吾等五人は勇み立ち 凱歌あげし心地して

枯野ヶ原をさまよひつ 神の試練に會ひ乍ら

三五教の信仰を 生命にかへて守りたる

その報いにや神使 スマートさまが現はれて

高姫司の守護神 銀毛八尾の悪狐をば

追ひやり玉へば忽ちに 四邊の光景一變し

いと苦しみし吾身體 俄に快くなりて

勇氣日頃に百倍し 天地の神に打向ひ

感謝祈願の太祝詞 唱ふる折しも三五の

神の司の初稚姫が 此場に現れましまして

吾等が迷ふ靈身を 明きに救ひ玉ひけり

氣をとり直し四邊をば よくよく見ればこは如何に

歡喜龍王の岩窟と 判りし時の嬉しさよ

ここに龍王は初稚姫の
生言靈に歡喜して

多年の苦悶を免れしと
喜び勇み幾度か

感謝の言葉奉り
夜光の玉を伊太彦に

手づから渡し玉ひつつ
別離の歌を宣りおへて

大空高く昇りけり
あゝ惟神々々

神の恵の有難さ
初稚姫に従ひて

海に通ずる岩窟の
光を見當てに隧道を

探り出づれば有難や
吾師の君は玉の舟

波打際に横たへて
吾等を救ひ玉ふべく

待たせ玉ふぞ尊けれ
朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも
神の恵みと師の恵み

幾千代迄も忘れまじ
思へば思へば有難や

大空清く海清く
月亦清き玉の舟

清き眞帆をば掲げつつ
清けき風に送られて

清き教の司等と 清き話を取交はし
珍の都へ指して行く 吾身の上こそ嬉しけれ
あゝ惟神々々 御靈幸はひましませよ」

斯く互に歌を謠ひ或は雑談に耽り乍ら、翌日の東雲頃玉國別の舟はエルみなとの港に
着いた。早くも初稚姫は一行と共に上陸し玉ひてスマートを引連れ波止場に立つ
て一行の来るを待ち受け玉ひつつあつた。スマートは喜んで「ウワツウワツ」と
鳴き立てて居る。

（大正一二・五・二五 舊四・一〇 於龍宮館 北村隆光録）

第一六章 諒解（一六二三）

初稚姫は、早くもエルの港みなとにつきたまひ、アスマガルダ、ブラワ、ーダ、カー

クス、ベース、スマートと共に卓頭に立つて玉國別の船の進み来るを待ちつつあった。船は漸くにしてエルの港についた。玉國別は嬉しげに船より一行と共に上り来り、初稚姫の前に立つて一禮を終り、

玉國別「スーラヤの清き湖漸くに

神の恵に渡り来にけり。

初稚姫珍の命は逸早く

着きたまひたる事の尊さ」

初稚姫「湖の面を眺めて幾度か

待ちあぐみけり君の御船を」

眞純彦 金銀の波漂ひし此湖も

初稚姫の輝きにしかず。

浪の上ゆエルの港を眺むれば

輝り灼きぬ珍の御姿

三千彦 月は盈ち潮みち船に人も満ち

心みちつつ浪路渡り來ぬ。

恙なく神の恵に渡り來し

此湖に別れむとぞする。

別れ路のつらさは浪路にあるものを

伴ひたまへ初稚姫の君

初稚姫はつわかひめ 皇神すめかみの御言みことか畏かしこみ進すすむ身みは
神かみとしあれば伴ともは頼たのまじ

デビス姫ひめ 惟かむ神道なごらみち往ゆく人ひとは唯ただ一人ひとり

進すすむ掟おきてを知らしずありけり。

如何いかにせば神かみの御心みむねに叶かなふらむ

吾背わがせの君きみと共ともにある身みは

ブラワゝーダわらは 妾めかけとて神かみとしあれば草枕くさまくら

一人ひとりの旅たびも如何いかで恐おそれむ。

さりながら神かみの許ゆるせし背せの君きみに

別わかれて如何いかで進すすみ得えざらめ

初稚姫はつわかひめ 曰い大神おほかみのまけのまにまに進すすむ身みは

如何いかでか人ひとを力ちからとやせむ。

三五あななひの神かみの御規みのりは唯一ただひとり人

道みちつたへ行くぞ務つとめなりけり

治道ちだう 曰いあたふとはつわかひめの御言葉おんことば

吾魂わがたましひの闇やみを晴はらしぬ

玉國たまくに別わけ 曰い大神おほかみの御言みこと畏かしこみ進すすむ吾われに

一人ひとりはゆるせ初稚はつわかの君きみ

初稚姫はつわかひめ「汝こそは神の依さしの神司かむつかさ

やすくましませ眞純彦と共にますみひこ」

伊太彦いたひこ「これはしたり三千彦さまの眞似をして

思はず知らず暗に迷ひぬおも」

伊太彦は埠頭の石に腰打ちかけ、雙手を拱んで何事か思案に暮れて居る。其兩眼には涙さへ滴り、さも懺悔の情に堪へざるものの如くであつた。ブラウ「ダは心も心ならず伊太彦の前に躍り寄り、

「もし吾背の君様、貴方は俄に勝れさせられぬ御心持、何か心配な事が出来て参りましたか、お差支無くば私に仰有つて下さいませ。夫婦となれば何處迄も苦樂を共にするのが天地の道でムいます」

伊太彦は首を左右に振り、聲までかすめて、

「ブラワゝーダ、どうか今迄の縁ぢやと締めて、此伊太彦を許して呉れ。一生の御願ひだ」

ブラワゝーダ「何がお氣に障つたか知りませぬが、つい初稚姫様の御言葉に従つて貴郎の御船を離れお先に参つたのが御意に障つたのでムいませう。誠に濟まない事を致しました。此後はきつと貴方の身邊を御保護を致しますからお許し下さいませ」

と涙ぐむ。

伊太「いやいや決してそんな事を彼是思ふのではない。お前は初稚姫様のお伴をして大變結構であつた。天晴ハルナの都に参つて神命を果し其上神様のお許しを得てお前と夫婦になれるものならなりません。此伊太彦はお前と別れたならば一生獨身生活をして神界に仕へる積りだ。お前は是から私に離れて家に歸り、兩親に孝行を盡し、適當の夫を選んで安樂に暮してくれ。併し一たん別れても縁さへあれば又添ふ事も出来るだらう。初稚姫様のお言葉と云ひ、ウバナナダ龍王の言葉と云ひ、もはや此伊太彦は立つても居てもおられなくなつて仕舞つたのだ」

ブラワ、一ダ、若し玉國別様、初稚姫様如何致しませうか。何卒吾々夫婦に對してお指揮を下さいませ」

玉國別は、ア、と云つたきり涙を拭ひ乍ら默然として俯き深き吐息をついて居る。

初稚姫、別れてはまた遇ふ海の末廣く

男浪女浪に浮ぶ月影

玉國別、初稚姫様の今のお歌によれば、伊太彦、可愛さうだがお前は此所からブラワ、一ダ姫と袂を分ち天晴神業成就の上、改めて夫婦の契を結んだがよからう。

ブラワ、一ダ、如何にもお情の籠もつたお言葉、左様ならば大切なる夫の御神業を妨げてはなりませんから、此處で潔う別れませう。併し乍ら此まま家に歸る譯には参りませぬから、妾もどうぞハルナの都の御用に立てて下さいませ。伊太彦

様左様ならばこれでお別れ致します。どうぞ御無事で天晴御神業を果し、皇大神の御前に復命遊ばすやうお祈り致します」

玉國別は莞爾として左も愉快氣に、

玉國別「ブラワ」ダ姫さま。貴女のお覺悟は實に天晴なものでムいます。しかしらば此上は貴女は唯お一人でエルサレムに參拜し、夫れよりエデンの河を渡り、フサの國に出でハルナの都にお進みなさい。きつと神様がお助け下さいますから。あゝ私も互に助け助けられて此處迄出て參りました弟子達に別れるのは残念ですが、どうも神様の掟を破る譯にも參りませぬ。併し、素盞鳴の大神様から、眞純彦、三千彦、伊太彦の三人を伴ひ行く事を許されましたが、今となつて考へて見れば大神様はさぞ「玉國別は腑甲斐ない奴だ」とお心の中でお蔑みなさつたらうと今更懺愧に堪へませぬ。併し乍ら初稚姫様のお許しで眞純彦一人を連れて參る事に致します。伊太彦は獨り是からエルサレムに玉を納め、フサの國を横斷してハルナの都に進んだがよからう。三千彦お前も一人でお出なさい」

伊太彦、三千彦、ブラワ「ダ、一度に頭を下げ涙を滴らしながら承諾の意を

示して居る。

玉國「ア、それで玉國別も安心致しました。初稚姫様の神懸りしてのお言葉によりまして、吾々も迷ひの夢が醒めました。有難うございます」と合掌涕泣してゐる。

デビス姫「いざさらば神の教の三千彦よ

別れて遇はむハルナの都で。

初稚姫玉國別の神司

やすくましませ妾はこれにて暇をつげむ」

と云ふより早く一同に目禮し、早くもエルの町の中に姿を隠して仕舞つた。これより初稚姫命により、アスマガルダは吾家に歸り、ブラワ、ーダ、デビス姫は思ひ思ひに人跡なき山を越へ谷を渡り、エルサレムに進む事となつた。伊太彦、三千彦も亦玉を捧持し一人旅となつてエルサレムに進み往く。初稚姫はスマートと

共に何處ともなく姿を隠したまうた。治道居士は自分の幕下なりし、バット、ベル竝にウラル教より歸順したる、カークス、ベースの四人を従へ各自比丘の姿となつて、エルの港にて法螺貝を購ひ、金剛杖をつき大道を進んでエルサレムに詣づる事となつた。今後に於ける各宣傳使の行動は果して如何に開展するであらうか。

(大正一二・五・二五 舊四・一〇 於天聲社樓上 加藤明子録)

第十七章 峠の涙(一六二四)

ハルセイ山の峠の頂上に古き木株に腰打掛け、疲れを休むる一人の男、過ぎ來し方の空を眺めて獨語、

男「春過ぎ夏も去り、漸く初秋の風は吹いて來た。名に負ふ夏の印度の國も、此高山の峠に登つて見れば、ヤハリ秋の氣分が漂ふて居る。玉國別の師の君に従ひ

困荒ぶ冬の頃、齋苑の館を立出でて難行苦行の結果、漸くここ迄來るは來たもの
の、吾身に積る罪惡の重荷に苦しみ、もはや一步も歩けなくなつて來た。あゝ如
かにせば吾罪を赦され、神の任さしの使命をば果すことが出來ようか。スダルマ
山の山麓にて吾師の君に別れ、スーラヤ山の岩窟にナーガラシャの寶玉を得む
と勃々たる野心に驅られ、カークス、ベースの兩人を道案内にして、漸くにして
スダルマの湖水の一角に辿りつき、ルーブヤが家に一夜の雨宿り、ゆくりなくも
ブラワゝーダ姫に見められ、ハルナの都に上る途中とは知り乍らも、同僚の三
千彦が嬪に做らひ、師の君の許しをも得ずして神勅を楯に自由の結婚談を定め、
それより夫婦氣取りになつて兄に送られ、スーラヤ山に登り五大力とか何とか稱
する神に途中に出會し、いろいろの教訓を受け乍ら、妖怪變化とのみ思ひつめ、
死線を越へて、岩窟に忍び込み靈界現界の境迄一行五人は進み入り、高姫の精靈
の試しに會はされ、神の化身に助けられ、漸く蘇生し、又もや龍王に辱られ、初
稚姫様のおとりなしによつて此通り夜光の玉を頂き、一先づエルサレムを指して
上る此伊太彦が體の痛み、死線の毒にあてられし其艱苦は今に残れるか、頭は痛

み胸は苦しく、足はかくの如く腫れ上り、もはや一足さへ進まれぬ。吾は如何なる因果ぞや。許させ玉へ天津神、國津神、玉國別の吾師の君よ。惟神靈幸倍坐世。それにつけてもブラワゝ一ダ姫は孱弱き女の一人旅、何處の野邊にさまようであらうか。山野河海を跋渉したる此伊太彦の健足でさへ、斯の如く痛むものを、歩みもなれぬ孱弱き女の身の、その苦しみは如何許りぞや。思へば思へば初めて知つた戀のなやみ、皇大神の御言葉と師の言葉には背かれず、さりとして此儘、思ひ切られぬ胸の苦しさ、最早かくなる上は吾はハルセイ山の頂にて朝の露と消ゆるのではあるまいか。假令假にもせよ、千代を契つたブラワゝ一ダ姫に夢になりとも一目會ふて、此世の別離が告げ度いものだ。あゝ如何にせむ千秋の怨み、萬斛の涙、何れに向つて吐却せむや」

と、胸を躍らせ、息もたえだえに涙は雨と降りしきる。

かかる處へ二人の杣人に擔がれて色青ざめ半死半生の態にて登つて來たのは夢寐にも忘れぬ戀妻のブラワゝ一ダ姫であつた。伊太彦は一目見るより、嬉しさ、悲しさ胸に迫り、涙の聲を絞り、僅かに、

「あゝ、其女はブラワ、一ダ姫であつたか。お前の其様子、嘸苦しいであらう、此伊太彦も死線を越えた時のなやみが、まだ体内に残つて居ると見え、今は九死一生の場合、せめては一目なりと、お前に會うて天國の旅がしたいものだと思つてゐたのだ。あゝ斯様の處で會はうとは夢にも知らなかつた。之も神様の大慈大悲のおとりなし。あゝ有難し有難し、惟神靈幸倍坐世」
と合掌する。ブラワ、一ダ姫は絲の如き細き聲を張り上げて息も苦しげに、
「あゝ嬉しや、貴方は吾背の君伊太彦様でムいましたか。妾はまだ年端も行かぬ女の身、旅に慣れない孱弱き足許にて貴方に會うた嬉しさ。スーラヤ山の險を越え、生死の境に出入し、神の仰を畏みて、神力高き御一行様に立別れ、踏みも習はぬ山道をトボトボ来る折もあれ、俄に體は疲れ果て、魂は宙に飛び、最早臨終と見えし時、此杣人の情によりて、漸くここに救ひ上げられ参りました。何卒伊太彦様、妾の命は最早斷末魔と覺悟を致して居ります。此世の名残に今一度、貴方のお手をお貸し下さいませ。さすれば假令此儘死するとも少しも此世に残りはムいませぬ。あゝ生みの父様、母様、兄様が、妾夫婦の事をお聞きなされば如何

にお歎き遊ばす事であらう。そればかりが黄泉路の障り、あゝ如何にせむか
と伊太彦の側らに身を投げ出して泣き叫ぶ。其痛はしさ。流石豪氣の伊太彦も女
の情にひかされて恩愛の涙に袖を絞り乍ら、
「あゝ其方の云ふ事も尤もだが、大切なる神の使命を受けて、此夜光の玉をエル
サレムの宮に獻じ、ハルナの都に進まねばならぬ身の上、假令肉體は亡ぶとも精
靈となつてでも此使命を果さねば、どうして神界に申譯が立たう。初稚姫を通し
ての大神様のお言葉、吾師の君の御教訓、順序も守らねばならぬ神の使が、如何
に戀しき妻の身なればとて、どうして妻の手を握る事が出来よう。もしも此玉の
神靈が吾懷より逃ぐる事あれば、それこそ末代の不覺、ここの道理を聞分けて、
ブラワ、一ダ姫、そればかりは許して呉れ。假令此世の運命盡きて靈界に至る
とも、互に相慕ふ愛善の思ひは彌永久に失するものではあるまい。假令此世で長
命をするとも日數に積れば二三萬日の日數、此短き瞬間に戀の魔の手に囚はれて
幾億萬年の命の障害になるやうな事があつては、吾も汝も、とり返しのならぬ罪
悪を重ねねばなるまい。眞に、其方を愛する伊太彦は、其女に無限の生命を與へ

無窮の歡樂に浴せしめ度いからだ。必ず悪く思ふては呉れなよ」

と息もちぎれちぎれに苦しげに説き諭す。ブラワ、一ダ姫は首を左右に振り、

「いえいえ、何と仰せられましても臨終の際に只一回の握手位許されぬ事がある

りませうか。戀に燃え立つ妾の胸、焦熱地獄の苦しみを救はせ給ふは吾背の君の

御手にあり、假令未來に於て如何なる責苦に會ふとても夫婦が臨終の際に互に介

抱をし相助け相救ふ事の出来ない道理がありません。物固いにも程がムいます。

妾の心も少しは推量して下さいませ」

と云ひつつ伊太彦に縋り付かむとする。伊太彦は儼然として、たかつた蜂を拂う

やうな態度にて金剛杖の先にてブラワ、一ダ姫を突き除け、勿ね除け、

「これブラワ、一ダ姫、慮外な事をなさるな。大神様のお言葉、吾師の君の御教

訓を何とする考へであるか。今の苦みは未來の樂み、左様の事に辨別のない其方

とは思はなかつた。とは云ふものの、同じ思ひの戀しい夫婦、あゝ如何にせば煩

悶苦惱を慰する事が出来ようか」

と胸に焼鐵あてし心地、差俯向いて涙に暮れて居る。二人の杣人は聲高らかに打

氣が吹いて居るのに、之は又古い事を仰有る。三五教と云ふ宗教は實に古臭いものだな。此廣い天地に自在に横行闊歩し、天地經綸の司宰をする人間が些々たる女一人に愛を注いだと云つて、それを罰すると云ふやうな開けぬ神があらうか。もし神ありとせば、そんな事云ふ神は野蠻神の、盲神だよ。いや宣傳使様、悪い事は申しませぬ。この可愛らしい、まだ年の行かぬナイスが之丈け、命の瀬戸際になつて、云ふ事を聞かぬとは無情にも程がある。お前さまも、よもや木石でもあるまい。暖かい血も通つてゐるだらう。人情も悟つて居るだらう。吾々兩人がここに居つては、恰好が悪くと思ひ、躊躇してゐるのではあるまいか。さうすれば吾々兩人はここを立退くから、泣くなり、笑ふなり、意茶つくなり、好きの通りにしなさい。おい兄弟、行かう。斯うして夫に渡して置けば、俺等も安心と云ふ

ものだ

柚の二、さうだな 兄貴の云ふ通り兩人が居つては恰好が悪くて意茶つく事も出来まい。此世の中は偽りの世の中だから、人の前では思ふ所を言葉に出し、赤裸々に自分の信念を吐く事は誰だつて出来まい。さうだ俺等が此處に居るので斷末魔

の夫婦の別れを惜む事も出来ぬのだらう。そんなら兄貴、行かうぢやないか」
伊太「もしもし杣人様、決して御心配下さいませぬ。世間の人間のやうに吾々は決して裏表はありません。思ふ處を云ひ、思ふ所を行ふのみです。吾々は瘦ても倒けても三五教の宣傳使、決して外面的の辭令は用ひませぬ。それ故に天地の神に恥づる事なき二人の行動、貴方がお聞き下さらうが、少しも差支はムいませぬ。何卒誠に濟みませぬが、左様な事を仰有らずに、もう暫らく私の最後を見届けて下さい。おひおひ體は重くなり、足は一步も歩けませぬ。もし吾々夫婦が此儘死んだならばウバナング龍王が持つて居た此夜光の玉をエルサレムへ持つて行く事が出来ませぬ。何卒御面倒でせうが乗掛けた舟だと思つて息のある中に此玉を貴方に渡して置きますから、貴方代つて何卒これをエルサレム迄行つて大神様へ奉つて下さいませぬか。澤山はなけれども此懐の金を旅費として、神様の爲めと思つて行つて下さいませぬか」
杣の「ハ、ハ、ハ、氣の弱い男だな。お前も神の道の宣傳使ならば、何故も少し男らしくならないのか。醜い弱音を吹いて人に泣顔を見せると云ふのは不心得では

ムらぬか、喜怒哀樂を色に現はさずと云ふのが男の中の男でムらうぞ」

伊太「成程、貴方のお説も尤もだが、人間は悲しい時に泣き、腹の立つた時に怒り、嬉しい時に笑ふのが本當の神心、喜怒哀樂を色に現はさぬ人間は偽り者か化物ですよ。今日の世の中は、それだから虚偽虚飾、世の中が眞暗になるのです。

吾々宣傳使は之を匡正する爲、道々宣傳し乍らハルナの都に進むのです」

柚の二「成程一應御尤もだ。然し乍ら一枚の紙にも裏表がある。最愛の妻が臨終の願ひ、それを聞かない道理がムいませうか。貴方は餘り理智に走り過ぎる、情がなければ人間ではありませんませぬよ。廣い心に考へて世の中は、さう狭く考へるものではないませぬ。變幻出沒窮まりなく、時に臨み變に應じ、うまく此世を渡つて行くのが、神の御子たる人間ではありませんまいか。ナアお姫さま、さうでムいませう」

ブラワ「はい、伊太彦さまのお言葉も御尤もなり、貴方のお言葉も御尤もでムいます」

柚の二「伊太彦さまのお言葉も御尤も、俺の言葉も御尤も、とはチツト可怪しい

ぢやありませんか。どちらか、尤もと不尤もの區別がありさうなものだ。さアお姫様、貴女の思惑通りなされませ。斯うして様子を考へて見れば、最早此世の別れと見える。伊太彦さまも體に毒が廻り何れは死なねばならぬ命、生命のある間に互に手を握つて天國とかへ行く準備をなさいませ。決して悪い事は申しませぬ。伊太「ブラワ、」ダ姫初めお二人のお言葉、その御親切は骨身に浸み渡つて、何とも云へぬ有難さを感じますが、どうあつても私は神様が恐ろしうムいます。神様の教の爲には如何なる愛も、如何なる寶も總てを犠牲にする考へですから、もう之きり何とも仰有らずに下さいませ。あゝ惟神靈幸倍坐世」

杣の「」扱ても扱ても固苦しい男だな。成程之では世に容れられないのも尤もだ。矢張バラモン教が時勢に適當してるわい。俺も實はバラモン教の信者だが、まだ一度も斯んな固苦しい宣傳使に會ふた事はない。押せども引けども少しも動かぬ千引岩のやうな宣傳使だな。斯様な無情な男に戀をなさる姫様こそ實に不幸な方だな。あゝどうしたら宜からうかな」

(大正一二・五・二九 舊四・一四 於天聲社 北村隆光録)

第一八章 夜の旅（一六二五）

伊太彦は、目の前に最愛のブラワゝーダ姫が悩み苦しむ、最後の握手を求むるその心根の不愍さ、胸迫り嗚咽涕泣稍久しうし、又もや首をあげ涙を拂ひながら、伊太彦「ブラワゝーダ姫よ、お前がこの様に苦しむのも私の意志が弱かつた爲だ。テルの里にて體よく斷れば、お前の迷ひもさめ、私も斯様な神の誠めに遇ふのではなかつたのに、どうぞ許して呉れ。生死を共にすると誓つた女房の其女に、唯一度の握手も許さぬと云ふ程伊太彦も無情漢ではなけれども、使命を受けた此の體、假令肉體は朽果つるとも、何うして此誓ひを破る事が出来よう。本當に心の底から其女を愛するため、かかる無残い所置をするのだ、決して無情な男とせめて呉れるな。伊太彦の思ひは千萬無量。如何なる罪の報ひにや初めて知つた戀の苦しみ、其女もルーブヤの娘、ブラワゝーダと云はるる女、よもや伊太彦の言葉が分らぬ道理はあるまい」

ブラワゝーダ「伊太彦さま、左様ならばこれにてお暇を致します。隱世の大神守

りたまへ幸倍たまへ^{さきはへ}」

と云ふより早く懐劍をすらりと抜き放ち、吾喉に突き立てむとす。伊太彦は驚いて其手を押へむとすれども、刻々と重る病の爲手足も叶はず、如何はせむと氣を焦心り、あはや一大事と思ふ刹那、杣人は飛びかかつてブラワゝ一ダの懐劍を腕取り、傍の密林へ投げ込んで仕舞つた。杣人は忽ち容色端麗なる二人の美人と化した。伊太彦はハツと驚き差俯向く。ブラワゝ一ダ姫も忽ち、以前の化身に彌益高尚優美なる女神と化して仕舞つた。伊太彦は漸うにして頭を擡げ見れば摩訶不思議、ブラワゝ一ダ姫も杣人の影もなく、三人の女神が儼然として吾前に立つて居る。扱てはブラワゝ一ダと見せかけ木花咲耶姫の吾前に現はれたまひしか、あら有難や辱なやと思はず知らず合掌した。俄に伊太彦の病は拭ふが如く、忘れたるが如く、どこへか散り失せて、さも爽快な氣分に充たされ、坐り直つて兩手を仕へ、

伊太「ハハ、有難や尊や木花姫の命様、どこ迄もお心を籠められたる御教訓實に感謝の至りに堪へませぬ。何卒々々此伊太彦が途中に於て惡魔の誘惑に陥らざ

る様御守護を願ひます。又ブラワ、一ダ姫も纖弱き女の一人旅、何卒々々御守護を願ひ奉ります」

木花姫「汝の願ひ確に承知した。併し乍ら、玉國別の身の上は何と致すのだ」

伊太「恐れ入りました。これだけのお試練に會ひながら、自分の身の上や妻の身の上のみを願ひ申し、師の君の御身の上を後に致しました。どうぞお許し下さいませ」

木花姫「其方は、玉國別、眞純彦、三千彦の宣傳使は神徳備はり、神の御加護も厚ければと、安心の上願はなかつたのだらう」

と直日に見直し聞き直したまふ情の言葉に、伊太彦は恐れ入り、兩掌を合せて感謝の涙を瀧の如くに流して居る。忽ち虚空に音楽聞え、芳香薫じ、カラビンガの祥鳥に取まかれて雲を霞と御姿をかくしたまふた。後振りかへり、伊太彦は幾度となく御空を仰ぎ見て、

木の花の一度に開く伊太彦が

心の空も晴れ渡りけり。

天教の山より天降りたまひたる

木花姫の惠尊し。

いたづきの身も健かになりけり

神の惠の深きをぞ知る。

玉國別司の君は今何處

守らせたまへ天津神達。

仰ぎ見る眞純の空は吾友の

心の色の現はれとぞ知る。

神徳を清き御靈に三千彦の

吾友垣を偲びてぞ泣く。

三千彦も嘸今頃はデビス姫に

心曇らせたまふなるらむ。

デビス姫ブラワゝーダ姫も御教に

倣ならひて山路やまぢ一人ひとり往ゆくらむ。

鬼おに大蛇をろち虎狼とほほかみの猛たけぶなる

野路のぢ往ゆく人ひとぞ危あやぶまれける。

さりながら尊たふとき神かみのましまさば

やすく進すすまむ女をんなの旅たびも。

いざ立たちて珍うづの都みやこに進すすみ行ゆかむ

國治くにはる立たちの御みあとたづねて

と口吟くちずさみながら、元氣げんき回復くわいふくした伊太彦いたひこは、ハルセイの峠たうげを宣傳歌せんでんかを謠うたひながら下くだり往ゆく。

伊太彦いたひこ 三千世界さんぜんせかいの梅うめの花はな 一度いちどに開ひらく時ときは來きぬ

此世このよを救すくふ生神いきがみは 天教山てんけうざんに神集かむつどふ

齋苑いその館やかたやエルサレム コーカサス山さんや顯恩郷けんおんきやう

自轉倒島の聖場に

嚴の御魂を配りまし

豐葦原の國中に

潛みて世人を惱ませる

醜の大蛇や鬼神を

言向け和し天國を

地上に建設せむために

神素盞鳴の大神は

嚴の御靈の御言もて

神の柱を四方八方に

使はしたまふぞ尊けれ

吾は小さき身なれども

神の御言を蒙りて

玉國別の師の君と

魔神の猛る月の國

ハルナの都の征討に

登る尊き神司

任けられたるぞ有難き

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも

誠の力は世を救ふ

スダルマ山の麓にて

カークス、ベースに廻り合ひ

スーラヤ山に玉ありと

聞くより心機一變し

矢猛心の伊太彦は

吾師の許しを強請し

間道かんだう潜くぐりて三人みたり連れ
 思おもはぬ女をんなに廻めぐり遇あひ
 八大龍王はちだいりゅうわうの随ずい一いちと
 ナーガラシャの岩窟がんくつへ
 幽世あのよ現世このよの境さかひまで
 此世このよを造つくりし神直日かむなほひ
 見直みなほしまして現世うつしよに
 折をりから來きたる宣傳使せんでんし
 岩いはの隙間すきまの明あかりをば
 玉國たまくに別の師しの君きみが
 吾等われらを待またせたたまひけり
 神かみの經綸しぐみのはかりなき
 御稜威みいづは高たかくスメールの
 喜よろこび勇いさみ師しの君きみの
 御船みふねに乘のりてエル港みなと
 テルの磯邊いそべに安着あんちやくし
 妹背いもせの約やくを固かためつつ
 世よに聞きへたるウバナダ
 一行いっかう五人ごにん進すすみ入いり
 進すすみし時ときの恐おそろしさ
 心こころも廣ひろき大直日おほなほひ
 甦よみがへりたる尊たふとさよ
 初稚はつわかひめ姫ひめに助たすけられ
 目當めあてに潜くぐり出いで見みれば
 磐樟いはくすぶね船ふねを横よこたへて
 あゝ惟神かむながらかむながら々々
 千尋ちひろの海うみも何なんのその
 山やまも物ものかは伊太彦いたひこは

順風じゆんぷうに眞帆まほをかかげつつ 事ことなく上のぼればこは如何いかに

初稚はつわかひめ姫ひめの一行いっかうは 埠頭ふとうに立たたせ給たまひつつ

いと懇ねもころに待まちたまふ 吾師わがしの君きみの一行いっかうは

無事ぶじの再會さいくわい喜よろこびつ 前途ぜんとを祝しゆくする折をりもあれ

初稚はつわかひめ姫ひめの御教訓ごけうくん 畏かしこみまつり最愛さいあいの

妻つまに袂たもとを別わかちつつ 夜光やくわうの玉たまを捧持ほうぢして

珍うづの都みやこに上のぼり往ゆく 一人ひとり旅路たびぢとなりにける

夜よを日ひについでハルセイ山ざんの 峠たうげの上うへに來きて見みれば

頭あたまは痛いたみ胸むねつかへ 手足てあしも自由じゆうにならぬ身みの

其その苦くるしさに山頂さんちやうの 芝生しばふの上うへに座ざを占しめて

感謝かんしゃ祈願きぐわんを凝こらしつつ 懺悔ざんげの涙なみだに暮くるる折をり

二人ふたりの杣そまにたすけられ 命いのち辛からがらのぼり來くる

一人ひとりの女をんなは誰人たれびとと 窺うかがひ見みればこは如何いかに

夢ゆめにも忘わすれぬブラワゝーダ 妹いもの命みことと知しりしより

心こころを鬼おにに持もち直なほし
神かみの使しめい命めいをまもらむと

心こころの中なかの曲くせもの者と
力りきせんくとう戦せん苦く闘とうの其その結けつ果くわ

漸やうやく晴はれし胸むねの暗やみ
ブラワゝ一ひめダみ姫みと見みえたるは

いとかしこも畏こき木この花はな姫ひめの
珍うづの化けしん身みにましましぬ

二ふたり人のそま杣みと見みえたるも
木このはな花な姫ひめのお脇わき立だち

かくいたひこまでいまことやしつかさき伊つ太く彦つを
誠まことの司つかさに造つくらむと

千ち々ぢに心こころを碎くだきます
三さん十じふ三さん相さうの觀くわん自じ在ざい

天てん尊そん様さまの御おん情なさけ
仰あふぐも畏かしこき次し第だいなり

あゝかむながら惟かむながら神かみ々々
身みも健すこやかになりぬれば

これより進すすんでエルサレム
吾わが師しの君きみのあと後ごをお追おひ

誠まことの道みちを一ひとすぢ筋すぢに
脇わきめ目めもふらず進すすむべし

旭あさひは照てるとも曇くもるとも
月つきは盈みつとも虧かくるとも

假たとへ令だいち大しづ地つは沈しづむとも
吾わが身からだ體たまは朽くつるとも

神かみに受うけたる此この魂みたま
如い何かで曲まが靈ひに汚けがさむや

直日に見直し聞き直し
宣り直しつつ惟神

教のままに進み往く
四邊の景色は漸くに

秋の色をば湛へつつ
山野の木草はさわさわと

空吹く風に翻り
いとも床しくなりにけり

あゝ惟神々々
一日も早くエルサレム

神の表はれましまして
黄金山下の神館

埴安彦や埴安の
姫の命の永久に

鎮まりたまふ大前に
進ませたまへと願ぎまつる

と謠ひ乍ら緩勾配の山道をトントンと下り行く。日は西山に傾いて殊更涼し
き夕の風、伊太彦が面を吹く。伊太彦は漸くにしてさしもに高き此大峠の
下りつき傍の巖に腰打ちかけて、ウトリウトリと眠りについた。斯かる所へ峠の
上の方から、

イクいクく ヲをバラモン教けうに仕つかへたる 醜しこの司つかさのイク、サール

清春山きよはるやまの岩窟がんくつで 松彦司まつひこつかさに教をしへられ

三五教あななひけうの正道せいだうに 歸順きしゆんしまつり玉國別たまくにわけの

神かみの司つかさに從したがひて 伊太彦司いたひこつかさと諸共もろともに

祠ほこらの森もりの宮普請みやぶしん 仕つかへまつりて師しの君きみに

惜をしき別わかれを告つげながら 珍うづの館やかたの受付うけつけに

暫しばし仕つかふる間まもあらず 三五教あななひけうの高姫たかひめや

妖幻坊えうげんぼうの空助もくすけが ブラリブラリとやつて來きて

暴威ばうゐを振ふるふ憎にくらしさ 斯かかる所ところへ靈國れいこくの

天女てんによと現あれし初稚姫はつわかひめが 立たち寄よりまして妖邪えうじやをば

拂はらはせたまひ吾々われわれに 尊たふとき教をしへを傳つたへつつ

又またもや聖場せいぢやうを立たちたまふ 吾等われら二人ふたりは姫君ひめぎみの

其神德そのしんとくに憧憬どうけいし ハルナの都みやこの御伴みともをば

仕つかへむものと後あとや先さき 姫ひめの御身おんみを守まもりつつ

此世を照らす生神の日の出の神に瑞寶を

與へられたる嬉しさに 姫の許しはなけねども

誠一つを力とし 此處迄進み來りけり

初稚姫は今何處 スマートさまの聲さへも

今は全く吾耳に 聞えず遠くなりけり

あゝ惟神々々 神の恵の幸はいて

一日も早く姫君に 遇はさせたまへスマートの

清き尊き龍聲を 聞かさせたまへと願ぎまつる

山野河海を打ち渡り 影に日向につき添ひて

此處迄御身を守りつつ 水晶玉を捧持して

來たりし吾等の有難さ あゝ惟神々々

青春山の岩窟で いと懇切に交はりし 如何になり行きたまひしか

伊太彦司の身の上は 神ならぬ身の吾々は

聞かまほしやと思へども

如何いかに詮術浪せんすべなみの上うへ　踏ふみも習ならはぬ山路やまみちを
登のぼりつ下くだりつ進すすみ來くる　あゝ惟かむながらかむながら神々々
皇大神すめおほかみの引ひき合あせ　伊太彦司いたひこつかさに今一度いまいちど
遇あはさせたまへと願ねぎまつる』

と謠うたひつつ峠たつげを下くだつて來くるのはイクであつた。伊太彦いたひこは疲つかれ果はてて、ウトリウト
リと眠ねむつて居ある耳みみに幽かすかに此聲このこゑが聞きえて來きた。ふと目覺めざませば、二人ふたりの男をとこが吾前わがまへに
近ちかづいて來くる事ことに氣きがついた。

（大正一二・五・二九　舊四・一四　於天聲社樓上　加藤明子録）

第五篇

神檢靈査

第一九章 仕込杖（一六二六）

イク、サールの兩人は伊太彦の路傍の石に腰打掛、俯向いてる姿を見て、月影にすかし乍ら、

イク「貴方は旅人とお見受け申しますが、一寸物をお尋ね申します。天女のやうな綺麗な綺麗な姫様が犬を連れてお通りになつたのを御覽になりませぬか」

伊太彦は八テ不思議な事を尋ねるものだと思ひ乍ら、二人の顔をツラツラ眺めて、

伊太彦「イヤさう聞く聲は何だか聞き覚えがあるやうだ。拙者は三五教の宣傳使、伊太彦と申すもの、左様なお方はお通り遊ばしたのは見た事はムらぬ」

サール「やアお前は伊太彦さまぢやないか。清春山の岩窟では随分管を捲いたものだな、其後玉國別さまに跟いてハルナの都へ進まれた筈だが、まだ斯んな處へ迂路ついてムつたのか」

伊太彦「うん、君はイク、サールの兩人だな。これはこれは珍らしい處で會ふたも

のだ。そして又初稚姫様の後を何處迄も慕うて行く考へかな。初稚姫様がよくま

アお伴を許された事だな

サール「何と云つてもお許しが無いものだから、強行進軍と出掛け、見えつ隠れ

つ、後になり前になり、ここ迄ついて来たのだが、エルの港からサツパリお姿を

見失ひ、前になつてるのか、後になつてるのか分らぬので心配してるのだ

伊太「あ、さうだつたか。拙者も初稚姫様に一度會つてお禮を申し度いのだが、

あの方は神様だから變幻出沒自在、何方へおいでになつたか皆目分らぬのだ。ま

アゆつくり一服し玉へ。まだ此坂道は随分あるさうだから、慌た處で仕方がない。

チツとは人間の身體も休養が大切だ。休んでは歩き、休んでは歩きする方が、身

體の爲にも何程よいか分らないよ

イク「久し振りに伊太彦さまに面會したのだから、先づ此處で、ゆつくりと話し

て行かうぢやないか

サール「久振りだと云ふけれど、スマの關所でお前が宿屋をやつて居た時に入

に守衛然と控へて居つたぢやないか。云はば伊太彦司等の救ひの神さまだ

イクなるほど成程、あの時に伊太彦司も居られたのかな。あまり澤山のバラモン軍で見落して居たのだ。そして初稚姫様に叱られるものだから、スマの里を一目散に駆け出し姫様を待ちつつ、彼方此方とバラモンの泥棒を言向和して来たものだから今になつたのだが、伊太彦さま、之から三人一緒にハルナの都へ行かうぢやないか。どうしたものが姫様はハルナへ行かずに、エルサレム街道の方へ足を向けたものだから、跟いて来たのだが一體どうなるのだらうな」

伊太かみさま「神様のなさる事は到底吾々には分らないよ。吾師の君の玉國別様だとて、チームス峠を向ふへ渡り、直にハルナに行かれる都合だつたが、いろいろ神様の御用が出来たり、事件が突發して、何者にか引かるる様に此方へおいでになつたのだ。之も何かの神様の御都合だらう。然し乍ら三人一緒に行く事は到底出来ない。宣傳使は一人と定つてるさうだから初稚姫様も伴をつれないのだ。それで私も玉國別の師匠から途中から、突放されて一人旅をやつてゐるが、一人旅は辛いものの又便利なものの氣樂なものだ。何は切て置き、神様の命令だから君等と一緒に行く事は出来ないわ。何れエルサレムで一緒に目にかからうぢやないか」

のだ。玉を持つて歩かなくちやならぬのは、ヤツパリ何處かに足らぬ處があるのだ。夜道が怖いと云つて仕込杖を持つて歩くやうなものだ。なア伊太彦さま、さうでせう」

伊太「さう聞かれるとお恥かしい話だが、實の所はスーラヤ山の岩窟に入り、ウバナダ龍王の玉を頂いて此處に所持して居るのだ。ヤツパリ私も仕込杖の口かな」

サール「ヤア其奴ア不思議だ。あの八大龍王の中でも最も險難な所に棲居をしてゐる死の山と聞えたスーラヤ山へ駆け上つて玉をとつて來るとは豪氣なものだ。

そして其玉は今持つて居られるのか。一つ見せて貰ひ度いものだな」

伊太「ヤア折角だが神器を私する譯には行かぬ。丁寧に包んで懷に納めてあるのだから、エルサレムに行つて言依別の神様にお渡しする迄は拜む事は出來ないのだ。そしてお前達の持つて居る玉と云ふのは誰から頂いたのだ」

イク「勿體無くも日出神から直接に拜戴したのだ。此玉のお蔭で澤山な泥棒にも出會ひ、色々の猛獸の原野を渡り、大河を越えて無事で來たのも、此水晶玉の御

神徳だ。伊太彦さまが玉が大切だと云へば、此方も大切だ。絶対的に見せる事は出来ませぬわい」

伊太彦「それでは仕方がない、賣言葉に買言葉だ。自分の玉を隠しておいて、人の玉を見せると云ふのが此方の誤謬だ。さアここで別れませう。エルサレムに行つて何れ十日や二十日は吾師の君も御修業遊ばすから、其間には一緒になるであらう。左様なら」

と伊太彦はスタスタと下り行く。

二人は伊太彦の言葉に従ひ後をも追はず、ゆつくりと路傍の岩に腰打掛け話に耽つてゐる。

イク「おい、サール、伊太彦が松彦に捕へられ、清春山の岩窟にやつて来た時は随分面白い奴だった。滑稽諧謔口を衝いて出ると云ふ人氣男が、あれ丈けの神格者にならうとは豫期しなかつた。何と人間と云ふものは變れば變るものぢやないか。吾々二人は初稚姫様のお伴も許されず、日蔭者となつて、斯う春情のついた牡犬が牝犬を探すやうに後を嗅つけてやつて来たものの公然とお目にかかる譯に

も行かず、ハルナの都へ行つてから、「不届きな奴だ、何しに來た」と叱られでもしたら、それこそ百日の説法屁一つにもならない。何とか立場を明かにせなくては、「名正しからざるは立たず」とか云つて、マゴマゴして居ると其處邊四邊の奴に泥棒扱ひをされて、其上虻蜂とらずになつては詮らぬぢやないか」

サール「何、神様は心次第の御利益を下さるのだから、吾々の眞心が姫様に通らぬ道理が何處にあらう。姫様は千里向ふの事でも御承知だから、自分等が斯うして跟いて來るのも御承知だ。之を黙つて居られるのは表面は何とも云はれないが、實は跟いて來いと言はぬ許りだ。そんな取越苦勞はするな。さア行かうぢやないか」

イク「道の邊に憩ふ二人は尻あげて

またもや先へ行かうぞとする」

サールこの「ば此場をばサールの吾われは何處どこへ行く

はちすばな蓮花な咲くハルナの都みやこへ。

今いま先さきへ一人伊太彦いたひこ宣傳使せんでんし

逃にげるやうにして玉抱たまかかへ行くゆ

イク「どろぼう泥棒のやうな顔かほした吾々われわれを

恐おそれて逃にげた伊太彦いたひこ司つかさ

サール「ば馬鹿か云いふな此世このよの中に住すむ奴やつは

皆みな泥棒どろぼうの未製品みせいひんなるら

イクいクく「バラモンの軍の君に從ひて

泥棒稼どろぼうかせぎし吾等われらふたり二人よに」

サールさ「そんな事夢にも云ふて呉れるなよ

吾等われらは最早神の生宮もはやかみいきみや。

泥ぬ凜かるみの泥どろの中なかより蓮花はちすばな

咲さき出いづる例ためしあるを知らずやし」

イク「蓮花如何はちすばないかに清きよけく匂におふとも

散ちりては泥どろの埋草うめぐさとなる。

一ひと度たびは祠ほこらの前まへで咲さき充みちし

蓮はちすなれども今いまは詮せんなし。

神の道聞く度毎に村肝の

心の垢の深きをぞ知る。

吾胸にさやる黒雲吹き拂ひ

照らさせ玉へ水の光に。

伊太彦の神の司を規範として

魂研かまし道歩みつつ

二人は半時ばかり経つて又もや宣傳歌を謠ひ乍ら足拍子をとりに下り行く。

月の國にて名も高き 百の花咲き匂ふなる

ハルセイ山の大神 三日三夜をてくついで

漸くここに來て見れば 思ひも寄らぬ三五の

伊太彦司が道の邊に 旅の疲れを休めつつ

眠らせ玉ふ不思議さよ 思へば思へば恥かしや

高春山の岩窟に 伊太彦司と諸共に

酒酌み交はし夢の世を 酔ふて暮せし吾々も

心の駒を立て直し 祠の森に屯して

珍の宮居の神業に 仕へまつりし嬉しさよ

初稚姫の御後をば 慕ひてここ迄来て見れば

姫の姿は雲霞 行衛分らぬ旅の空

大空渡る月見れば 雲の御舟に乗らせつつ

西へ西へと進みます ハルナの都に姫様が

進ませ玉ふと聞きつれど 月の御後を従ひて

一旦珍のエルサレム 進ませ玉ふが天地の

誠の道に叶ふのか 思へば思へば神様の

遊ばす事は吾々の 曇りきつたる魂で

測り知らるる事でない 只何事も惟神

誠の道を一筋に 行く處までも行つて見よ

神は吾等と共にあり

人は神の子神の宮

いかでか枉の襲はむと

教へ玉ひし御宣言

頸に受けて逸早く

水晶の玉を守りつつ

伊太彦司の後を追ひ

いざや進まむエルサレム

守らせ玉へ天地の

皇大神の御前に

慎み祈り奉る

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも

誠の道は世を救ふ

誠一つの三五の

道行く吾は惟神

月の御神の後追ふて

神の集まるエルサレム

黄金花咲く神の山

黄金山に参上り

橄欖樹下に息休め

神の恵の涼風に

心の塵を拂ふべし

進めや進めいざ進め

勝利の都は近づきぬ

深き恵にヨルダンの

川の流れに御禊して

生れ赤子となり變り 初稚姫の御許しを

受けて尊き神司 榮えに充てる御顔を

伏し拜みつつツクツクと エデンの川を舟に乗り

フサの入江に漕ぎ出して 何のなやみも波の上

ハルナの都へ進むべし 勇めよ勇めよ よく勇め

神は吾等と共にあり あゝ惟神々々

御靈の恩頼を玉へかし

かく謠ひ乍ら、イク、サールの兩人はハルセイ山の西坂を勢込んで下り行く。

(大正一二・五・二九 舊四・一四 於天聲社樓上 北村隆光録)

第二〇章 道の苦(一六二七)

ブラワゝーダ 月照彦の昔より 遠津御祖の仕へてし

三五教の信徒と テルの里庄のルーブヤが

家に生れしブラワゝーダ バラモン教の醜神の

教のために朝夕に 虐げられて表面

三五教を打ち捨てて バラモン教を奉じつつ

家の柱に穴うがち 神の御名をば刻みこみ

密かに拜みまつりつつ 時まつ程に三五の

神の司の伊太彦が 鳩の如くに下りまし

父と母との許し得て 妹背の縁を結ばせつ

兄の命も嬉しみて 伊太彦司の神業を

助けむためとてスーラヤの 湖水の波を打ち越えて

海拔三千有餘尺 龍王の潜む岩窟に

進みて諸の苦しみを 味はひ遂に根の國の

入口迄も進み行き 神の恵の御教を

いと懇ねせこにさとされつ

初稚はつわかひめ姫ひめに救すくはれて

岩窟いはやの隙すきよりぬけ出し

姫ひめの御船みふねに助たすけられ

漸やつやくエルみなとの港みなとまで

安着あんちやくしたる折をりもあれ

神かみの教をしへに従したがひて

いとしき夫をつとに生別いきわかれ

踏ふみも習ならはぬ一人ひとり旅たび

草鞋わらぢに足あしを食くはれつつ

道みちの小草をぐさをあけに染そめ

杖つゑを力ちからにハルセイ山ざんの

今いまや麓ふもとにつきにけり

音おとに名な高たかき月つきの國くに

大高山だいかうざんと聞きこえたる

此山このやま越こえてエルサレム

聖地せいぢに渡わたる吾われなれど

如何いかがはしけむ身みは疲つかれ

息いきも苦くるしくなりにけり

死線しせんを越こえし其時そのときの

妖邪えうじやの空くう氣きの體からだに

未だいま潜ひそむと覺おぼえたり

玉國たまくに別の師しの君きみや

伊太彦いたひこ司つかさは今いま何處いづこ

様子やうす聞きかまく思おもへども

神かみの戒いましめ強つよくして

遇あはむよしなき旅たびの空そら

國くにに殘のこせし父ちち母ははや

兄の命は嘸やさぞ 晝はひねもす終夜

二人の身をば案じつつ 神に願ひをかけまくも

畏き嚴の御恵を 二人の上に與へよと

祈らせ給ふ事ならむ 雲路遙に進み來る

吾は孱弱き女の身 後ふり返り眺むれば

限りも知らぬ大野原 蓮華の花は遠近に

咲き匂へども百鳥は 聲も涼しく謠へども

言問ふよしも泣き逆吃 此山口にたち竝ぶ

沙羅の古木に靈あらば 吾が垂乳根や兄君や

伊太彦司の消息を 完全に知らして呉れるだらう

あゝ惟神々々 神に任せし此身體

取り越し苦勞は禁物と 教の言葉を身に刻み

心に銘して忘れねど 又もや起る慕郷心

拭はせたまへ惟神 御前に願ひ奉る

朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも 三五教の御教は

此現世は云ふも更 吾魂の何處迄も

つづく限りは捨てはせぬ 誠一つの大道を

進む吾身は曲神の さやらむ恐れはなけれども

心にひそむ曲者が 又もや頭擡げつつ

清き乙女の魂を 戀の暗路にさそひ往く

晴れぬ思ひの吾體 救はせたまへ惟神

御前に祈り奉る

斯く謠ひながら、漸くにしてハルセイ山の峠を中程迄登りつき、茲に息を休めて
來方行末の事を思ひ案じ、一人旅の淋しさに袖を霑して居る。日は漸く西山に
没し、四邊は薄墨の幕を卸したやうになつて來た。花は扉をとちて眠りにつき鳥
は埒をもとめて彼方此方の森林目蒐けて忙しげに翅を早めて居る。ブラワァーダ

姫は獨言、

「あゝ味氣なき浮世ぢやなア、テルの里の酋長の娘と生れ、朝な夕なに三五の神様を心私かに念じつつ、幾度となくバラモンの司に虐げられ、心にもなきバラモンの信者となり濟まし、吾一家は云ふも更、村人迄が心にも無き信仰を強られ、月に三度の火渡り水底潜り、裸體の修業、荊棘の室にと投ぜられ、是が神様の御心を安める第一の勤めと、阿鼻叫喚の苦みを忍びて漸く孱弱き此身も十六の春を迎へ、天運茲に循環して、尊き三五教の神司と廻り會ひ、親子兄弟納得の上、夫婦の契を結び如何なる艱難辛苦も吾背の君と一つにせばやと父母や兄に別れ、此處迄ぼつぼつ後を慕ふて來たものの、もはや一步も進めなくなつて來た。あゝ如何にせば、此苦しみが免れるだらう。是も矢張表面を偽り、バラモンの神を祭り勿體なや大慈大悲の三五教の神様をせま苦しい柱の穴を穿つて祭り込んだ其天罰が報ひ來たのであらうか。」燈火をともして床の下に置くものはない」とは聖者のお言葉、其お言葉に背き、バラモンの惡神を尊敬して來た重々の罪業廻り來て、吾身は如何なる苦しみを受けやうとも、最早因縁づくつと締めて決して恨みは致し

ませぬ。神様何卒、垂乳根の父母や兄や、吾背の君や村人の罪をお許し下さいまして、天晴御神業にお使ひ下さるやう、偏に願ひ奉ります。あゝ斯うなつては最
はや締めねばなるまい。あゝ俄に胸が痛くなつて來た。藥の持ち合せもない。も
はや吾身の罪を神様にお許し願ふ譯にもゆくまい。吾罪が許されて、父母や吾背
の君に戒めが往くやうであつてはならない。どうぞ神様、妾の身をお召し下さつ
て、一同の罪を許して下さいませ。それに付いても、戀しい伊太彦様に臨終の際
に一目お目にかかりたいものだ。あゝどうしたらこの煩悶を消す事が出來やうぞ
と一人道傍の草の上に腰を卸し、悲歎の涙に暮れて居る。猛獸の聲は四方八方よ
り山嶽も揺るぐ許り聞えて來た。追氣丈のブラワゝーダも此恐ろしき唸り聲には
身の毛も彌立ち、死を決した身にも恐怖の波の打ち寄する憐れさ。ブラワゝーダ
は絶え入る許り泣き叫びながら、路傍の草の上に身をなげ伏せてひしひしと泣き
叫んで居る。

三千彦 三五教の宣傳使

玉國別に從ひて

山野を渡り河を越へ
テルモン館に立ちよりて

種々雑多と村肝の
心を碎き身を碎き

館の難儀を救ひつつ
風塵茲におさまりて

デビスの姫を妻となし
吾師の君と諸共に

キヨメの湖水を横断し
アヅモス山の山麓に

廣き館を構へたる
バーチル主従の命をば

神の恵に救ひ上げ
タクシヤカ龍王を言向けて

夜光の玉や如意寶珠
授かりながら師の君と

珍の都へ進み往く
スーラヤ湖水を乗越えて

エルの港につきし折
三五教の神柱

御稜威輝く初稚姫に
迷ひの雲を晴らされて

吾師の君と袂をば
いよいよ別ちデビス姫と

戀しき袂を別ちつつ
踏みもならはぬ山野をば

いと雄々しくも進み往く
此處は名に負うハルセイ山の

嶮しき峠の登り口 俄に聞ゆる猛獸の

聲は地震か雷か 身も毛も彌立つ許りなり

神の教を世に傳ふ 吾は男子の身なれども

かく怖ろしき心地する 此山路を何として

デビスの姫やブラワゝーダ 進まむよしもなかるべし

思へば思へば可憐しや 神の御爲道のため

世人の爲めとは云ひながら かくも苦しき草枕

旅に出で立つ女子の 行末思ひ廻らせば

いとど憐れを催して 涙の袖はひたされぬ

あゝ惟神々々 御靈幸倍ましまして

吾師の君は云ふも更 デビスの姫やブラワゝーダ

二人の纖弱き女子をば 神の御稜威に守らせて

いと易々と神業を 果たさせたまへ惟神

御前に謹み願ぎまつる 旭は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも 假令大地は沈むとも

誠一つの三五の 教を進む吾なれば

怖るる事はなけれども 神の教も悟り得ぬ

弱き女の如何にして 此難關を越ゆるべき

守らせたまへ天地の 皇大神の御前に

謹み願ひ奉る

三千彦はかく謠ひ乍ら、厭らしい唸り聲のする山路をとぼとぼと登つて行く。

幽かに聞ゆる悲しげなる女の泣き聲、耳に入るより三千彦は氣を取り直し、

三千『さてあの泣聲は正しく女と見える。此夜の山を通ふ女はよもや他にはある

まい。正しく、デビス姫がブラワ、一ダ姫に間違ひなからむ。いで一走り實否を

探り見む

と俄に足を早め、爪先上りの山路を勢込んで上り行く。見れば道の傍の草の上に

悲しげな女の姿が横たはつて居る。三千彦は驚き乍らツト傍により、

三千「もしもしお女中様、此山路に唯お一人倒れてゐるのは何處の人か、折悪く月は黒雲に包まれて、お姿はハツキリ分らねど、どうやらブラワ、一ダ姫様の様に思ひますが、もし間違つたらお許しを願ひます。私は決して怪しい者ではありませぬ。三五教の宣傳使三千彦と申す者、サア早く起き上つて有し次第をお話し下さいませ」

ブラワ「一ダ姫は三千彦の情の籠もつた言葉にノアの方舟に出遇つたが如く喜び、重き身をやうやうに起き上り、ブラワ「一ダ」ハイ妾は伊太彦の妻でムいます。貴方は神徳高き三千彦様、ようまあ尋ねて下さいました。何を云つても罪の多い此體、神様の戒めに遇ひましたか、モウ一足も歩けなくなつて、この草路に斷末魔の聲を絞つて恥しながら泣いて居りました」

三千彦は此體を見るより涙をハラハラと流し聲迄曇らせ乍ら、三千「御安心なさいませ。神様は屹度貴女の御身をお守り下さるでせう。否魂迄も永久に御守護下さいます。私が貴女をお連れ申してエルサレムまでお送り致します」

度たいは山やま々やまですが、神かみ様さまの仰おほせは、貴あなた女なもお聞きき及およびの通とほり大たい層そう嚴きびしくなりまし
て、御ご同どう行かうは叶かなひませぬ。併しかし乍ながら人ひとは心こころが肝かん腎じんでムこぞいます。心こころさへ生いき々いきして居を
れば、肉にく體たい位くらは何なんの雜ざ作ふさもムこぞいませぬ。何なに程ほど疲つかれたと云いふても休やすめば直すぐに回くわい復ふくす
るものでムこぞいます。氣きを確たしかにお持もちなさいませ。あゝ惟かむ神なが靈ら幸たま倍ちはへ坐ま世せ。……あゝ
三あな五な教ひけうの神かみ様さま、纖かよ弱わき女をんなのブラワゝ一ひとダをお救すくひ下くださるやう一ひと重へにお願ねがひ申ます。
夫それについては、デビス姫ひめも纖かよ弱わい女をんなの一人ひとり旅たび、何なに卒とそ貴あなた神ごの御おん恩ちよう寵をもつて無ぶ事じ
に聖せい地ちに御ご參さん詣けいの叶かなふやう、お取とり計はからひを偏ひとへに願ねがひ奉たてります。あゝ惟かむ神なが靈ら幸たま倍ちはへ
坐ま世せ」

と合がっ掌しやうしながら二人ふたりの間あひだには暫しばし無む言ごんの幕まくが卸おろされた。猛まう獸じうの聲こゑは一いっ層そう激はげしく彼あな
方た此こ方なたの谷たに々たにより百ひゃく雷らいの一いち時じに落おつるが如ごとく響ひびき來きたる。

（大正一二・五・二九 舊四・一四 於天聲社 加藤明子録）

ブラワゝーダはまだ十六才の娘盛り、初めて戀しき父母の家を離れ、二世の夫と契たる伊太彦力にエルの港迄ヤツと跟いて來た所、初稚姫の訓戒によつて、伊太彦は只一人の宣傳の旅に赴く事となり、翼を取られた鳥の如く、足をもがれし蟹の如く、淋しさと悲しさに胸塞がり、せめてはエルサレムにて戀しき伊太彦に會はむ事を一縷の望みとして、歩みも慣れぬ大原野を打涉り嶮き山路を越えて、漸く此處へ喘ぎ喘ぎ登りつめて來たのである。

死線を越えた時の邪氣體内に幾分か残りし事と長途の旅の疲れとによりて、最早、根盡き絶望の淵に沈み居る處へ、いとも凄じき猛獸の聲、彼方此方より襲ひ來る。淋しさ怖ろしさに魂も消えむ許り、バタリと道端に倒れ、決死の覺悟にて父母兄弟、夫の安全を祈りつつ、悲しさ堪へやらず、聲を限りに泣き叫んでゐた所へ、三五教の宣傳使三千彦が突然現はれて來たので、地獄で如來に會ひたる如き心地しつ々重き身を起し、やや落着きたる態にて、ブラワゝーダ、三千彦様、よくまあ妾の斷末魔とも云ふべき難儀の場所へお越し下さいまして、情のお言葉を賜り、殆んど甦つた様な心地が致します。就きまし

ては神様の仰せは一人旅との事でありますが、貴方と妾とは別に夫婦でもなければ怪しき戀仲でもムいませぬ。それ故道の三丁や五丁連れ立つて歩いた所で、別に神のお咎めはムいますまい。斯様な嶮き山路、せめて此峠を向ふへ下る迄、妾と一緒に往つて下さる譯には行きませぬ。孱弱い女の頼み事、屹度貴方は肯いて下さるでせう。氣強いはかりが宣傳使のお役でもムいますまい」
と退ツ引ならぬ釘鋸、三千彦も姫の窮状を見て、只俯向いて吐息をついて居た。
怪しき猛獸の聲は刻々身邊に近寄る如く聞えて來た。

三千彦は如何はせむと、とつおいつ思案に暮れて居たが、
三千「エ、ままよ、人を救ふは宣傳使の役、假令罪惡に問はれて根底の國に落されようとも、此可憐な女を見捨てて行かれようか。神素盞鳴の大神様は世人の爲、千座の置戸を負ひ給ひしと聞く。吾も大神の流れを汲んで世を救ふ宣傳使なれば、千座の置戸を甘んじて受けむ。吾身の罪を恐れて人を救はざるは却て神の御怒りに觸れようも知れぬ。初稚姫様のお言葉は、或は吾々の心を試されたのではないだらうか。神ならぬ吾々、どうして正邪善惡の區別がつかう。只吾々が心

で最善と思つた處を、ドシドシ行ふのが吾々の務めだ。男子は斷の一字が寶だ。小さい事に心ひかれて躊躇逡巡する事はない。私が此ブラワゝ一ダ姫を見捨てて行かうものなら、必ず猛獸の餌食になつて了ふであらう。萬々一私が罪人の群に落ちて救はねばならぬ」

と大勇猛心を起し、ブラワゝ一ダ姫の背を撫でながら、三千姫様、必ず御心配なさいますな。神様の教は一人旅でなければならぬと仰せられました。苟くも男子として孱弱き女の身を只一人見捨てて行かれませう。貴女を救ふた爲、私が神の怒りに觸れ、根底の國に落ちようと男の意地、覺悟の前でムいます。さア私が背に負ふて此急坂を越えさして上げませう。決して御心配なさいますな。三千彦は最早覺悟を致しました」

ブラワゝ一ダ姫は嬉しげに、

「あゝ世界に鬼は無いとやら、三千彦様、よう云つて下さいました。貴方は妾を助けて、假令根底の國に落ちるとも構はないと仰有いましたな。ほんに親切な宣傳使、妾も貴方の爲には假令根底の國に落ちようとも、少しも怨みとは思ひませ

ぬ。貴方のやさしいお言葉は、幾萬年の喜びを集めても代へ難く存じます。と俄に妙な心になつて、乙女心のフラフラと三千彦の胸に矢庭に喰ひつき、頬に口づけをした。

三千彦は驚いて後に飛び去り、

三千彦「これはしたり、ブラワグーダ様、左様な事を遊ばすと、それこそ天則違反になりますから、慎んで貰ひ度うムいます」

ブラワグーダ「妾は最早此通り手足も儘ならぬ身の上、どうせ死なねばならぬ此體、假令貴方に負はれて此坂を無事に越されても、到底エルサレムへ行く事が出来ずまい。最早死を決した妾、いとしい戀しい貴方の體に觸れて死にましたら、最はや此世に残りはムいませぬ」

と犇々と泣き崩るる其可憐らしさ。三千彦は當惑の目をしばたたき、

三千彦「あゝ流石は女だな。まだ年も行かぬから無理もないだらうが、こりや又えらい事に出會したものだ。エー、仕方がない。ブラワグーダ様、貴女の自由になさいませ。三千彦も覺悟を致して居ります」

ブラワゝーダは戀しき、懐しき、三千彦の胸にピタリと抱きついて慄ふて居る。そこへ下の方からスタスタやつて来た一人の女は、折悪くもデビス姫であつた。デビス姫は此態を見て眉を逆立て乍ら、グツと睨まへて居る。三千彦、ブラワゝーダは一生懸命に抱きついて泣いて居るので、デビス姫が吾前に立つて居るのも氣がつかなくかつた。

ブラワゝーダは蚊の泣く様な聲で三千彦の胸に抱かれ、兩の手で頬を撫で乍ら、ブラワゝーダ「神徳高き三千彦様、何卒妾を末永く可愛がつて下さいませ。どうやら足の痛みも、貴方の御親切にして下さつた嬉しさで、忘れたやうでムいます。あゝ俄に氣分がサラリとして参りました。貴方にはデビス姫様と云ふ立派な奥様がおありですから、どうせ末は遂げられませぬが、せめてお心にかけて下されば、それで結構でムいます」

三千「ブラワゝーダ様、貴女は本當に可愛いですね。然し乍ら貴女の仰有る通り、私には不束な女房を持つて居りますから、到底貴女と添ひ遂げる事は出来ませぬ。又私の友人なる伊太彦の妻とお成り遊ばした以上は、友人に對しても、どうして

之が……貴女と添ふ事が出来ませう。貴女も愛しますが友人の伊太彦は層一層私
は愛して居ります」

ブラワゝーダ「ハイ、よう云ふて下さいました。何卒左様なれば心の夫婦となつ
て下さいませぬか」

三千「あゝどうしたら宜からうかな。こんな事を聞くとデビス姫を女房に持った
が怨めしうなつて来た。何故私は伊太彦と朋友の縁を結んだのだらう。實に儘な
らぬ世の中だな。こんな處をデビスが見ようものなら何程心の好い彼女でも屹度
腹を立てるであらう。エーもう構はぬ、デビス姫でも伊太彦でも来るなら來れ、
三千彦は此女の爲に罪人となる覺悟だ」

ブラワゝーダ「死出三途、針の山、血の池地獄でも、貴方とならチツとも厭ひは
致しませぬわ」

三千彦は何となく心臓の鼓動烈しく、息苦しきやうになつて來た。そして顔一
面恥しさと嬉しさの焰が燃えて、俄に暑くなり舌さへ乾いて來た。

兩人は目も狂ふ許り「うつつ」となつて、今や戀の魔の手に因はれむとする時、

「若草の妻の命を振り棄てて

薊の花に心うつしつ。

デビス姫誰も手折らぬ鬼薊と

嫌はせ給ふか怨めしの聲」

三千彦は此聲にハツと氣がつき、よくよく見れば紛ふ方なきデビス姫が吾前に立つて居る。

三千「ヤアお前はデビス姫ぢやないか、そこで何をして居る、不都合千萬な」と狼狽へ紛れに反對に叱りつける。

デビス「オホ、、、、三千彦様の凄腕には此デビスも驚きました。愛のない結婚は却て貴方に對し御迷惑様、それよりも妾は之よりエルサレムに駆け向ひ、玉國別の師の君にお目にかかり、此實状を包まず隠さず申し上げますからお覺悟なさいませや」

三千「やア、デビス姫、さう怒つては呉れな。決してお前に愛が薄くなつたので

はない、今も今とてお前の事を思ひ煩つて居た所だ。さうした所がブラワゝーダ
姫が此處に倒れて居たため、介抱を一寸申上げた處、こんな狂言が出来たのだ。
夕カガ十六才の小娘、私だつてお前と見換る様な馬鹿な事はせないから、ここは
神直日大直日に見直して機嫌を直して呉れ」
デビス「案に相違の貴方の爲され方、妾も女の端くれ、男子の玩弄物にはなりま
せぬ。然し乍ら貴方は妾の命の親様、決してお怨みは申しませぬ。妾は只貴方様
のお氣に召すやうにして上げ度いのが本心でムいますから、自分の愛を犠牲に致
します。何卒ブラワゝーダ様を大切に、末永く添ひ遂げて下さいませ。斯う
なつたのも皆妾が貴方に對する愛が足らなかつた爲です。そして貴方が天則違反
の罪におなりなさらぬやうに妾は今ここで命を捨てて罪の身代りになります」
三千「一寸待つて呉れ。さう短氣を出すものではない。これには深い譯があるの
だ。お前は今來たので、前後の事情を知らぬからさう云ふのだが、ブラワゝーダ
姫と私の間は潔白なものだ。惚れたの、好いたのと譯が違ふ。決して惚れはせぬ
から安心して呉れ」

デビス「オホ、、菖蒲と杜若とどれ丈け違ひますか、烏賊と鰯と、どれ丈けの區別がムいますか」

三千「いかにも章魚にも蟹にも足は四人前だ、アハ、、、」

と笑ひに紛らさうとする。

デビス「三千彦さま、措きなさいませ。そんな事で誤魔化さうとしても駄目ですよ。それよりも男らしう「デビス、お前に愛が無くなつたから別れて呉れ」と仰有つて下さい。蛇の生殺は殺生でムいますからな」

ブラワ「ーダ「もしデビス姫様、何事も妾が悪いのでムいます。三千彦様の罪ぢやムいませぬ、妾も危ない所を助けられ、その嬉しさに前後も忘れ、つひ戀の魔の手に因はれて妙な考へを起しましたが、今貴女のお顔を見るにつけ氣の毒で、身につまされて、坐ても立つても居れなくなりしました。何卒三千彦様と仲よく添ふて下さい。妾は貴方に對する言ひ譯の爲めここで自害して相果てます。三千彦様、之が此世のお別れ」

と云ふより早く守刀を取り出し、今や自害をなさむとする時しも、天空を焦して

くだり来たる大火團は忽ち三人の前に落下し、轟然たる響と共に爆發して火花を四方に散らした。三千彦、ブラワ、ダの二人はアツと呆れて路上に倒れて了つた。今迄デビス姫と見えしは容色端麗なる一柱の女神であつた。女神は言葉靜かに兩人に向ひ、

女神「妾こそは天教山に鎮まる木花咲耶姫命であるぞよ。汝三千彦、ブラワ、ダの兩人、ハルセイ山の惡魔に良心を攪亂され、今や大罪を犯さむとせし所、汝等の罪を救ふべくデビス姫と化相して、汝の迷夢を覺まし與へしぞ。以後は必ず慎んだがよからう。神は決して汝等を憎みは致さぬ、過失を二度なす勿れ」
と言葉嚴かに諭し給ふた。二人はハツと平伏し、
「ハイ有難う」
と僅に云つたきり、その場に泣き入るのみであつた。

三千彦「三五の神の恵みは何處迄も

吾魂を守り給ひぬ。

若草わかくさの妻つまの命みことと現あらはれて

教をしへ給たまひし神かみぞ尊たふとき

ブラワ、一ひめダ姫ひめ「戀こひぐも雲ぐもも今いまは漸やうやく晴はれ行ゆきぬ

天津あまつ御空みそらを照てらす光ひかりに。

火ひの玉たまとなりて下くだりし姫ひめがみ神かみの

御心みこころ思おもへばいと尊たふとし。

何故なにゆゑか怪あやしき雲ぐもに襲おそはれて

人夫ひとづま戀こひし吾われぞ悔くやしき

三千みちひこ彦ひこ「よしや身みは根底ねそこの國くにに落おつるとも

汝救なれすくはむと思おもひけるかな。

皇神すめがみの掟おきての綱つなに縛しばられて

身みの苦くるしさを味あぢはふ今日けふかな。

いざさらばブラワゝ一ダ姫ひめよ三千彦みちひこは

汝なれに別わかれて一人ひとり行ゆかなむ

ブラワゝ一ダ姫ひめ「なつかしき教をしへの君きみに立別たちわかれ

戀こひの山路やまぢを登のぼりてや行ゆかむ

斯かく互たがひに述懐じゆつくわいを宣のべ乍ながら袂たもとを別わかち、三千彦みちひこはブラワゝ一ダ姫ひめの追付おつかぬやうと
上のぼり坂ざかを急いそぎ行ゆく。ブラワゝ一ダ姫ひめは又また追付おひいては却かへつて三千彦みちひこに迷惑めいわくをし知し
れずと、故意わざとに足許あしもとを遅おそくして神歌しんかを唱となへ乍ながら上のぼり行ゆく。

(大正一二・五・二九 舊四・一四 於天聲社 北村隆光録)

第二章 蚯蚓の聲（一六二九）

大き正しき癸の

亥年卯月の十四日

新に建ちし天聲社

二階の一間に立て籠もり

口述臺に横臥して

遠き神世の物語

彌六十三卷の

夢物語述べてゆく

御空は清く地青く

垂柳は肅然と

戦ぎもしない夕間暮

三五教の宣傳使

玉國別の一行が

齋苑の館を立ち出て

諸の悩みに遇ひ乍ら

スーラヤ山に鎮まれる

ナーガラシャの瑞寶を

教の御子の伊太彦に

受け取らせつつ海原を

漸く越えてエル港

茲に一行恙なく

無事な顔をば合せつつ

前途ぜんとの光明くわうみやう樂たのしみて
聖地せいちに向むかうて出いでむとす

神かみの司つかさの初はつ稚わか姫かひめが
木花このはな姫ひめの勅みこともて

百千ももちよろづ萬のりごとの宣のりごと言を
宣のらせたまへば三千みちひこ彦も

また伊いた太た彦ひこも謹つつしみて
妹いもの命みことと立たち別わかれ

各おのも自おのも々も々もに唯ただ一ひとり人り
聖地せいちを指さして進すすみ往ゆく

道みちに起おこりし物ものがたり語り
いと細こま々ごまと述のべてゆく。

豊とよ葦あし原はらの中なか津つく國くに
大日おほひの下もとの聖せい場ぢやうと

遠とほき神かみ代よの昔むかしより
定さだまり居ゐますエルサレム

珍うづの聖せい地ちに名なも高たかき
黄金わうごん山さんに現あれませる

野の立だちの彦ひこや野の立だち姫ひめ
御み靈たまの變へん化げ在まして

埴はに安やす彦ひこや埴はに安やす姫ひめと
世よに現あらはれて三あ五なの

珍うづの教をしへを垂たれたまふ

其その大御旨おほみむねを畏かしこみて

神素かむすさ盞の鳴をの大おほ神かみは

島しまの八十やそ島しま八十やその國くに

由緒ゆゑの深ふかき靈場れいぢやうに

教をしへの園そのを開ひらきまし

數多あまたの司つかさを教養けうやうし

仁慈じんじ無限むげんの御教をしへを

開ひらかせたまふ尊たふとさよ

バラモン教けうを守護しゆごうする

八岐やまた大蛇をろちや醜鬼しこおにの

醜しこの御靈みたまを言向ことむけて

汚けがれ果はてたる地ちの上うへを

神かみの御國みくにに立たて直なほし

妬ねたみ嫉そねみや恨うらみなき

誠まこと一ひとつの神かみの代よを

作つくらむために千萬ちよろづの

艱なやみを恐おそれず遠近をちこちと

玉たまの御身おんみを碎くだきつつ

勵はげませたまふ尊たふとさよ

旭あさひは照てるとも曇くもるとも

月つきは盈みつとも虧かくるとも

假令たとへ大地だいちは沈しづむとも

三五あななひけう教をしへの御教をしへは

幾萬いくまん劫ごふの末迄すゑまで

宇宙うちうと共ともに變かはらまじ

あゝ惟かむながら神かみ々々

神かみの御稜威みいつの有難ありがたき。

若葉も戦ぐ神の園

梅は梢に青々と

頭を竝べて泰平の

ミロクの御代を謠ひつつ

池に泛べる魚族は

惠の露を湛へたる

金龍池に悠々と

曇りし世界を知らず氣に

いとたのもしく遊び居る

月は御空に皎々と

輝きたまひ神苑を

隈なく照らし給へども

木下の闇に潛むなる

曲の猛びは未だ絶えず

神に體も魂も

供へきつたる瑞月は

體の筋や骨までも

メキメキメキと痛めつつ

闇に迷へる世の人を

救はむ爲に朝夕に

心を千々に砕けども

知る人稀な今の世は

救はむよしも荒浪に

漂ふ船の如くなり

あゝ惟神々々かむながらかむながら

御靈幸倍ましませよ。みたまさちはへ

朝あさな夕ゆふなに身みを碎くだき

教をしへ御祖みおやの殘のこされし

生いける教をしへを委まつ曲ぶさに

説とき論さとさむと朝あさ夕ゆふに

神かみの御前みまへに太祝ふとのり詞こと

清きよき願ねがひを掛かけ卷まくも

畏かしこき瑞みづの御心みこころを

知しらぬ信まめ徒ひと多おほくして

夏なつの若葉わかばの木下こした闇やみ

騒さわぎ廻まはるぞうたてけれ。

和わ知ちの河かは水みづ涼そう々そうと

彌いや永とこ久しへに御み惠めぐみの

露つゆを湛たたへて流ながるれど

瑞みづの御靈みたまにヨルダンの

清き清水を汲む人ぞ
いと稀なる今の世は

清き尊き皇神の
教を軽んじ疎みつつ

日頃の主張も打ち忘れ
いろいろ雑多と口實を

設けて逃げ出すうたてさよ
皇大神の御教に

高天原の大本は
三千世界を天國に

渡す世界の大橋と
教へられたる言の葉を

空吹く風と聞き流し
大橋越えてまだ先へ

行方も知らぬ醜靈の
身の行先ぞ憐れなり

皇大神の試練に
遇ひて漸く眼さめ

悔い改めてかへるとも
白米に粃の混るごと

何とはなしに疎ましく
初の如くなきままに

又もや醜の曲津靈は
高天原の大本は

必要の時は大切に
扱ひ旨く使ひつつ

一人歩みが出来だせば
素知らぬ顔の半兵衛を

極めこむ所とそしりつつ
泡吹き熱吹き末遂に

あてども知らぬ法螺を吹き
煙の如く消えて往く

誠の足らぬ偽信者
神の教を現界の

皆法則にあて箝めて
眞理ぢや非眞理ぢや不合理と

愚癡を唱ふる可笑しさよ
何程知識の秀でたる

物識人も目に見えぬ
神の世界の有様や

全智全能の大神の
御心如何で解るべき

慢心するのも程がある
唯何事も人の世は

皇大神の御心に
任せて進めば怪我はなし

あゝ惟神々々
御靈の恩頼を願ぎまつる。

科學を基礎とせなくては

神の存在經綸を

承認しやうにんせないと鼻高はなだかが
己おのれが愚ぐをも知らずして
構かまへ居ゐるこそをかしけれ
机つくゑの上うへにて習ならひたる
實地じつちに間まに合あふ筈はずがない
いとあざやかに示しめすとも
出来できねば恰あたかも水みづの泡あわ
境遇きやうぐいに迷まよふ亡者まうじやなり
肉にくの眼まなこは開ひらけども
心こころの眼まなこ暗くらくして
一いちも二にもなく智ち慧ゑ學がくを
唯一ゆゑいつの武器ぶきと飾かざりつつ
進すすむみ靈たまぞ憐あはれなり。

下くだらぬ屁理窟へりくつ竝ならべ立たて
世界せかいに於おける覺者かくしやぞと
學まなびの家いへに通かよひつめ
烟水はたけすいれん練なまびやうはふ
口くちや筆ふでには何事なにごとも
肝腎かんじん要かなめの行おこなひが
夢ゆめか現うつつか幻まぼろしの
肉にくの眼まなこは開ひらけども
一いちも二にもなく智ち慧ゑ學がくを

山河草木さんかさうもく三みつの卷まき

彌々いよいよ茲こゝに述のべ終をはる

又瑞月またずるげつが出鱈目でたらめを吐ほくと陰口かげぐち叩たたくもの

彼方あちら此方こちらに出でるであらう 著述ちよじゆつの苦勞くらうの味あぢ知らぬ

文盲もんまう學者がくしやや仇人あだびとの如何いかで悟さとらむ此この苦勞くらう

如何いかに天地てんちの神々かみがみが吾身わがみを助たすけたまふとも

神かみより受けし魂たましひの意志いしと想念さうねん光ひからねば

唯一言ただひとことの口述こうじゆつも安やすくなし得うるものでない

神かみの苦勞くらうも白浪しらなみの上うへに漂ただよふ浮草うきぐさの

心定こころさだめぬ人々ひとびとの嘔ひそきこそはうたてけれ

世界せかいに著者ちよしやは多くとも 一日ひとひに數萬すまんの言ことの葉はを

口述こうじゆつ筆記ひつぎするものは 開闢かいびやく以來いら例ためなし

作りし文ふみの巧拙かうせつを 云々うんぬんするは未まだしもと

許ゆるしもなるが一概いちがいに この瑞月ずるげつが物好ものずきに

下くだらぬ屁理窟へりくつ竝ならべ立たて 心こころに積つもりし鬱憤うつぶんを

神かみによそへて歌うたふなぞ 分わからぬ事ことを云いふ人ひとが

神かみの教をしへの中なかにある

かかる汚きたなき人々ひとびとは

吾身わがみの欲よくに絆ほたされて

表面うはへに神かみを伏ふし拜をがみ

棚たなから牡丹餅ぼたんもちおち來きたる

時節じせつを待まつよなやり方かたぞ

世よの立替たてかへや立直たてなほし

今いまぢや早はやぢやと書かくなれば

耳みみを聳そばだて目めを丸まるめ

口くちとが尖とがらして讀よむだらう

そんな事ことのみ一心いつしんに

待まち暮くらすのは曲津神まがつかみ

世よの禍わざはひを待まつものぞ

大慈だいじ大悲だいいひの大神おほかみは

世界せかいに何事なにこと無なきやうと

朝あさな夕ゆふなに御心みこころを

配くばらせたまひ大本おほもとの

教をしへ御祖みおやは朝夕あさゆふに

世界せかいの難儀なんぎを救すくはむと

赤心まごころこめて祈のりましぬ

其御心そのみこころも知しらずして

世界せかいの大望たいまう待まち暮くらす

人ひとは大蛇をろちか曲鬼まがおにか

譬方たとへがたなき者ものぞかし

あゝ惟かむながら神々かむながら々々

神かみの御前みまへに平伏ひれふして

此聖場このせいぢやうに寄より集つどふ

信徒達まめひとたちの魂たましひに

まことの光ひかりを與あたへつつ 耳みみをば清きよめ目を照てらし

天あまの瓊ぬほこ銚さはやを爽さほかに 研みがかせたまひて言こと靈たまの

御み稜いづ威を四方よもに輝てらすべく 守まもらせたまへと朝あさ夕ゆふに

體からだの骨ほねを痛いためつつ 一いつ心しん不ふ亂らんに願ねぎまつる

あゝ惟かむながらかむながら神々々々々 大國おほくに常立とこたち大御神おほみかみ

豊國とよくに姫ひめの大御神おほみかみ 天津あまつ御空みそらに永とこ久しへに

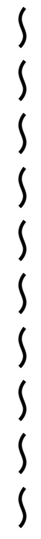
鎮しづまりたまふ日ひの御神みかみ 月つきの御神みかみの御前おんまへに

世よの有様ありさまを歎なげきつつ 密ひそかに一人ひとり願ねぎまつる

あゝ惟かむながらかむながら神々々々々 御靈みたま幸さち倍はへましませよ。

(大正一二・五・二九 舊四・一四 於天聲社 加藤明子録)

(昭和一〇・六・一六 王仁校正)



靈界物語 第六三卷 山河草木 寅の巻
終り